岐阜県文化財保護センター調査報告書　第43集

沖　田　遺　跡

県営土地改良総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

岐阜県農政部飛騨土地改良事業所
財団法人　岐阜県文化財保護センター

沖田遺跡全景

アカホヤ火山灰

序

岐阜県萩原町には、古くから人々が生活してきた痕跡が残されています。特に飛騨川が形成する段丘上には、数多くの縄文遺跡が確認されています。これまでにも、そのいくつかが発掘調査されています。沖田遺跡もそのひとつです。1973年の調査では、縄文時代早期の土器や前期末から中期までの遺構遺物が検出され飛騨川水系の縄文文化を研究する手がかりとなっていました。

このたび、岐阜県農政部飛騨土地改良事業所が行う県営土地改良総合整備事業に伴い、1973年に発掘調査された遺跡の広がりが工事予定地内に伸びている可能性が高いため発掘調査を実施いたしました。発掘調査は、岐阜県土地改良事業所から岐阜県教育委員会に委託され、財団法人岐阜県文化財保護センターが担当しました。

今回の調査では、縄文時代の遺跡の広がりが確認されただけでなく、近世の堀立柱建物跡なども検出され、この地域の歴史を探る上で貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、発掘調査および出土品の整理・報告書の作成にあたりましては、関係諸機関各位の温かいご理解ご協力を賜り感謝申し上げます。また、現地における調査に際しましては、地元の方々の多大なるご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

平成10年3月

財団法人　岐阜県文化財保護センター

理事長　篠　田　幸　男

例　　言

1．本書は、岐阜県益田郡萩原町西上田に所在する沖田遺跡（県遺跡番号G16H00867）の発掘調査報告書である。

2．本発掘調査は、県営土地改良総合整備に伴う発掘調査である。岐阜県より委託を受け、財団法人岐阜県文化財保護センターが調査を実施した。

3．発掘調査は、平成９年度に実施し、上出巳吉が担当した。

4．本書の執筆は、第２章第１節は藤岡比呂志が、第３章第５節２は小野木学が、第４章は藤根久、古橋美智子が執筆し、その他は上出が担当した。また、編集は上出が行った。

5．本書に記載した遺物の実測は、次の者が行った。

　土器　　垣添敦子　大西和子

　陶器類　瀬戸幸子

　石器　　牛丸富士子　上出巳吉

6．遺構・遺物などのトレースは、次の者が行った。

　中村映子　脇渕純子　牛丸富士子

7．遺物の写真撮影は、佐藤右文氏（奈良県在住）に委託して行った。

8．事前地形測量は、㈱サーベイヤー・コンサルタントに委託して行った。

9．空中写真撮影は、㈱イビソクに委託して行った。

10．火山ガラスの分析は㈱パレオ・ラボに委託して行った。

11．発掘調査及び報告書の作成にあたって、次の方々や諸機関からご助言・ご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・順不同）

　萩原町教育委員会　高山市教育委員会　田中　彰氏

12．発掘調査作業ならびに調査記録及び出土品の整理等には、次の方々の参加・協力を得た。

　高橋公芳　高橋なよ　瓜田英明　白川良平　三村昇子　岩佐　勇　谷畠喜代三

　玉田忠男　西田正三　奥田三良　中谷義男　大西和子　垣添敦子　牛丸富士子

　脇渕純子　中村映子　瀬戸幸子　清田由美子　八賀哲夫

13．方位は座標北を使用している。

14．遺構記号は次の通りである。　ＳＢ：住居跡　ＳＫ：土坑　Ｐ：ピット

15．土層及び遺物の色調観察は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』(1993) を参照した。

16．調査記録及び出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

目　次

序
例　言
第１章　発掘調査の経緯
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　発掘調査の経緯 …… 2
第２章　遺跡の環境
　第１節　自然環境 …… 4
　　1　沖田遺跡周辺の地形 …… 4
　　2　沖田遺跡周辺の地質 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 9
第３章　調査の概要
　第１節　調査の概要 …… 11
　第２節　基本的層序 …… 11
　第３節　縄文の遺構と出土遺物 …… 15
　　1　竪穴住居 …… 15
　　2　土　坑 …… 21
　　3　その他の遺構 …… 25
　第４節　包含層出土遺物 …… 30
　　1　土　器 …… 30
　　2　石　器 …… 34
　第５節　古代以降の遺構と遺物 …… 41
　　1　掘立柱建物跡と土坑 …… 41
　　2　古代以降の遺物 …… 43
第４章　アカホヤ火山灰の分析
　　1　試料と分析方法 …… 46
　　2　分析結果 …… 46
　　3　テフラの同定 …… 46
　　4　中部地方の遺跡におけるＫ－Ａｈと考古遺物との関係 …… 47
第５章　結　語 …… 48
引用・参考文献 …… 49

図版目次

図版１　遠景・近景・調査前後の全景・表土剥ぎ
図版２　作業風景・不明遺構・集石遺構・地層断面図
図版３　１号・２号住居跡・遺物出土状況・ＳＫ16
図版４　堀立柱建物跡・風倒木痕・ＳＫ３・トレンチ掘①・②
図版５　第１号住居跡　出土石器・土器
図版６　第２号住居跡　出土石器・土器
図版７　土坑　出土石器①・②
図版８　土坑　出土土器①表裏
図版９　土坑　出土土器②・③
図版10　包含層　出土土器①・②
図版11　包含層　出土土器③・石器①
図版12　包含層　出土石器②・③
図版13　古代以降の遺物
図版14　グリッド壁面のアカホヤ火山灰・顕微鏡写真図

表目次

第１表　沖田遺跡周辺の縄文遺跡表 …… 10
第２表　土坑観察表 …… 29
第３表　古代以降の遺物観察表 …… 44
第４表　遺構出土石器一覧表 …… 50
第５表　包含層出土石器一覧表① …… 51
第６表　包含層出土石器一覧表② …… 52

写真

写真１　江戸時代絵地図 …… 42

挿図目次

第１図　沖田遺跡の位置 …… 1
第２図　グリッド（区）設定図 …… 3
第３図　沖田遺跡周辺の地形図 …… 5
第４図　沖田遺跡周辺の接峰面図 …… 6
第５図　飛騨川沿いにおける段丘及び扇状地の平面分布図 …… 7
第６図　飛騨川沿いにおける段丘面の垂直分布図 …… 7
第７図　沖田遺跡周辺の地質図 …… 8
第８図　沖田遺跡周辺の縄文遺跡図 …… 10
第９図　沖田遺跡土層断面図① …… 12

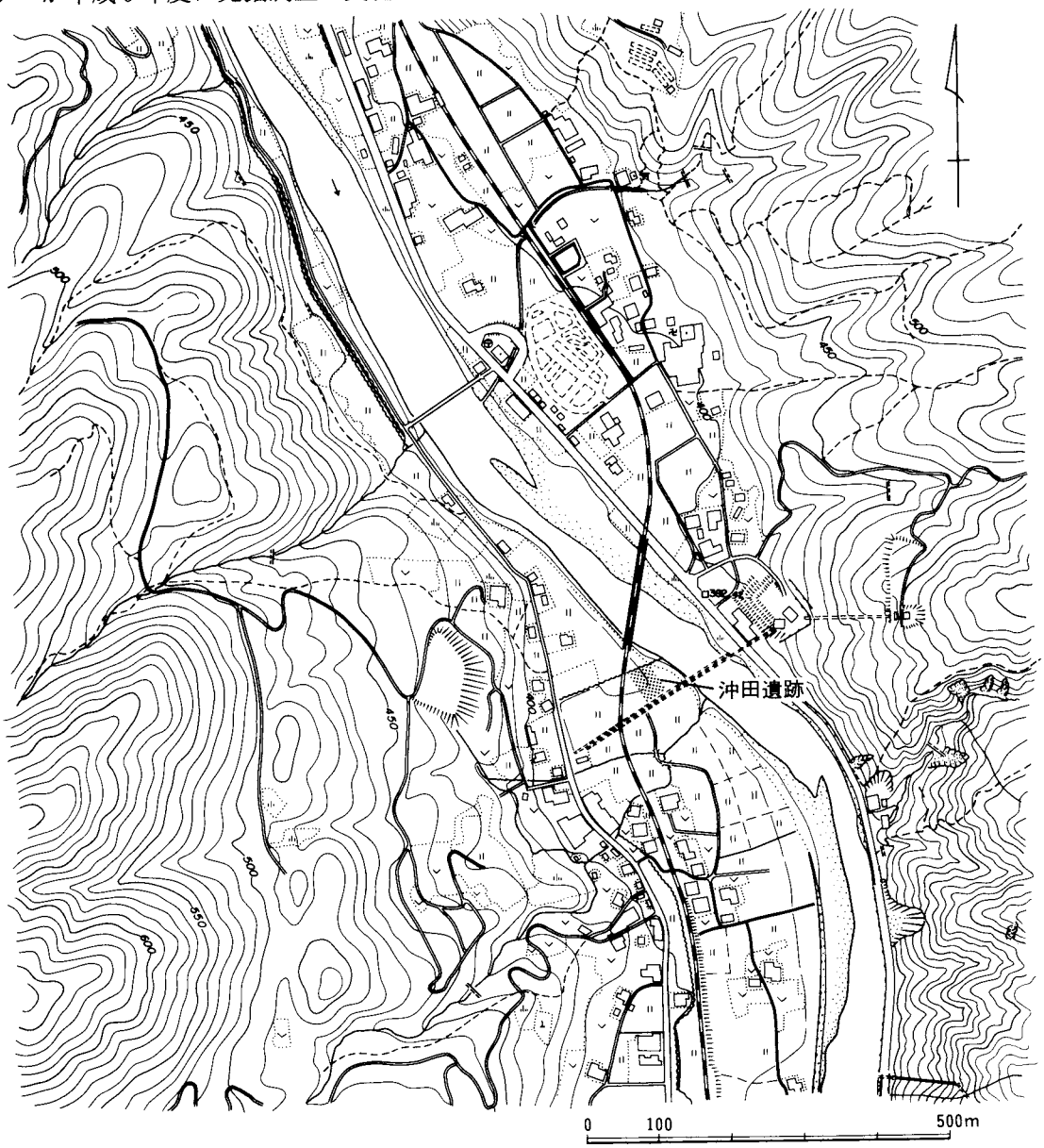
第10図　沖田遺跡土層断面図②　……　13
第11図　沖田遺跡遺構全体図　……　14
第12図　第１号住居跡　……　15
第13図　第１号住居跡遺物出土状況　……　16
第14図　第１号住居跡出土遺物　……　17
第15図　第２号住居跡　……　18
第16図　第２号住居跡出土遺物　……　20
第17図　ＳＫ12・ＳＫ13　……　22
第18図　土坑出土遺物①　……　23
第19図　土坑出土遺物②　……　24
第20図　ＳＫ16　……　24
第21図　土坑出土遺物③　……　25
第22図　土坑①　……　26
第23図　土坑②　……　27
第24図　土坑③　……　28
第25図　土坑④　……　29
第26図　包含層出土土器①　……　32
第27図　包含層出土土器②　……　33
第28図　石鏃の分類　……　34
第29図　包含層出土石器①　……　36
第30図　包含層出土石器②　……　37
第31図　包含層出土石器③　……　39
第32図　打製石斧の折損部位　……　39
第33図　包含層出土石器④　……　40
第34図　ＳＫ３　……　41
第35図　掘立柱建物跡　……　42
第36図　古代以降の遺物　……　45

第１章　発掘調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

本遺跡は、益田郡萩原町西上田に所在し、飛騨川右岸の段丘上に位置する。昭和10年の開田工事の際に縄文式土器が出土し石組み遺構が検出されている。その後、昭和48年に中部電力の用水工事のための発掘調査が、萩原町教育委員会によって行われ、縄文早期の土器や縄文中期の遺構・遺物が検出されている。本遺跡はその調査された場所に隣接し、遺跡の広がりが見られた。

今回の土地改良に伴い、本遺跡が農道と化するためにその範囲450㎡を調査することになった。岐阜県農政部飛騨土地改良事業所から岐阜県教育委員会文化課を通じて委託を受け、岐阜県文化財保護センターが平成９年度に発掘調査を実施した。



第１図　沖田遺跡の位置

第２節　発掘調査の経緯

今回の沖田遺跡は、1997年（平成９年）５月中旬～８月上旬の約３ケ月間にわたって発掘調査を実施した。４月中に調査の準備をして、４月30日に重機にて表土となる第Ｉ層を剥いだ。当地は長年水田として利用されてきたが、ここ数年は耕作地として利用していなかったために地中に根が入り込んでいた。５月に入り現場事務所を設営し用具の搬入をした。以下、週ごとに調査経過を記述する。

第１週（5.12～5.16）　12日関係者が集まり始め式を行った。調査周辺の安全確保のために看板やトラロープなどを適所に設置した。作業員に対し遺物の種類や特徴、遺構検出の調査方法について指導した。また、グリッド（区）を設定し杭打ちを行った。

第２週（5.19～5.23）　段になっている水田の法面のＢ１～Ｂ13区までとＢ13～Ｃ13区の断面を掘削し地層の断面図をとり写真を撮った。層位は10層まで確認した。Ｂ３～Ｂ４区の間で住居跡（ＳＢ１）の断面を確認した。また、５層の砂層にオレンジ色した土の堆積を確認する。アカホヤ火山灰の可能性あり。

第３週（5.26～5.29）　３カ所Ｂ１～Ｄ１区とＢ６～Ｄ６区とＢ13～Ｄ13区にトレンチを入れ掘削する。１層（耕作土）の下に鉄分を多く含み赤みを帯びた敷き土のラインまで掘削した。そのラインまで掘削すると各Ｃ・Ｄグリッドから３層が見えだし、耕作のために２層の包含層が削られていることが分かった。アカホヤ火山灰の土壌分析をパレオ・ラボに委託した。

第４週（6.2～6.6）　ＢＣＤ１～ＢＣＤ７区まで土坑の確認をしながら掘削を始めた。３層（黄褐色の砂地）の上部まで掘削すると、黒褐色の土坑やピットの様子を確認する事ができた。

第５週（6.9～6.13）　ＢＣＤ８～ＢＣＤ13区の掘削をはじめ、Ｂ10に住居跡（ＳＢ２）が見えてきた。また、ＳＢ２の周囲にも多くの土坑が見えてきた。Ａ６にて石を多く含む土坑（ＳＫ16）を確認した。

第６週（6.16～6.19）　ＳＢ１の北側（Ｂ４）より縄文の遺物が多く出土した。ＳＢ１とＳＫ12、ＳＫ13が重なっていた。ＳＢ１の断面実測を行った。

第７週（6.24～6.27）　Ｄ11～Ｄ12区のピットより偏平な石が出土した。堀立柱建物跡（ＳＢ３）の柱の礎石と考えられ、ピットの間隔がそれぞれ２ｍ離れ計８個の石を含んでいた。ＳＢ２では炉の確認はできなかったが、住居跡の柱穴と思われるピットを確認した。

第８週（6.30～7.4）　ＳＫ３の土坑より赤みのある素焼きの陶器が出土した。Ｃ１区より焼礫の集石が見られた。梅雨のため発掘調査があまり進まなかった。

第９週（7.7～7.12）　ＳＫ16の土坑に焼石が入っていた。ＳＢ１に２つの土坑が重なっていたが、それぞれの形が確認できた。連日の雨のため発掘調査が進行しなかった。
７月12日（土曜日）現地説明会を実施した。

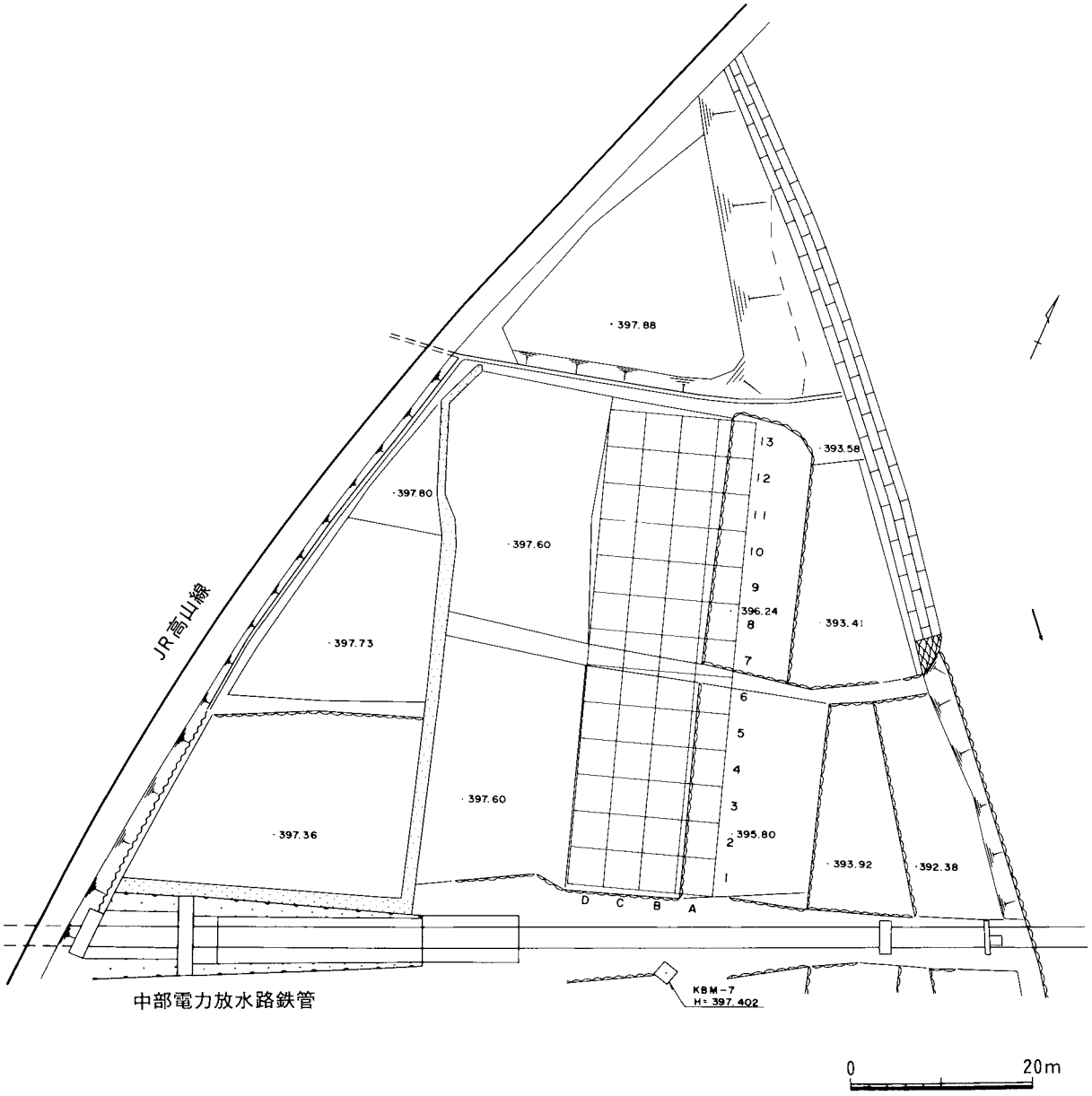
第10週（7.14～7.18）　ＳＫ３の遺物を取り上げ、土坑を完掘した。素焼きの陶器は底部がなかった。他の土坑についても半割し実測をした。堀立柱建物跡の実測をして写真を撮影した。ＢＣＤ６区のトレンチ掘りよりアカホヤ火山灰の層が出土した。

第11週（7.22～7.25）　７月22日空撮を行い、その後全土坑を完掘した。ＢＣＤ１区のトレンチ掘り部分では５層でアカホヤ火山灰を確認後、10層の河床まで掘削した。

７月25日　プレハブや道具を撤収し、発掘作業員による発掘調査は終了した。

第12週（7.28～8.8）　土坑の断面実測を行い、写真を撮影した。

以後、財団法人岐阜県文化財保護センター飛騨出張所にて整理作業に入った。



第２図　グリッド(区)設定図

第２章　遺跡の環境

第１節　自然環境

1　沖田遺跡周辺の地形

本調査地域は、飛騨川右岸沿いに位置する。飛騨川は、飛騨山地を源流とし、木曽川水系に属している。萩原町のほぼ中央を流れる飛騨川とその支流の山之口川は、ほぼ南北に直線状の流れを呈している。また、飛騨川、山之口川の２～３km西側には、主要な山稜が川と平行に直線状に並んでいる。

第４図に沖田遺跡周辺の接峰面図を示した。この図で示されるように、標高800～1600ｍの高度をもつ山岳部は、やや侵食の進んだ地形であり、800～1200ｍの高度をもつ平坦な地形が随所に見られる。飛騨川とその支流の山之口川に沿って西側に並んでいる山稜は、北方より南方に向かって次第に高度を低減させている。

萩原町の飛騨川沿いには、大規模な河岸段丘や扇状地が多く発達している。特に扇状地は、谷の小規模な流域面積のわりに大きい。これは阿寺断層等の運動が大きく影響しているためと考えられる。この地域は、周囲が山に囲まれているにもかかわらず、平坦な場所が多い所である。

萩原町では、３段の段丘面とその下位に１段の面（沖積層による面）が存在する。第５図は段丘及び扇状地の平面分布を、第６図は段丘の垂直分布を示した。ただし、第５図において、段丘面と扇状地面は入り組んでいる所があるため区別をせずに記入した。また、第６図に関しては、25,000分の１の地形図から高度を読み取った値であるため、数ｍの誤差は含まれている。

本調査地域は、現河川から約8.5ｍの高度であり、一番下位の面に位置する。本調査地域の段丘面は、飛騨川に沿って右岸に南北に長く広がっており、南北約1000ｍ、東西約200～350ｍの広がりをもっている。

2　沖田遺跡周辺の地質

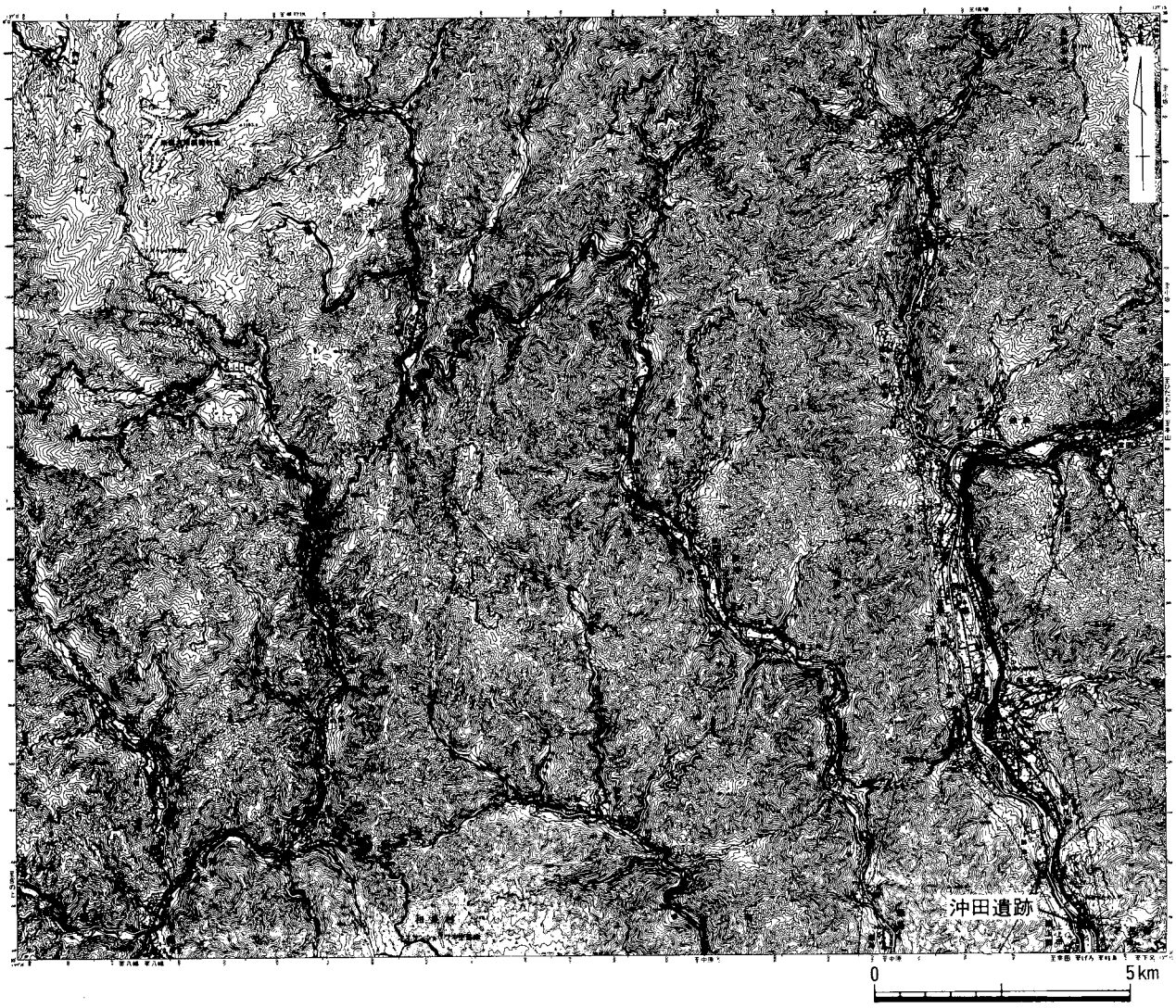
沖田遺跡周辺の地質図を第７図に示した。沖田遺跡の東を流れる飛騨川沿いには、濃飛流紋岩が広く分布する。濃飛流紋岩は、岐阜県全体の約1／3に分布する大規模な火山岩体である。これは、中生代白亜紀[1]後期（約9000万年～6500万年前）に噴出し、主に流紋岩～流紋デイサイト質の溶結凝灰岩[2]からなる。

この濃飛流紋岩をつらぬく花こう閃緑斑岩の大小の岩体が飛騨川沿いにいくつか分布する。その中で一番大きな岩体が、本調査地域北方約４kmより北に分布する。この岩体は、萩原花こう閃緑斑岩と呼ばれ、飛騨川の左岸に東西約４km、南北約７kmに広がる。岩体の大部分は、灰白色を呈する粗粒の花こう閃緑斑岩である。この花こう閃緑斑岩は、長径２～３cmの大きな斑状の斜長石・カリ長石を多く含むことを特徴とする。また、萩原花こう閃緑斑岩の中心部は、暗灰色の石英閃緑岩質になっている。一方、飛騨川の右岸にも、萩原町と馬瀬村の境界部に東西約１km、南北約2.5kmの岩体、仏ケ尾山を中心に東西約0.7～1.7km、南北約7.5kmに広がる岩体などが分布する。

飛騨川右岸の羽根地区付近及びその北方には、南北方向に約６～７kmにわたり断続して濃飛流紋岩の基盤岩にあたる美濃帯[3]中生層が分布する。この岩体は、主に泥岩と砂岩との互層からなっている。

本調査地域は、前述したとおり一番下位の段丘面（沖積層）上に存在する。遺構面の約1.3m下にはこの段丘面を構成する砂礫層が分布する。礫は円礫～亜円礫で全体の約50～60%をしめる。確認した限り最大礫径は約60×40cmであり、多くは5～10数cmの礫径をもつ。礫種の多くは濃飛流紋岩であり、花こう閃緑斑岩なども含まれる。調査地域では、この砂礫層が現地表面の約1.4～1.5m下に広がっている。

砂礫層の上には、約10～40cmの層厚を持つ中粒～粗粒の砂層が7層堆積している（第9図）。そして、鬼界アカホヤ火山灰（K－Ah）が数cmの不定形の塊状（明褐色）でこの砂層の一つに含まれている（K－Ahについては後述）。火山灰が含まれる砂層は、10cm前後の層厚をもつ。また、これらの砂層の上位に遺物の包含層（縄文中期前半）があり、包含層より上には砂層が広がることはない。これらのことから調査地域は、過去に木曽川の川原であり約6300年より以前には離水したと考えられる。その後、何度か木曽川の水面下になり河川堆積物が堆積した。縄文中期前半以降は、河川堆積物が堆積しても削られてしまった可能性もあるが、河川堆積物がそれ以前のように堆積することはなかったようである。



第3図　沖田周辺地形図（国土地理院発行 1:50,000地形図「萩原」を縮小）

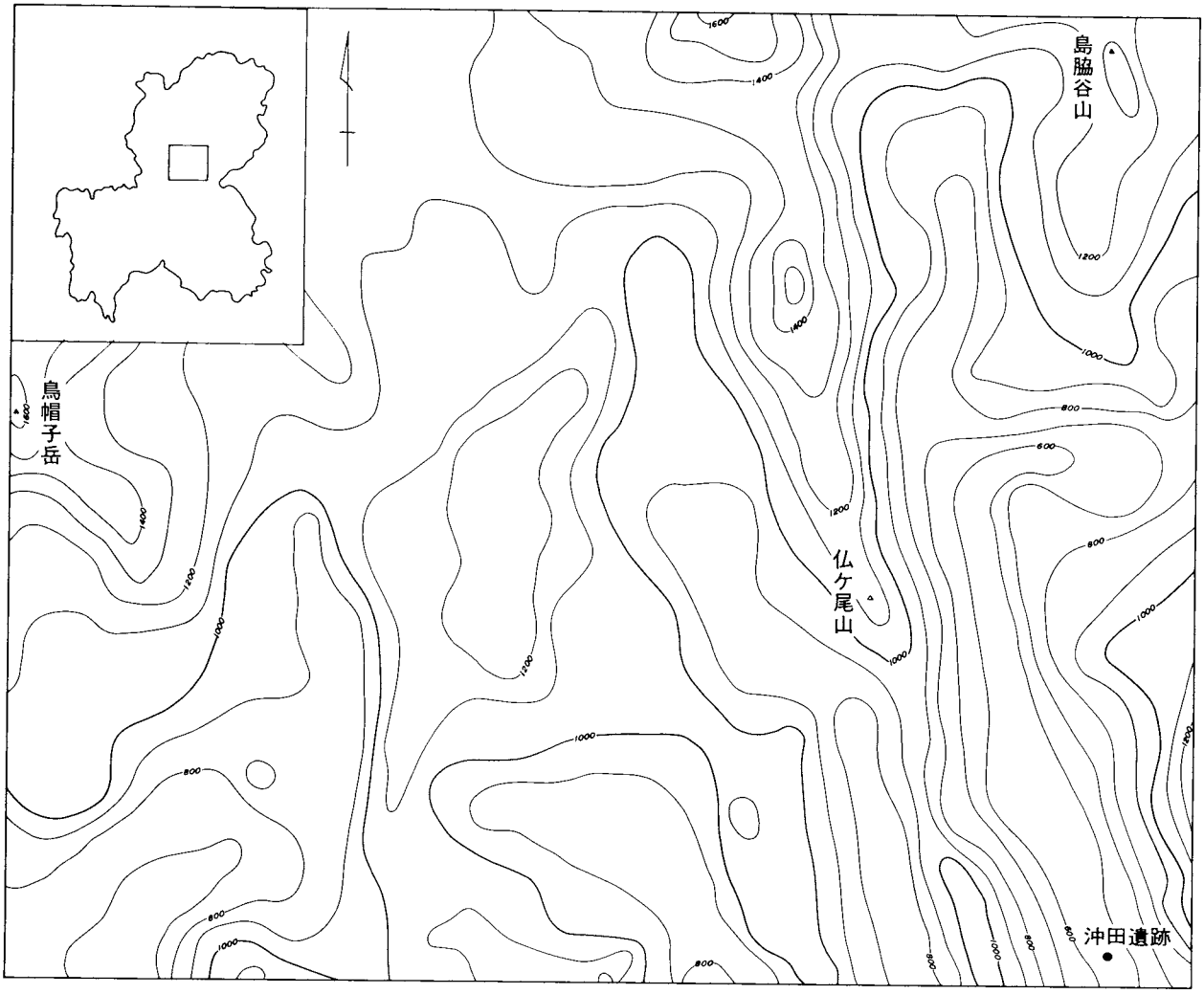
参考文献

萩原地域の地質（1988）　河田清雄・磯見　博・杉山雄一　地質調査所
　地域地質研究報告（５万分の１地質図編）
萩原町の地形的特徴（1983）　岩田　修　岐阜県地学教育 vol.19
新版　地学事典　地学団体研究会編　平凡社

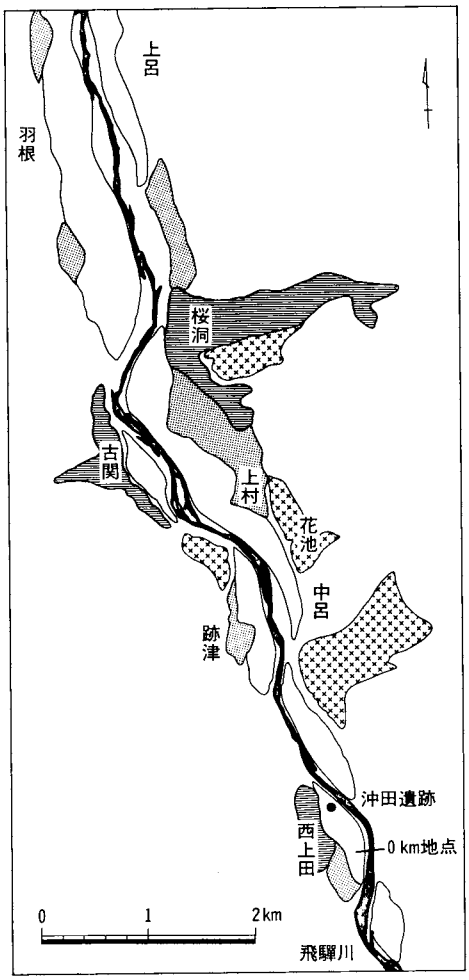
①白亜紀　中生代を三分したうちの最後の地質年代で、約１億4560万年～約6500万年前の約8060万年をさす。

②溶結凝灰岩　火山灰やその他の火山放出物が、高温の火砕流として火山体を流下し堆積した場合、堆積物の内部は高温のため火山ガラスなどの物質が一度溶融し結合しあうことがある。そのような岩石を溶結凝灰岩と呼ぶ。

③美濃帯　岐阜県から長野県にかけて分布し、玄武岩・石灰岩・チャート・珪質泥岩・砂岩及び泥岩からなる。この岩体は、海洋底に堆積した物質が海洋プレートの沈み込みに伴って破断混合し、複雑な構造をもった地質体となったものである。



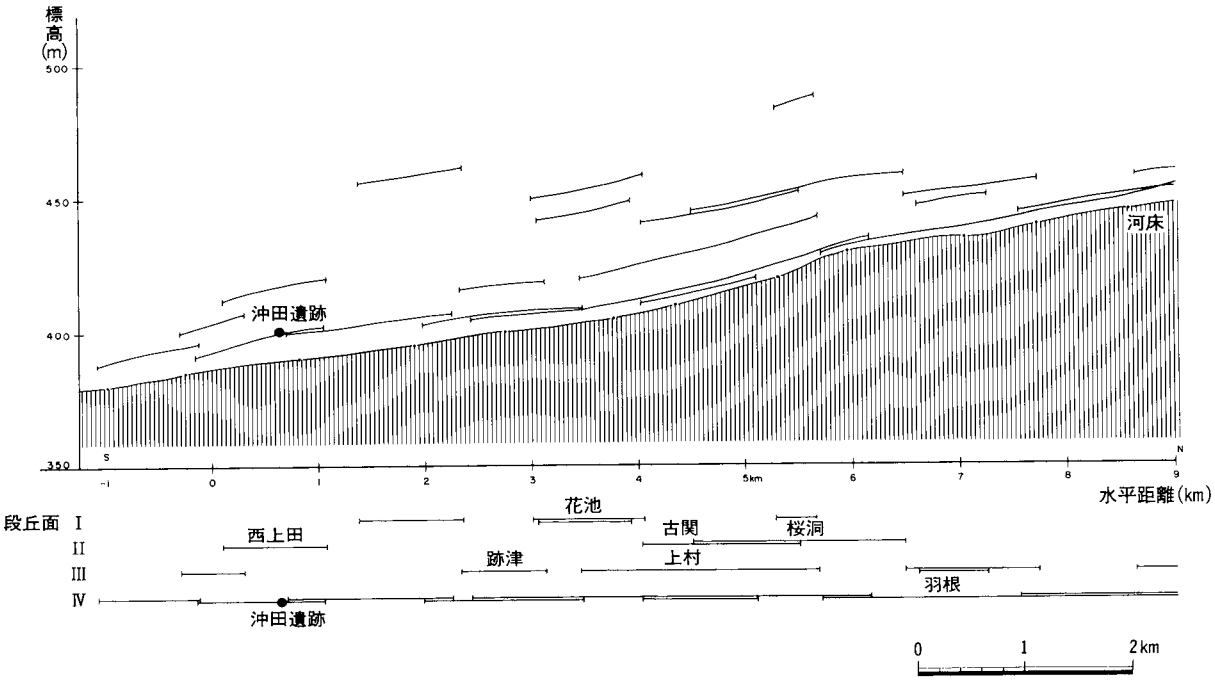
第４図　沖田遺跡周辺の接峰面図
（1:50,000地形図「萩原」を一辺２km方眼の最高点の標高にもとづいて等高線作図）



第5図　飛騨川沿いにおける段丘及び扇状地の平面分布図

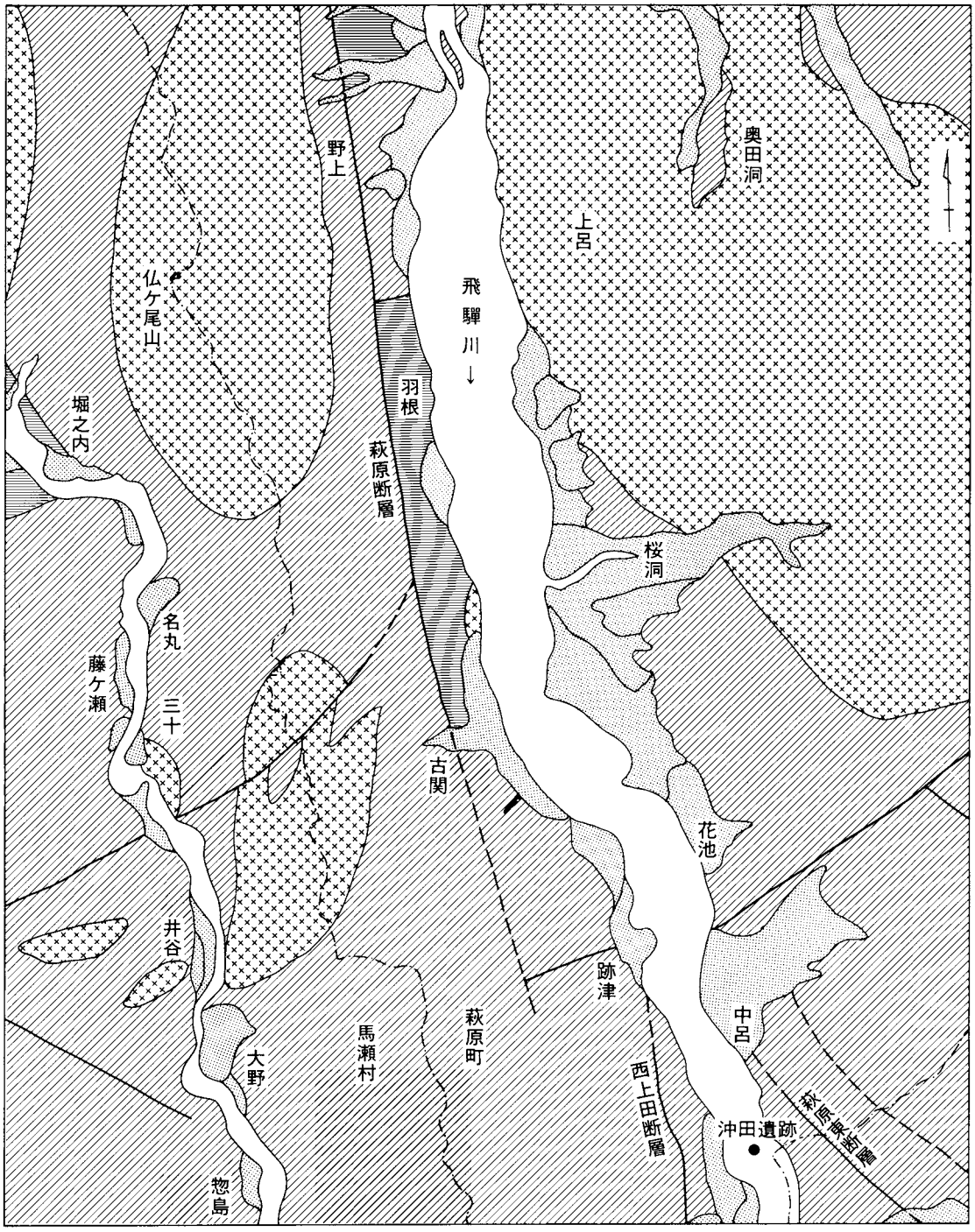
（上から順にⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ面とした）

Ⅰ面
Ⅱ面
Ⅲ面
Ⅳ面
飛騨川



第6図　飛騨川沿いにおける段丘面の垂直分布図

・段丘面の高度は主に地形図から読みとった。　・段丘面Ⅰ～Ⅳは第5図と同じである。
・水平距離の0kmは第5図の0km地点と記入したところ（5万分の1の地形図「萩原」「下呂」の境界である）



美濃帯中世層（砂岩泥岩互層など）
安山岩岩脈
濃飛流紋岩類
河岸段丘及び扇状地堆積物
花こう閃緑斑岩
沖積層
断　層
推定断層

0　1　2　3km

第７図　沖田遺跡周辺の地質図

５万分の１地質図幅「萩原」地質調査所を一部改変

第２節　歴史的環境

沖田遺跡が所在する岐阜県益田郡萩原町西上田は、飛騨川の上流右岸段丘上に位置する。飛騨川はその源を大野郡高根村の東方野麦峠に発し、秋神川・青屋川などと合流し、更に御岳から流れ出る小坂川と合流したあと萩原町に入る。萩原町内でも山之口川に併合し、この辺りから下流は川幅が次第に広くなり流れも穏やかになっていく。

遺跡分布を見ると、その多くが飛騨川に沿って散在していることがわかる。この地方の縄文時代の遺跡として主なものを簡略して記述する。

桜洞遺跡は飛騨川の支流桜谷川左岸の扇状地段丘上に位置し、縄文中期の加曽利Ｅ式の段階を中心として縄文早期・前期・中期・後期の土器や弥生式土器が出土している。また、多数の石器と共に鈎形打製石器や糸巻形石器などの異形石器も出土している他、７個体分の人骨が出土している。

桜洞神田遺跡は11軒の竪穴住居跡を検出し、縄文中期の遺物を中心に後期・晩期・弥生式土器なども多数出土している。

向洞遺跡は縄文早期末の粕畑式土器や弥生中期初頭の水神平式土器が数点出土した。また、主要時期となる古墳時代の土師器や須恵器が出土すると共に住居跡を１軒検出している。

横倉遺跡は縄文時代に設置されたという立石遺構を確認し、縄文後期末の加曽利Ｂ式から晩期初頭の形式に比定される土器が出土した。また多数の打製石斧と共に土偶や石冠、敲製石斧などが出土した。

昭和48年に調査した沖田遺跡は、縄文早期末の天神山式土器や同中期中葉を主要とする土器が出土し竪穴式住居跡を１軒検出している。

古代としては「続日本紀」776年に東山道の支路、飛騨官道の駅名として上呂字番場が伴有（とまり）駅として伝えられる説がある。後に、下呂に下留（しものとまり）が置かれ上呂に上留（かみのとまり）が置かれたのを、後に音読して「げろ」「じょうろ」と言ったのが上呂・下呂の地名の由来といわれる。

中世には萩原の地名が、金山町祖師野の八幡神社所蔵の大般若経の505巻の奥書に「元亨二年の壬戌十二月十一日　於飛騨国益田郡萩原郷中呂真乗（寺）書写畢　金資信慶」とあるのが初見で、1320年の大般若経502巻の奥書には「於飛州益田郡中呂郷真乗寺書写畢」として中呂郷と記されている。

中呂の禅昌寺は臨済宗妙心寺派に属し、益田郡を中心に12か村の末寺を持つ飛騨臨済宗の拠点の一つである。その始まりは、恵心僧都源信が桜洞に草庵を建立したことによると伝えられている。享禄元年（1528）三木直頼が桜洞に築城した折に中呂に禅昌寺を移し三木一族の菩提寺として再興した。

守護京極氏の代官で竹原郷を領した三木直頼は、桜洞台地に桜洞城を築城し高山・古川盆地に勢力を伸ばした。６代目自綱の時に飛騨全域を平定し、天正７年（1579）高山に松倉城を築いた。松倉城は天正13年（1585）金森長近の軍勢によって落城し、翌14年廃城とされ現在は石塁跡や土塁跡が残されている。近世に金森氏は高山に城を築きそこを本拠地とし、萩原に諏訪城を築城し佐藤秀方を城代としている。元禄５年金森氏の移封により天領となった飛騨国は、元禄７年に検地が実施され、萩原郷は上田村が東上田と西上田に分かれ７村となり、明治初年まで続いた。

萩原町は益田郡の中でも耕地の開けたところで江戸末期には益田郡全体の31％の石高をあげている。また、養蚕も盛んで益田糸や益田紬の名があった。宿場としての町並みを作り問屋が置かれ人馬継立、物資の集散など交通・商業の要地であった。

第８図　沖田遺跡周辺の縄文遺跡図

第１表　沖田遺跡周辺の縄文遺跡表

番号	遺　跡　名	市町村
1	宮田遺跡	萩原町
2	フギリ遺跡	萩原町
3	長洞遺跡	萩原町
4	西高遺跡	萩原町
5	横倉遺跡	萩原町
6	四美辻遺跡	萩原町
7	四美辻平遺跡	萩原町
8	杉谷平遺跡	萩原町
9	森畑遺跡	萩原町
10	八幡平遺跡	萩原町
11	上呂遺跡	萩原町
12	的場遺跡	萩原町
13	桜洞遺跡	萩原町
14	向洞遺跡	萩原町
15	下垣内田代遺跡	萩原町
16	宮垣内遺跡	萩原町
17	石原遺跡	萩原町
18	竹ノ上遺跡	萩原町
19	花池遺跡	萩原町
20	禅昌寺平遺跡	萩原町
21	上垣内遺跡	萩原町
22	前田遺跡	萩原町
23	禅昌寺遺跡	萩原町
24	沖田遺跡	萩原町
25	大木ノ下遺跡	萩原町
26	久末遺跡	萩原町
27	神屋垣内遺跡	萩原町
28	定清遺跡	萩原町
29	釜ケ野遺跡	萩原町
30	新開遺跡	下呂町
31	飛越遺跡	下呂町
32	上野遺跡	下呂町
33	宮本遺跡	下呂町

第３章　調査の概要

第１節　調査の概要

沖田遺跡は、飛騨川の右岸段丘上に位置し、標高約400ｍである。飛騨川までは30ｍ、河床との比高は約8.5ｍである。この飛騨川と南側にある中部電力の放水路鉄管、そして西側にあるＪＲ高山線の線路に挟まれた三角地帯の中に位置している。

この地域は、昔から耕地として利用されてきた。地形は西から東の飛騨川に向かって傾斜しており昭和10年頃の開田工事により水田が数段にわたって造成された。そのため、段上の西側部分は削平され東側は掘り切られ遺構の残存状況は不良であった。

発掘調査にあたり藪の生えた調査範囲の耕作土を重機を利用して除去した。その後、長方形の調査区域に合わせて第２図のように４×４ｍの区画を設け、東から西にＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄとし、南から北へは１から13区まで設定した。

検出された遺構は竪穴住居跡２軒、掘立柱建物跡１棟、土坑65基、ピット185基である。遺物は、縄文中期前半の土器や石器類が約3600点、縄文以外の遺物が約600点であった。

第２節　基本的層序　（第９・10図　沖田遺跡土層断面図①②）

土層は、表土である耕作土が第Ⅰ層。その下の第Ⅱ層は、砂を多く含む黒褐色の遺物包含層であるが、地点によっては削平されている場所がある。第Ⅲ層は、粘土を含む黄褐色の砂層であり縄文中期の遺構が確認された層位でもある。以下アカホヤ火山灰を含むＶ層や河床となるＸ層まで確認した。詳しくは第９図を参照に説明を加える。なお、第９図はＢ13～Ｃ13区にトレンチを入れて確認した層である。

第Ⅰ層（10ＹＲ2／3黒褐色）

近年は休耕田となっていたが、長年耕作土として利用されてきた土地である。黒褐色の土が20～30㎝あり、その層の敷き面には鉄分を含む赤みを帯びた土（5ＹＲ4／8赤褐色）が２～５㎝程堆積していた。

第Ⅱ層（7.5ＹＲ3／2黒褐色）

縄文時代中期の遺物包含層であるが、この一帯が西から東に向けて傾斜しており、開田工事のためにＣ・Ｄ区は削平されて黒褐色の包含層が残っている部分が少ない。層は砂を多く含み粘性を持つ黒褐色土である。黒褐色に赤みのある土が所々に見られ、土器片や炭などの混在が見られる。植物の根があるのはこのⅡ層までである。

第Ⅲ層（10ＹＲ5／6黄褐色）

粘土（赤土）と砂が混じった黄褐色の土層で固くしまりがあり粘性は少ない。植物の根などはないが、場所により炭粒が含まれるところがある。この辺り全体を覆っている層であり縄文時代中期に属する住居跡は、この層中に構築されている。

第Ⅳ層（2.5Y6／3にぶい黄色）

場所により黄ばんだ感じもするが全体に少し白っぽい砂層である。砂質は粗い。水はけがよく固くしまっている。炭粒φ１㎜程のものが含まれるが、遺物の出土はない。

第Ⅴ層（10ＹＲ5／4にぶい黄褐色）

粘性は少なく、かたくしまった砂の層である。細かい砂粒の中にφ１㎜程の炭粒が混入する。

第Ⅴ'層（7.5ＹＲ5／8明褐色）

砂層の中に鮮やかな明褐色のアカホヤ火山灰が混入していた。場所によってアカホヤ火山灰が見られない所や密になっている部分など場所によってその量に差が見られるが、遺跡全体に堆積していたことを確認した。指をすりあわせると少しざらつきがあり、光にかざすときらきらとしていた。

第Ⅵ層（10ＹＲ5／2灰黄色）

粘性は少なく、少し黒っぽい砂質の層である。遺物の混入はないが、炭粒φ１㎜程が含まれる。

第Ⅶ層（10ＹＲ5／4にぶい黄褐色）

粘性は少なく、しまりのある層である。砂粒としては10層の中で一番細かく、遺物の混入はない。

第Ⅷ層（2.5Y5／2暗灰黄）

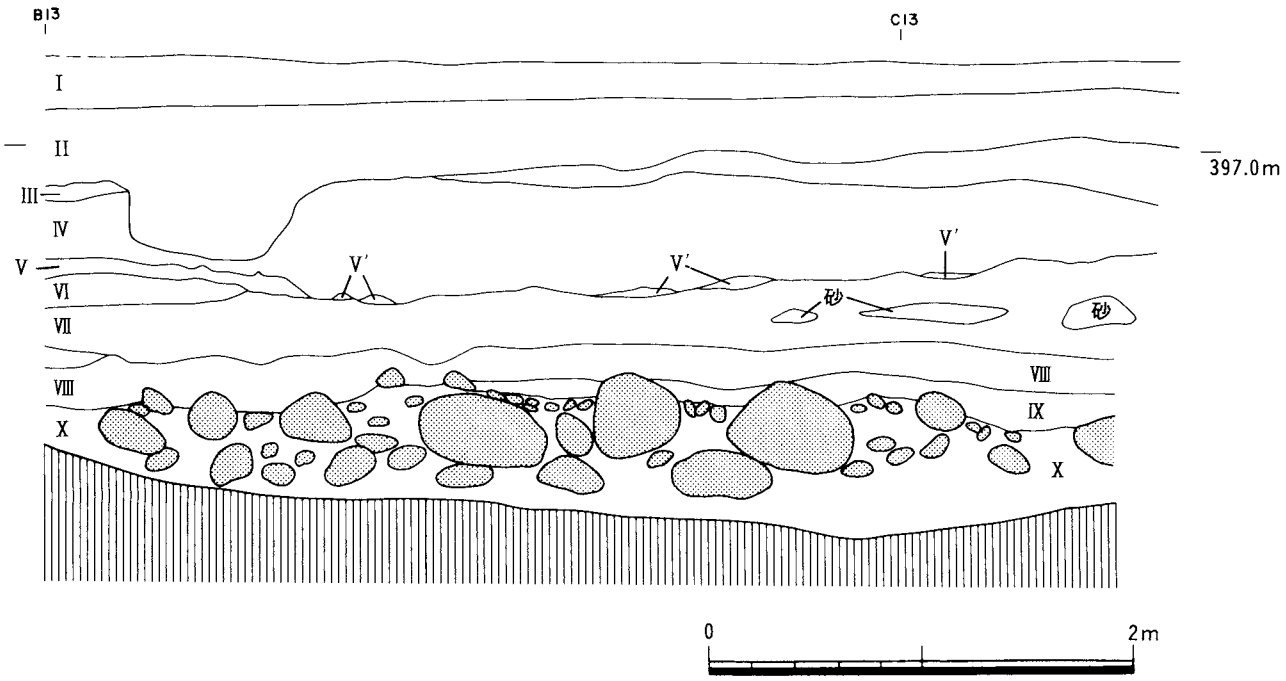
粘性は少なく、固くしまっていた。砂の粒は均一でない。

第Ⅸ層（7.5ＹＲ5／4にぶい褐色）

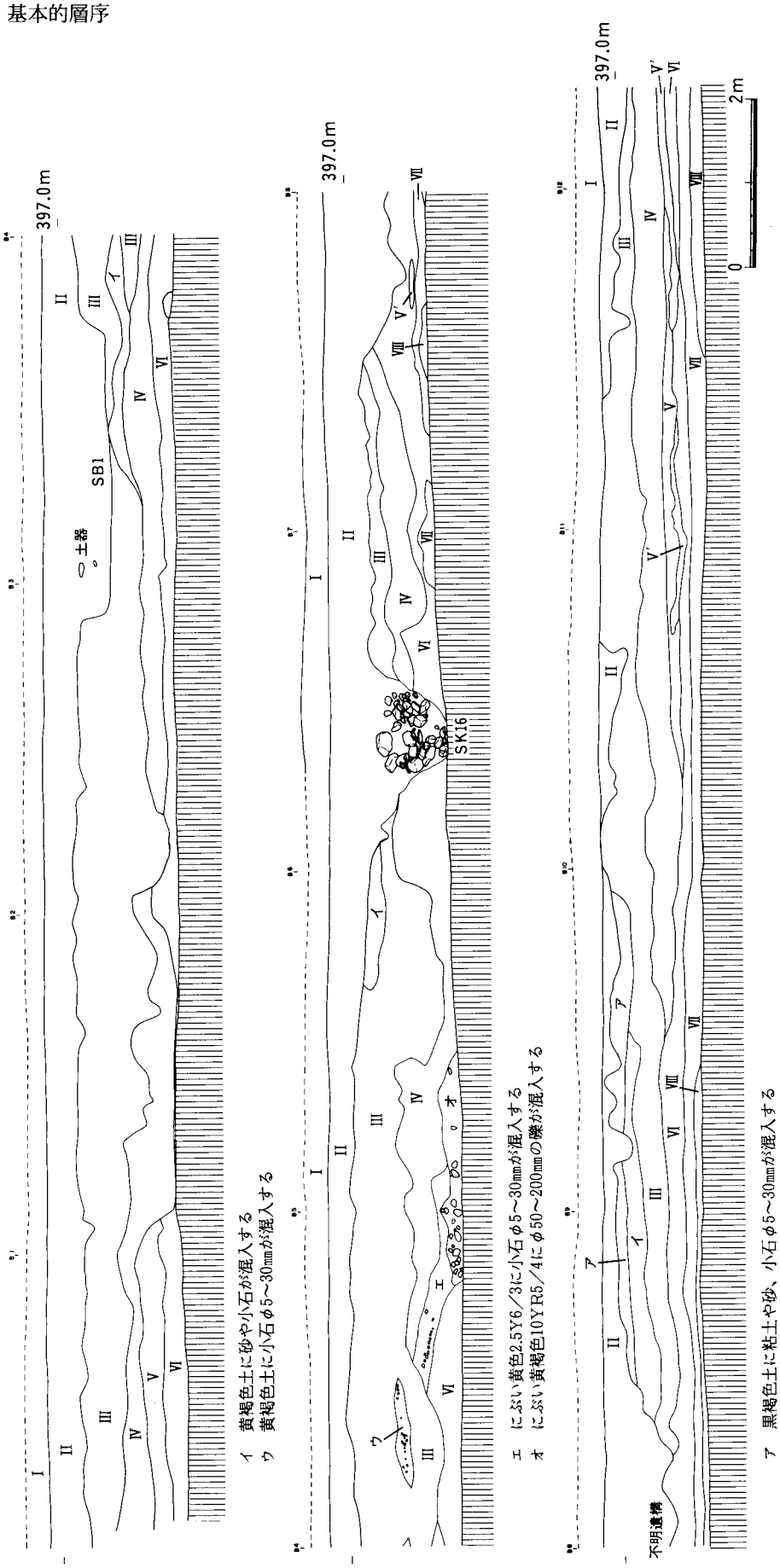
粘性は少なく、しまりがある。細かい砂粒の層であり、炭粒や遺物はみられない。

第Ⅹ層

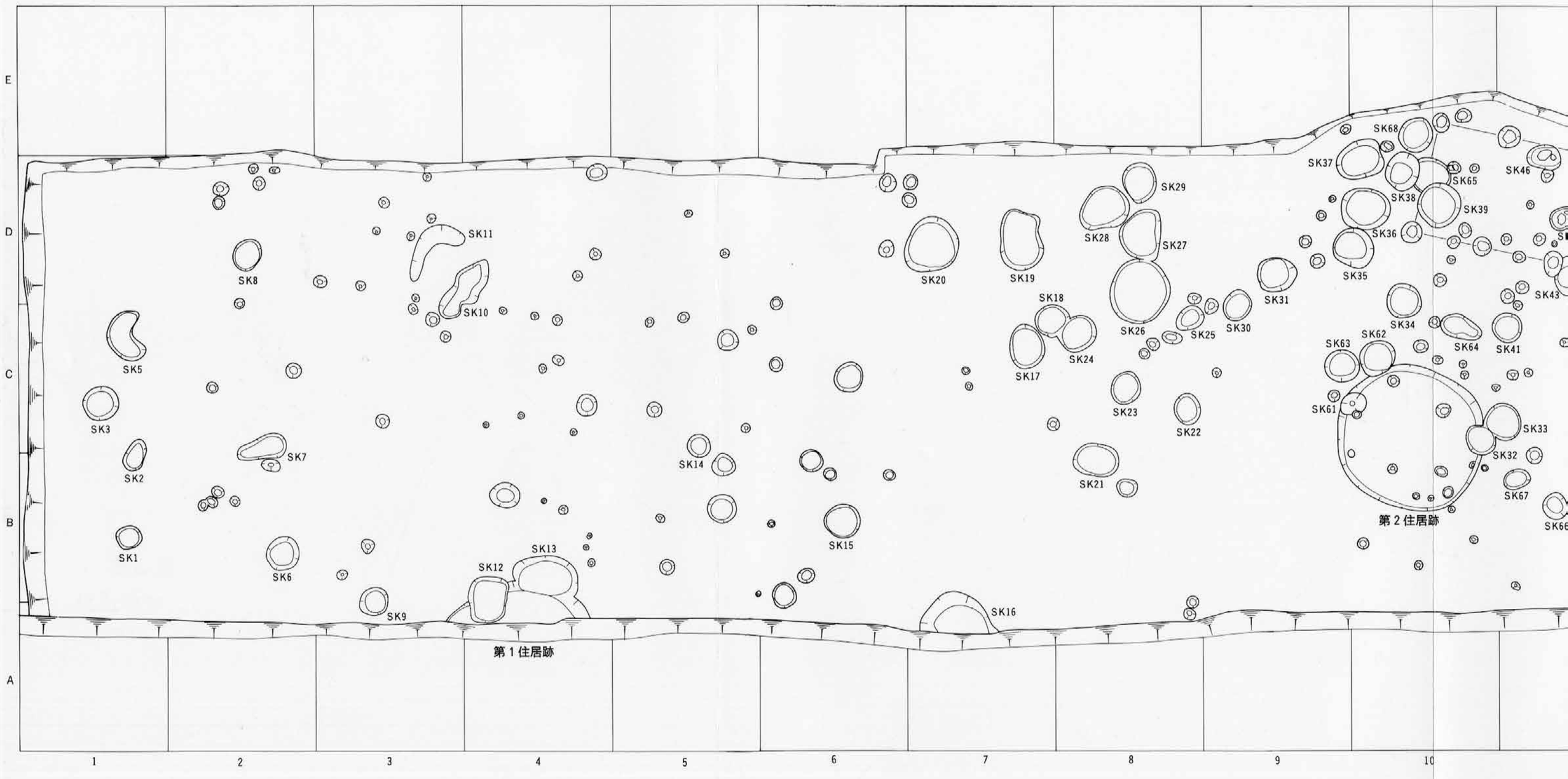
径10cm～40cm程の礫が混在し河床とみられる層である。それらの礫の間には砂粒φ１㎜程のものが入り込んでいる。

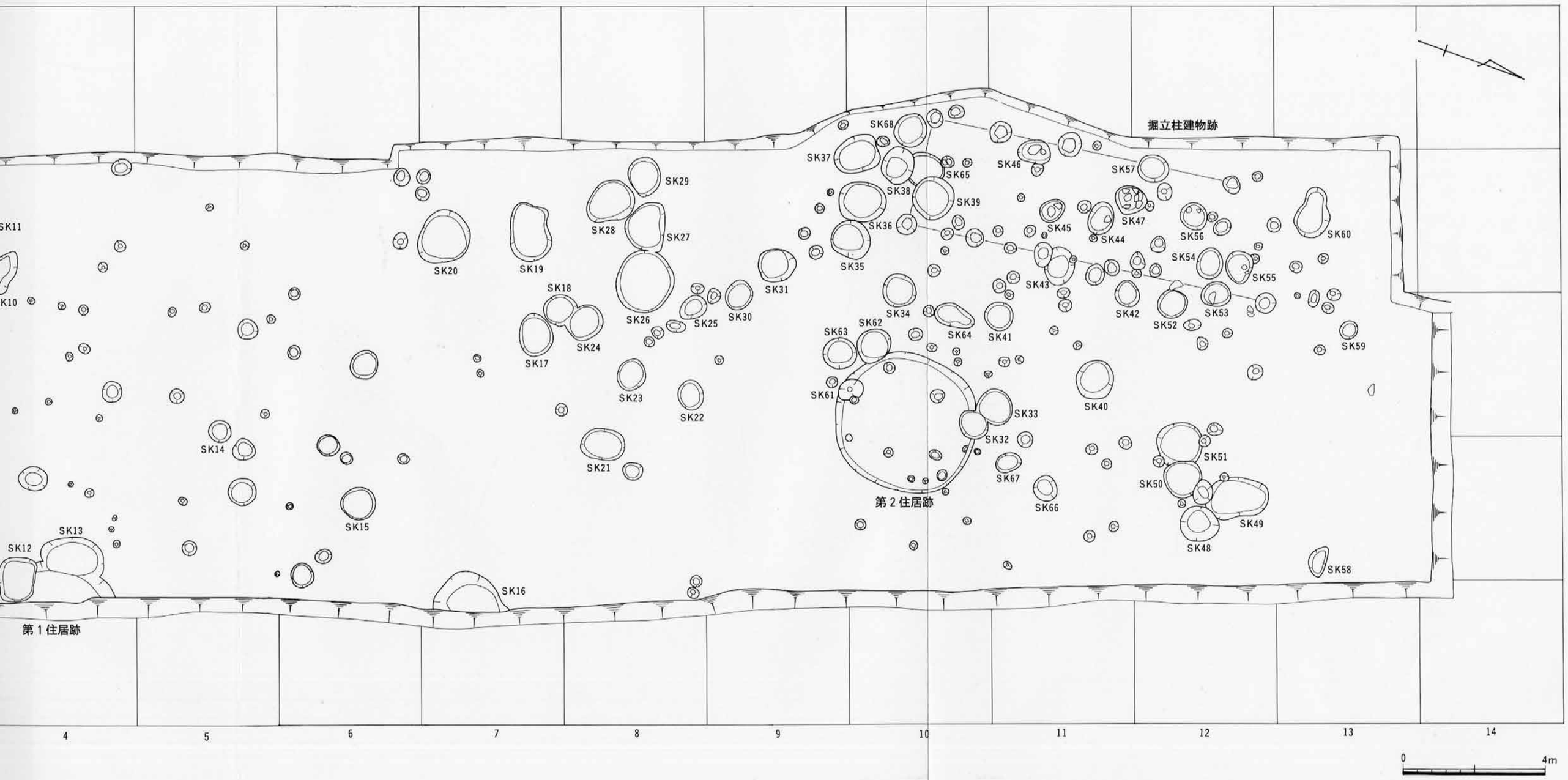


第９図　沖田遺跡土層断面図①



第10図　沖田遺跡土層断面図②


E
D
C
B
A
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
SK1
SK2
SK3
SK5
SK6
SK7
SK8
SK9
SK10
SK11
SK12
SK13
SK14
SK15
SK16
SK17
SK18
SK19
SK20
SK21
SK22
SK23
SK24
SK25
SK26
SK27
SK28
SK29
SK30
SK31
SK32
SK33
SK34
SK35
SK36
SK37
SK38
SK39
SK41
SK43
SK46
SK61
SK62
SK63
SK64
SK65
SK66
SK67
SK68
第1住居跡
第2住居跡



第11図　沖田遺跡遺構全体図

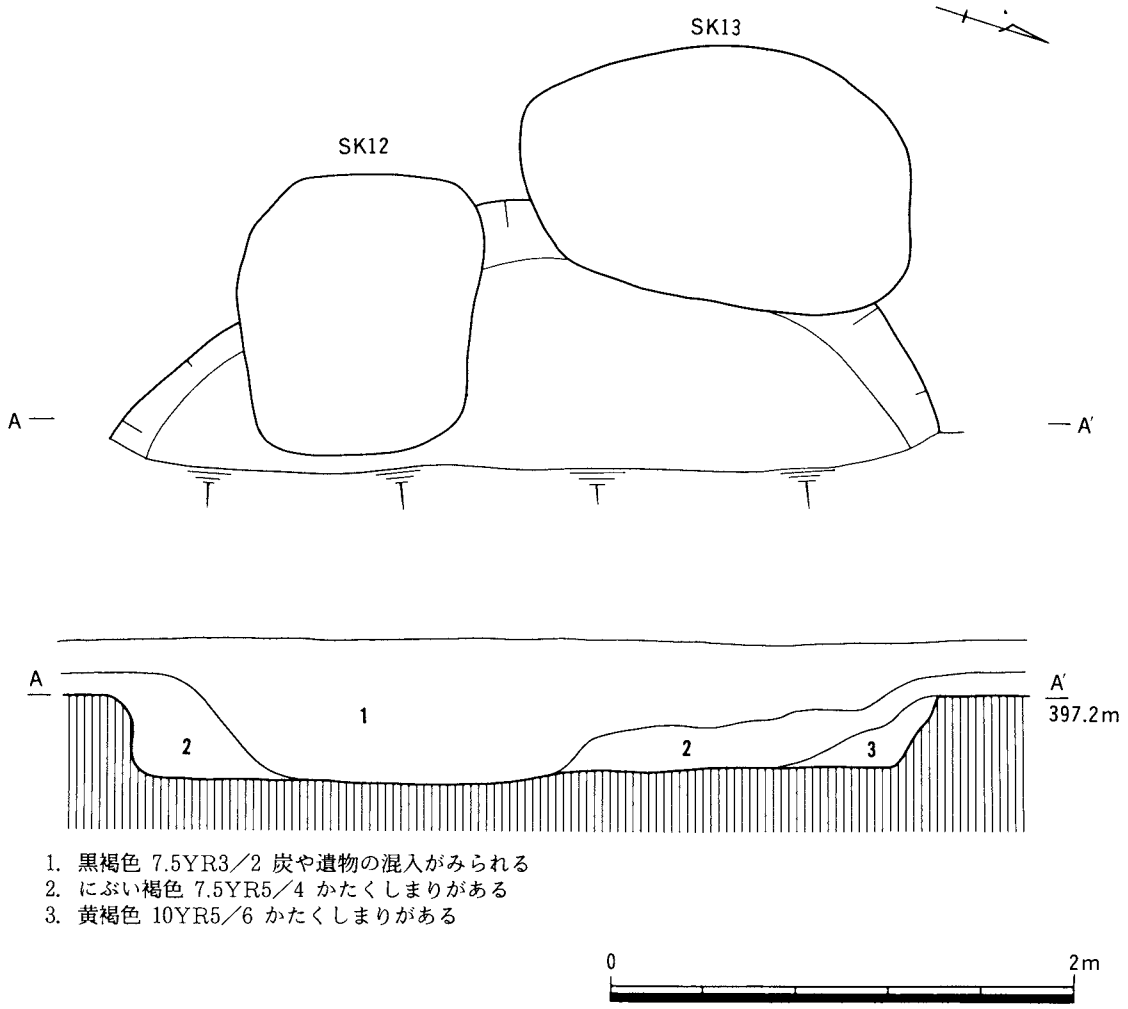
第３節　縄文の遺構と出土遺物

１　竪穴住居跡

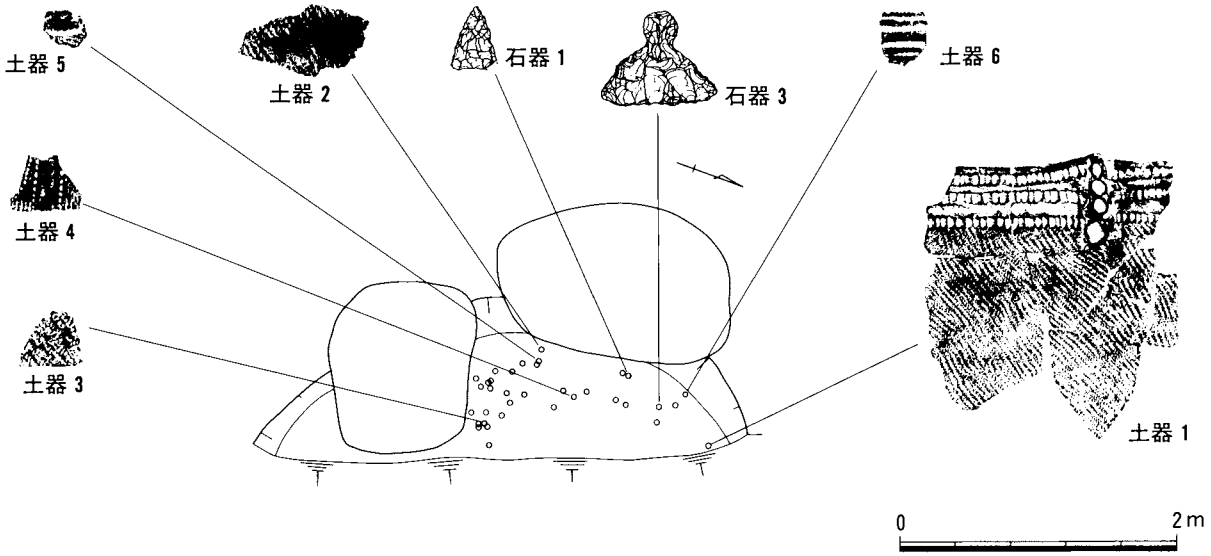
第１号住居跡（第12図、図版３－１）

Ａ４～Ｂ４区に位置する。階段状になった水田の石垣をはずした時に、断面が明確に確認できた住居跡である。遺物包含層を掘り下げていくと黒褐色の不定形なプランになった。これは住居に２つの土坑（SK12・SK13）が重なっていたためである。セクションベルトを残して覆土を掘り下げると縄文中期の遺物が出土した。残存状況は不良で半分以上が削り取られているため炉の確認ができなかった。

確認できる最大幅は南北3.7m、東西1.8m、黄褐色の砂層を約40cm掘り下げた円形の住居跡と思われる。残存する住居跡の中で床面と考えられる硬化面を確認した。床直上の土器は縄文中期前半のものと考えられ、土器の外面を下にして出土した。石器類は石鏃２点を含み計７点出土しているが、その全てが下呂石である。



第12図　第１号住居跡



第13図　第１号住居跡遺物出土状況

出土遺物

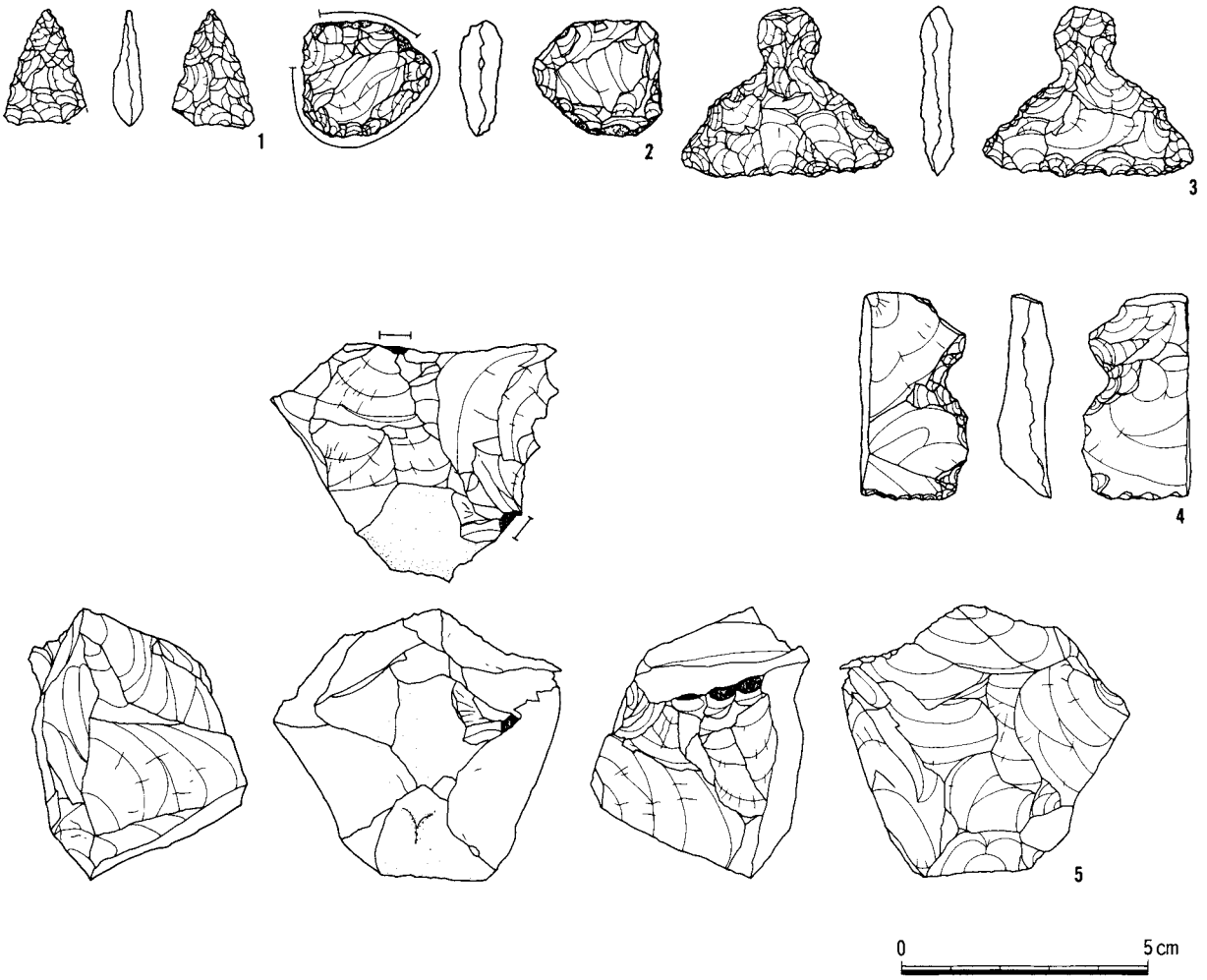
本住居跡の遺物は、土器片16点、剥片石器７点、ほかフレーク類が出土した。多くは覆土からの出土であるが、硬化した床面に接した土器が１点出土した。（土器分類は30～34頁、石器分類は34～39頁を参照）

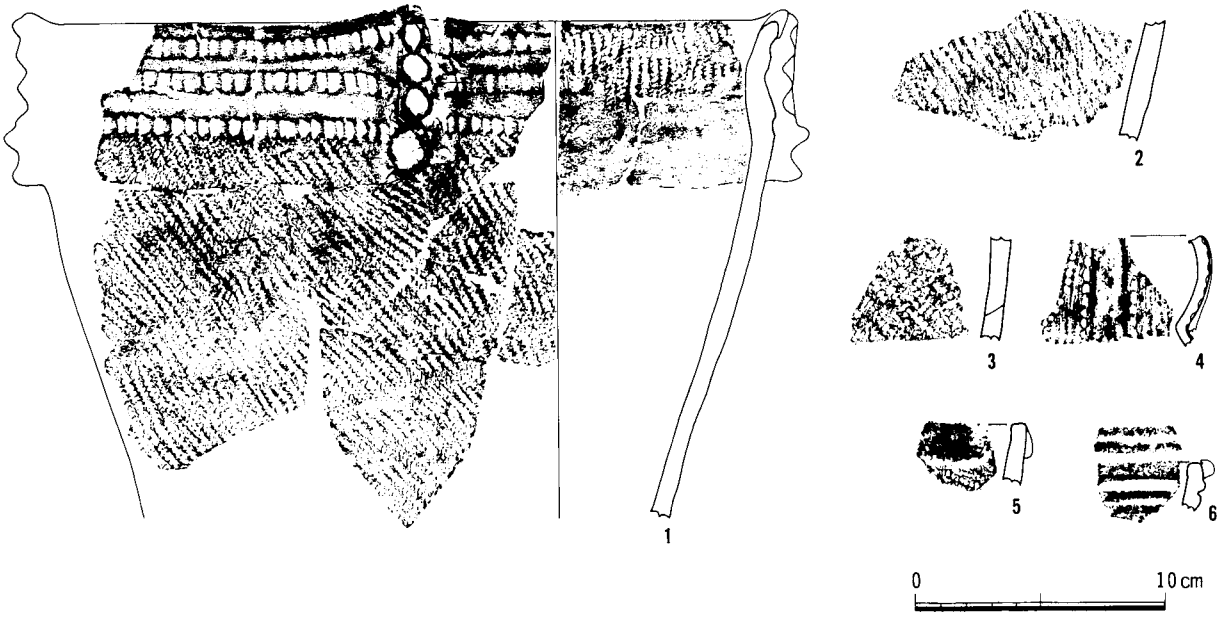
土　器（第14図１～６、図版５）

１は床面に接し出土した土器である。口縁径28cmの外反する小さな波状口縁を持ち、頸部が若干くびれて胴部がやや張り出す深鉢形土器である。器壁は6.8～9.0mmの厚さで口縁部文様帯には無文地に押し引きされた刺突が口縁に沿って３列入り、小さな波状下に丸みを帯びた貼り付け隆帯（懸垂文）が垂れ下がっている。胴部はＲＬの縄で施文され、口縁内面にも縄文が施文されている。２は胴部にあたる部分で胎土に砂粒を多く含む。器壁は8.5mm、粗い縄文が施される。３は器壁が約７mm、縄文が施される。４はキャリパー状になった口縁部分で器壁は4.5mmで比較的薄い土器である。貼り付け隆帯に沿って押し引きと頸部に爪形の刺突が施される。５の器壁は7.9mmで肥厚した口縁を持ちその下には縄文を施す。６の口縁部には半隆起線が横走する。口唇裏にも竹管状施行具の内側を使った蒲鉾状の膨らみが横走する。

石　器（第14図１～５、図版５）

石鏃２点、石匙１点、ピエス１点、抉入石器１点、ＲＦ１点、コア１点が出土し、その全てが下呂石である。１の石鏃は剥離面の調整が粗く5.7mmとやや厚めとなっている。裏面に調整された加工が入る。もう１点は抉りを持つ石鏃であり尖頭部を欠損している。２のピエスは３類に属し加撃と衝撃によるつぶれ状の使用痕が全面に見られる石器である。３は横型石匙として整形されているが、刃部は粗い調整を加え僅かに鋸歯縁状を呈する。４はノッチ状の調整剥離を持ち、その局部につぶれが見られ抉入石器としたものである。５は自然面を二面残し、他方を打面として剥片剥離の作業をしている。



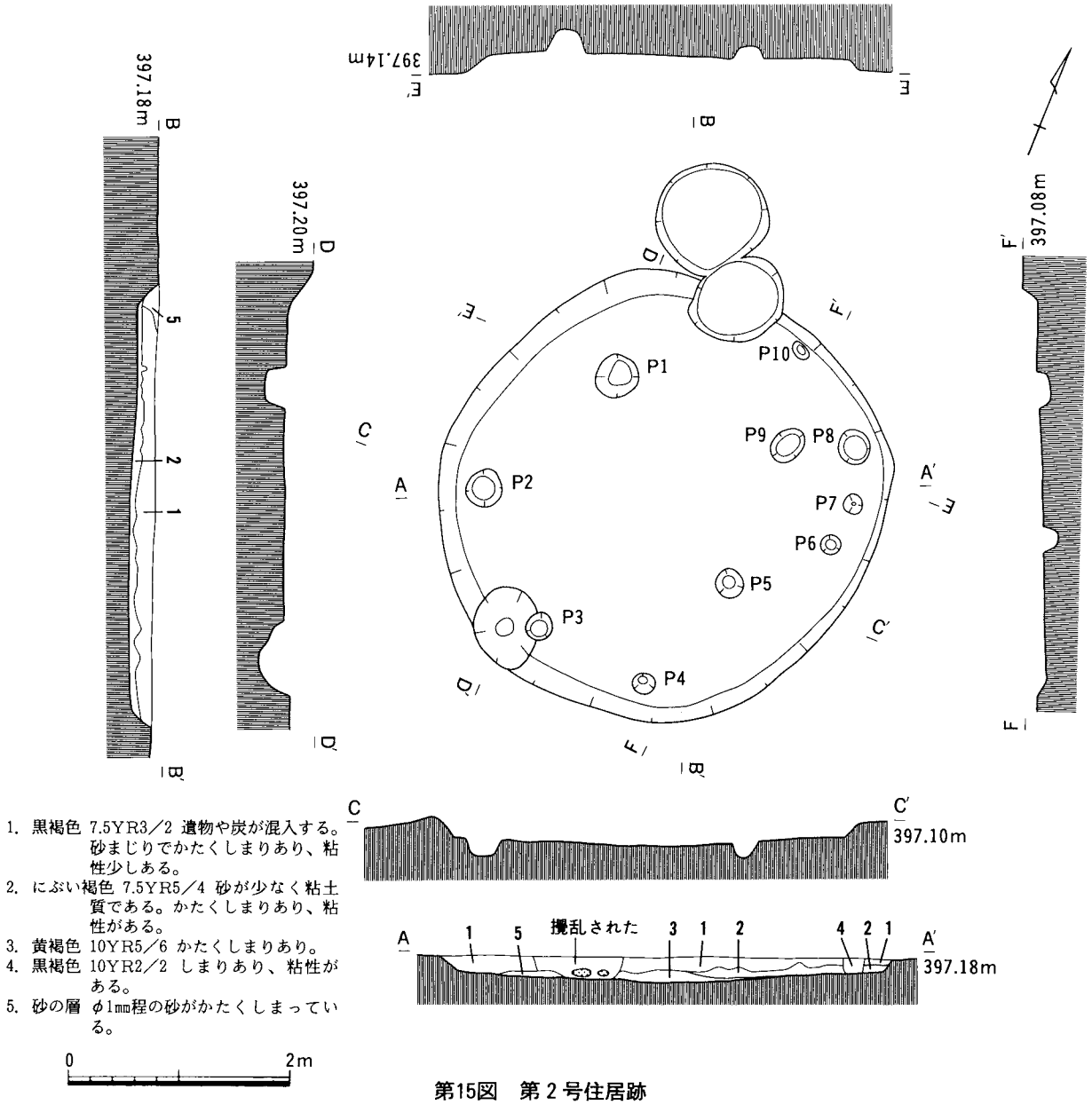


第14図　第１号住居跡出土遺物

第２号住居跡（第15図、図版３－５）

Ｂ10～Ｃ11区に位置する。遺物包含層を掘り下げたところ、円形の黒褐色のプランが確認できた。この住居跡も土坑と重なっている部分があったため、その土坑を掘り下げた後に住居跡の覆土を掘り下げた。覆土から出土した遺物は縄文中期の土器が多く、一部縄文前期の土器が出土した。炉石や地床炉などはなかったが、住居跡中央の床面より３㎝上のところで縄文中期前半とみられる土器片が３枚重なって出土した。土器２が２つに折られ内面を上向きにして重なり、その上に土器１が外面を上向きにして重なっていた。

大きさは東西3.86m、南北3.95m、黄褐色の砂層を24㎝掘り下げた円形の住居跡である。住居跡内に10カ所のピットを検出したがＰ１・５・９が検出面や深度の比較からこの住居に伴う柱穴と考えられる。この遺構からは下呂石による15個の石器製品とチャートのＲＦ１個の他、フレークや縄文中期の土器が出土している。



第15図　第２号住居跡

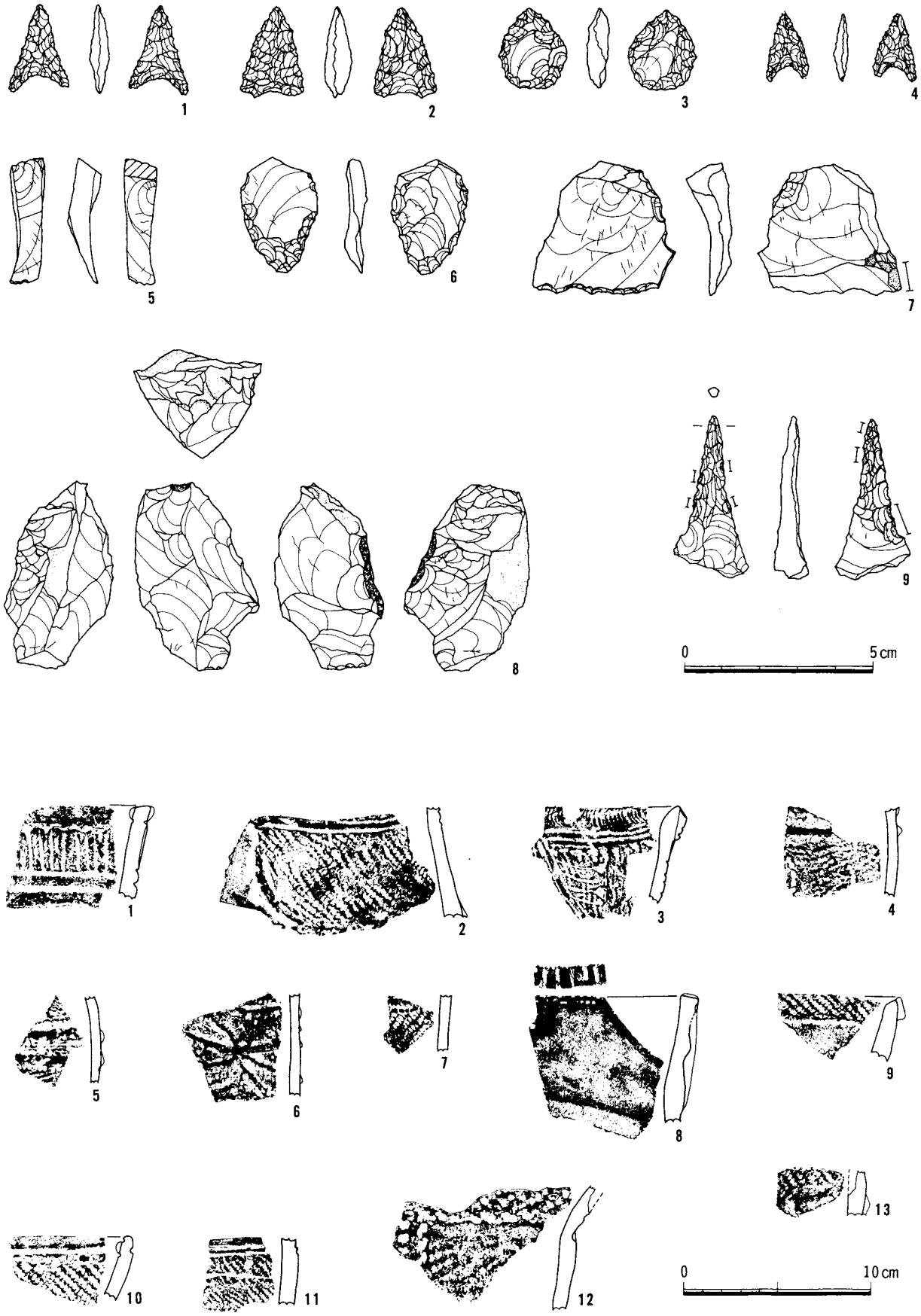
土　器（第16図１～13、図版６）

１・２は住居中央の床面近くから出土した土器である。１の胎土は黄橙色（7.5ＹＲ7／8）石英の混在が確認でき器壁は７～８㎜の口縁部分の土器片である。口縁部文様帯には半截竹管による横の半隆帯文と蓮華文が施文される。口縁最上段は表裏に半隆起線を横走させ、口唇部分は４～５㎜幅の平坦な部分を作出している。この土器は４類に属し新崎式に比定する。２の胎土は黒褐色（7.5ＹＲ3／1）で器壁は７㎜の胴部にあたる土器片である。貼り付け隆帯で区画しその中をＲＬの縄文が充填する。３は口縁にＣ状の爪形文と２列の半隆帯文を施す。胴部はＲＬの縄文を施した後、平行沈線や短い沈線と楔状の陰刻が打たれ北裏Ｃ式に類似する。４と５は同一個体と考えられる。粗い縄文に貼り付け隆帯を持ち円形刺突文の列点を施し、器壁は比較的薄く3.8～4.6㎜である。胎土には砂粒を含みにぶい赤褐色（5ＹＲ5／4）であり船元１式に併行する可能性がある。６は縄文を地文に持ち細い粘土紐の張り付け隆帯に刻目が入る。胎土に石英などを含み橙色（7.5ＹＲ6／6）で4.6～5.5㎜の薄い土器である。７は縄文を地文に持ち細い粘土紐を張り付け押し引きをする結節状浮線文が施される。胎土は砂粒を含み5.1㎜の薄さである。６と７は１類の十三菩提式に類似している。８は波状縁の部分で口唇には沈線が引かれ、口縁には細かいＤ字状の連続爪形文が施される。胎土は金雲母を多く含み12～13㎜の比較的厚みのある土器で８類の阿玉台式土器に類似すると思われる。９は肥厚した口縁を持ちＲＬの縄文を施す。10は口縁部分である。口唇の部分は竹管状施工具内側を利用し半隆帯文をつけ、口縁の内面にも１列の半隆帯文を施す。地文はＲＬの縄文で胎土は石英の砂粒を含みにぶい黄橙（10ＹＲ7／4）、器壁は7.5㎜ある。11はＲＬの縄文を地文に平行沈線文が施され、器壁は8.0㎜程である。12は頸部にあたる部分に結束を持ちＬＲの縄文が施され縦位にも圧痕が入る。器壁は9.0㎜程である。13は縄文に貼り付け隆帯が施される。器壁は8.0㎜程で胎土に石英を多く含む。

石　器（第16図１～９、図版６）

石鏃９点、石錐１点、削器１点、ヘラ形石器１点、ＲＦ２点、ＵＦ１点、コア１点、フレーク11点が出土し、下呂石が26点でＲＦの１点がチャートである。

１・４は「く」の字状の抉りを持ち脚部に向けてひらく三角形を呈する。２は基部への抉りはあるものの僅かに脚部がひらく。３は全体に調整が加わるが、尖頭部に調整があり基部が丸みを帯びているため円基鏃とした。５は分厚で両側は折られ一辺に刃部を呈している。６は連続した剥離痕が見られる。７は一辺に連続した剥離の調整が施される。８は両端の調整加工された部分には使用によるつぶれが見られる。先端には磨耗が見られない。



第16図　第2号住居跡出土遺物

2　土　坑（第22～25図）

土坑は65基（一覧表の土坑68基のうち３基〔ＳＫ４・ＳＫ10、11は風倒木痕〕を除く）が検出された。その多くがＳＢ２や掘立柱建物跡のある７～12区の位置に密集している。出土遺物から江戸時代の土坑と推定できるＳＫ３や縄文中期の土坑と推定できるＳＫ12・13があるが、他の土坑については出土遺物も少なく時期の確定はできない。以下、主な土坑について述べ、その他は第２表土坑観察表にてその概略を記述する。なお、ＳＫ４は欠番となる。

ＳＫ12（第17図、図版３－１）

ＳＫ12は、Ａ４～Ｂ４区に位置する。この土坑の半分は、ＳＢ１と重なり住居跡を切っている。床面より20cm程掘り込まれておりＳＢ１より後にできた土坑であろうと思われる。また、80×65cmに深さ70cm程で四角く掘られ、土坑の底部は平坦で硬化面があった。覆土は黒褐色（7.5ＹＲ2／1）であり、この土坑の中から縄文中期前半と思われる土器や石器が多数出土した。

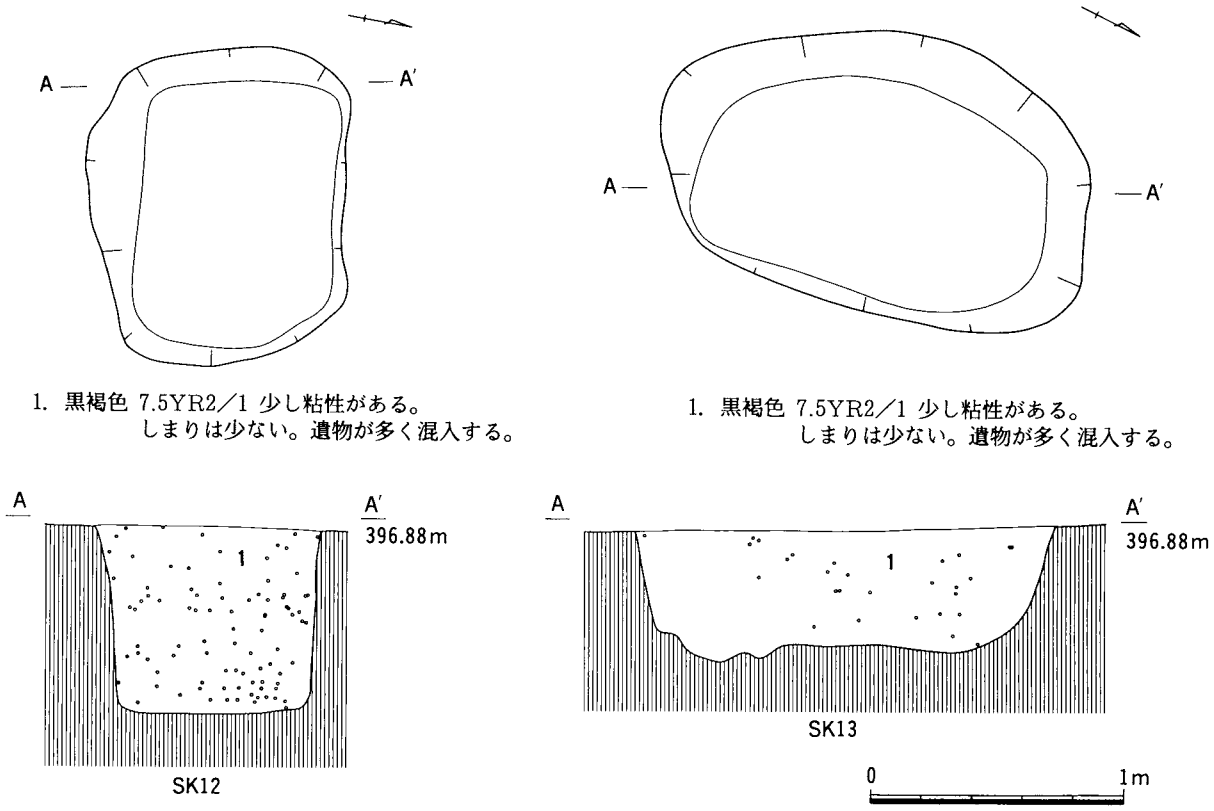
土　器（第18・19図１～21、図版８～９）

１は口縁径22.8cm、器壁は7.3～7.8mmの内彎する口縁を持つ。目の粗い縄文地に隆帯が弧線状につき口縁部内面にも縄文が施文される。２ｂ類に属し船元Ⅱ式に類似する土器である。２は器壁が8.2～9.1mmの厚さ縄文地に隆帯が貼り付けられ刺突が施される。口縁部の表裏には縄文を施文した後、指で摘んだ凹痕があり船元Ⅱ式に比定される土器である。３は器壁が10mm程で半隆帯文が横位につく。４は器壁が11mm、胎土は砂粒を多く含み明黄褐色（10ＹＲ6／6）であり半隆帯文で区画をし、その中を横位に沈線を施す。５は器壁が1.1mm胎土は暗灰黄色（2.5Ｙ5／2）であり半截竹管により施文されている。６～10は同一個体であり、器壁は9.2～12mmと比較的厚く、色調は明褐色（5ＹＲ5／8）である。肉厚の隆線で楕円横帯文を作り、区画内に短い沈線や刺突により文様をつける。９類に属し勝坂式土器に比定される。11は頸部にあたり器壁が8.5mm、胎土は石英などを多く含む明褐色（7.5ＹＲ5／6）の土器である。12は器壁が8.5mm、明黄褐色でＲＬの縄文を施す。13は器壁が7.5mm程、赤褐色でＲＬの縄文を施す。14は結節の回転が施される。15は胴部にあたり器壁が９mm程の無文の土器である。16は底部には網代圧痕が僅かに確認でき、２本越え２本もぐり１本送りの編み方と推定できる。17は口縁部に半截竹管による施文がある。18は口縁部であり横位にＤ字状の爪形文が入り、縦位に平行沈線が入る。器壁は7.5mmで黒褐色の土器である。19は口縁部分と貼り付け隆帯の部分に円形竹管文が施され、隆帯に沿って平行沈線が施文される。器壁が10mmで灰黄色（2.5Ｙ7／2）の土器である。20・21は同一個体であり口縁部表裏と口唇部分に条痕が施される。器壁は10mmで橙色（7.5ＹＲ6／6）をした土器である。

石　器（第18図１～３、５～６、図版７）

石鏃３点、削器１点、ＵＦ１点、フレーク３点、打製石斧１点が出土し、打製石斧を除く全てが下呂石である。

１は先端角と基部の開き角が共に96度である。丁寧に調整され長脚を呈する。２は尖頭部に小さな突起を持ち先端角46度、基部の開き角92度である。３は先端角35度、基部はＵ字状の抉りが入り側縁



第17図　SK12・SK13

部は使用によるつぶれが見られる。５は刃部が欠損した打製石斧である。磨耗が著しい基部である。

ＳＫ13（第17図、図版３－１）

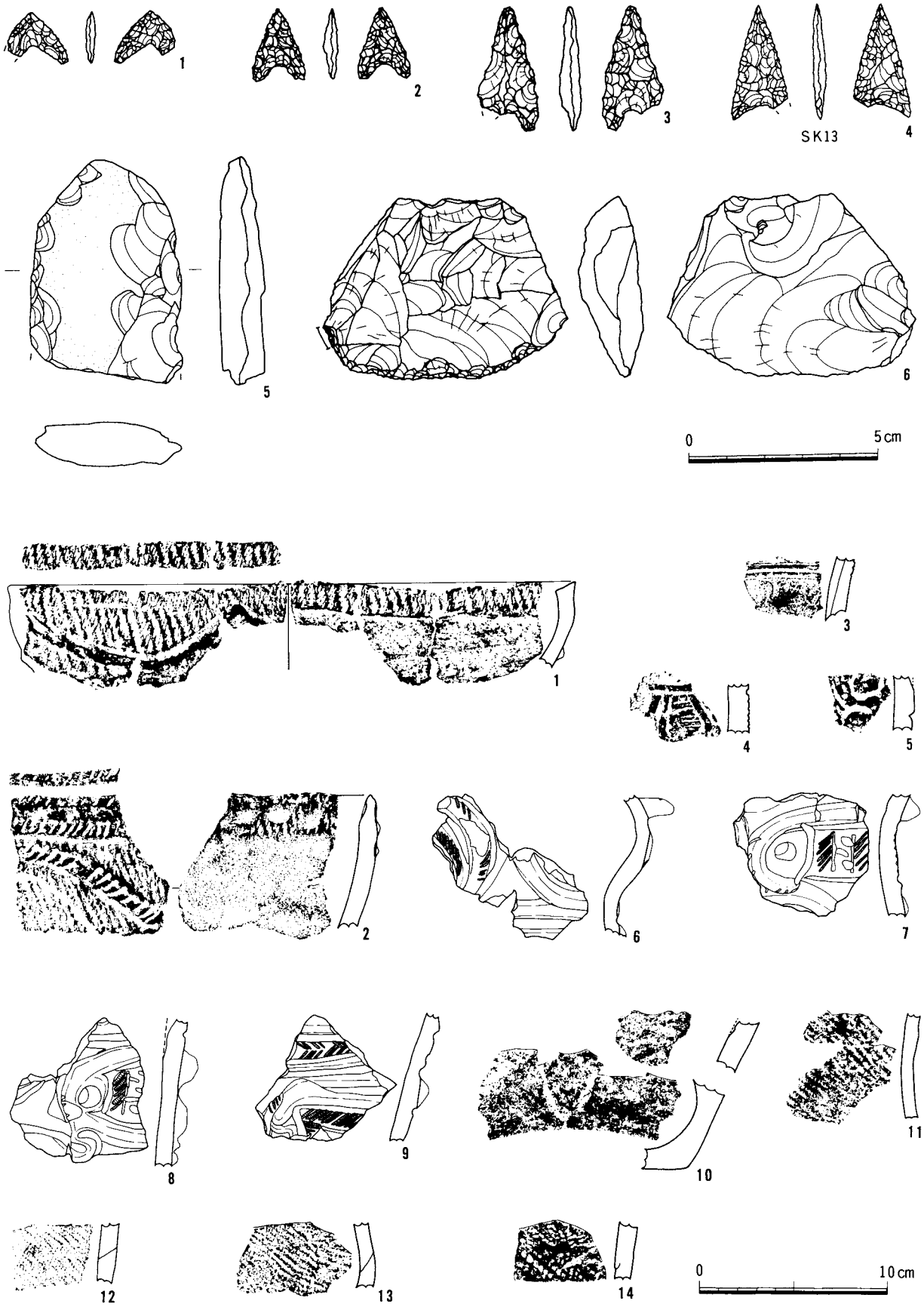
ＳＫ13は、Ｂ４区に位置する。この土坑も少しＳＢ１に重なり住居跡を切っていた。170×110cmの楕円形のプランを呈し、深さは約50cmであった。この土坑の覆土は黒褐色（7.5ＹＲ2／1）であり縄文中期の土器や石器が出土している。

土　器（第19図24・25、図版９）

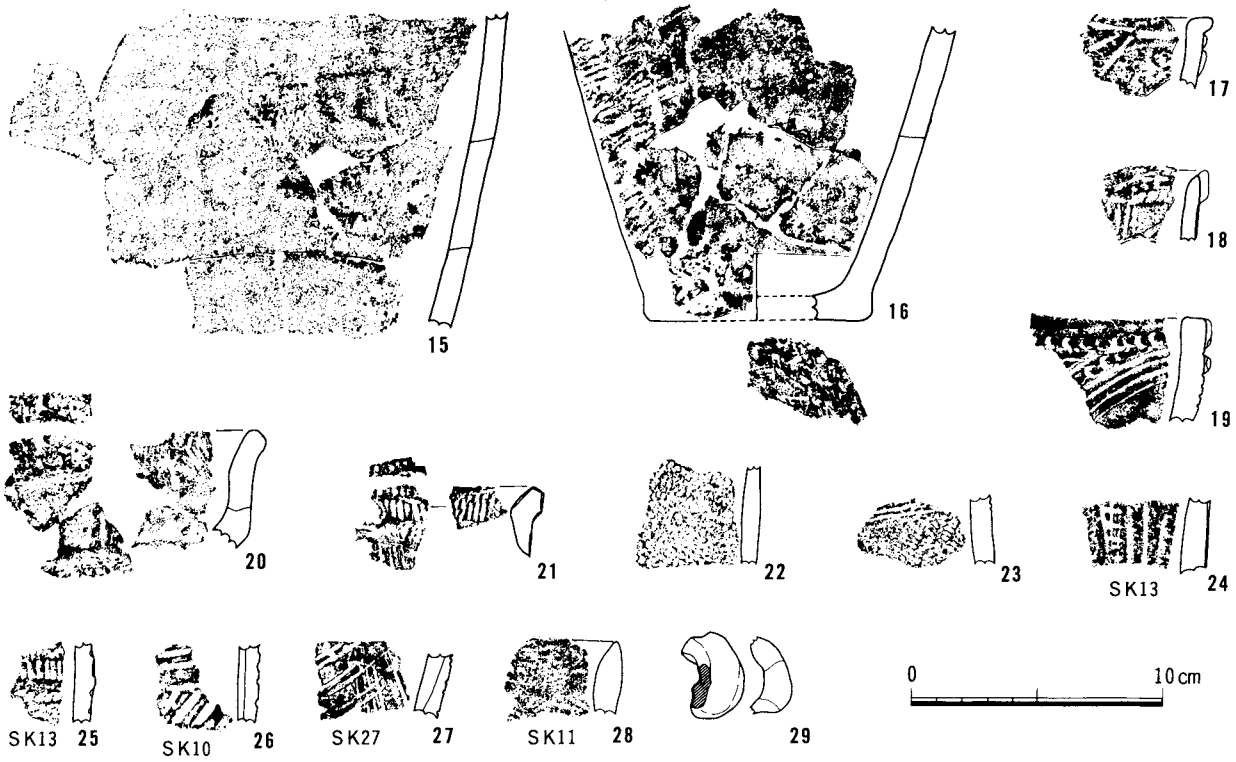
24は器壁が10mm程で胎土は橙（7.5ＹＲ7／6）で砂粒を含み、縦位の平行沈線間に横位の平行沈線と刺突が施された北陸系の土器である。25は器壁が6.2mm、明褐色（5ＹＲ5／6）である。半隆帯文をはさみ櫛歯状工具による押し引きと先端が細い工具での押し引きがされている。

石　器（第18図４、図版７）

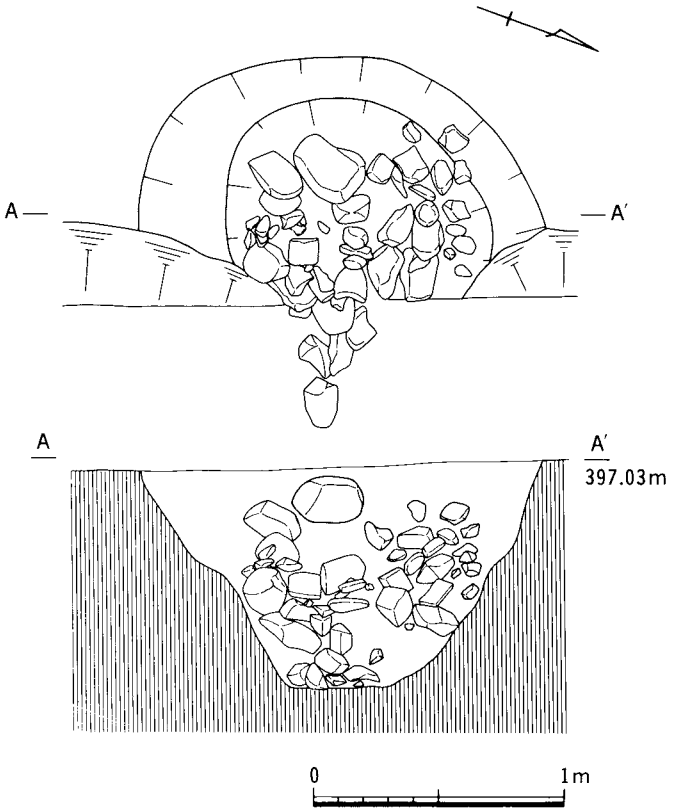
４は比較的薄く、片面の側縁部には連続した剥離調整が施される。先端角は37度、基部の開き角は118度である。



第18図　土坑出土遺物①



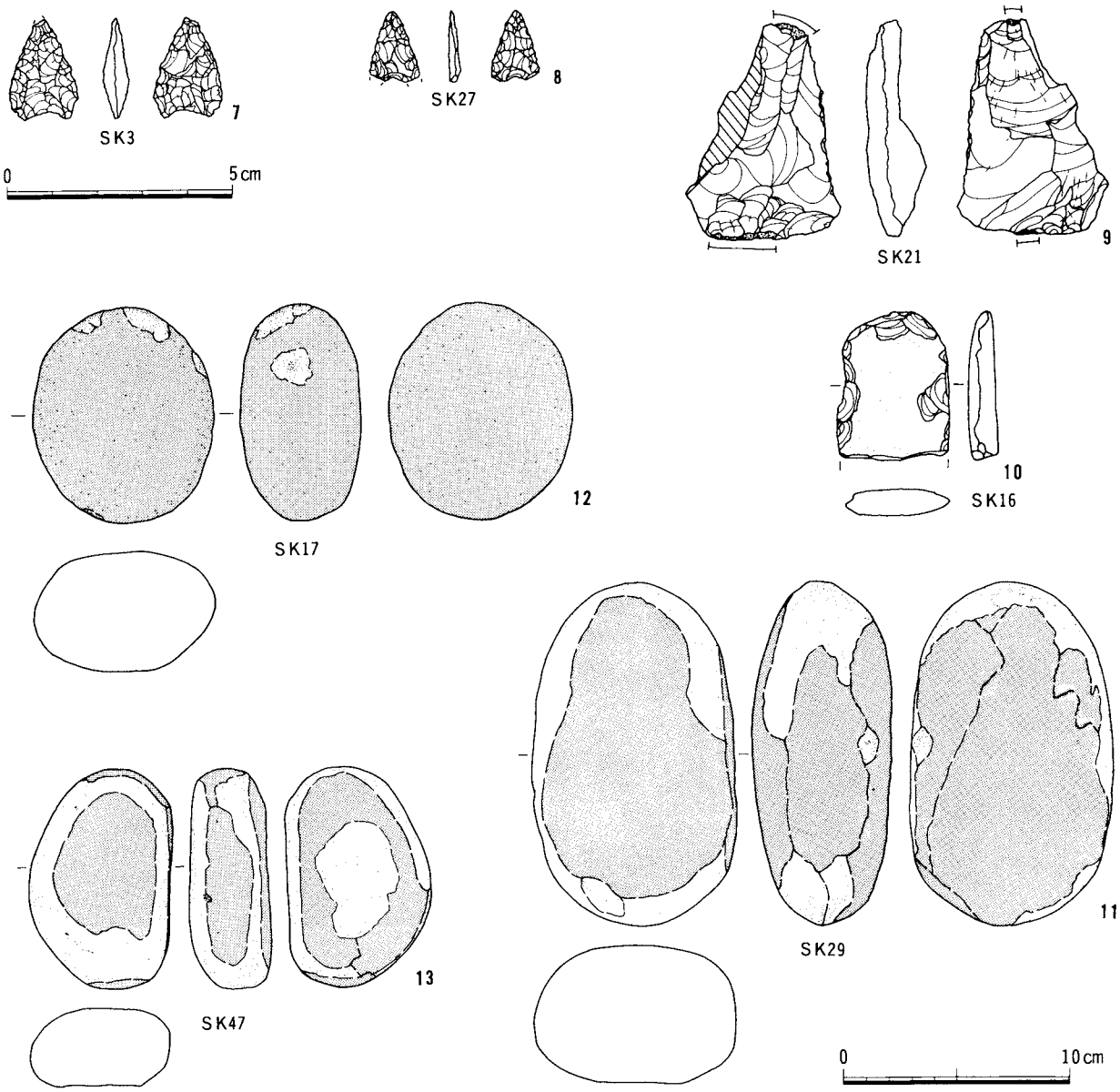
第19図　土坑出土遺物②



第20図　SK16

ＳＫ16（第20図、図版３－７）

ＳＫ16　Ａ７～Ｂ７区に位置する。この土坑も水田の石垣をはずしたときに確認された。最大幅は南北で160㎝の円形状、深さ約90㎝で途中で段を持つ擂り鉢状を呈していた。土坑の上部に30個程の河原石があり、その下は焼礫の集石を確認した。土坑を観察すると焦土や炭がなく後から焼礫が入れられたようである。掘り込みはⅥ層にまで達していた。遺物は、折れた打製石斧が１点混入していた。



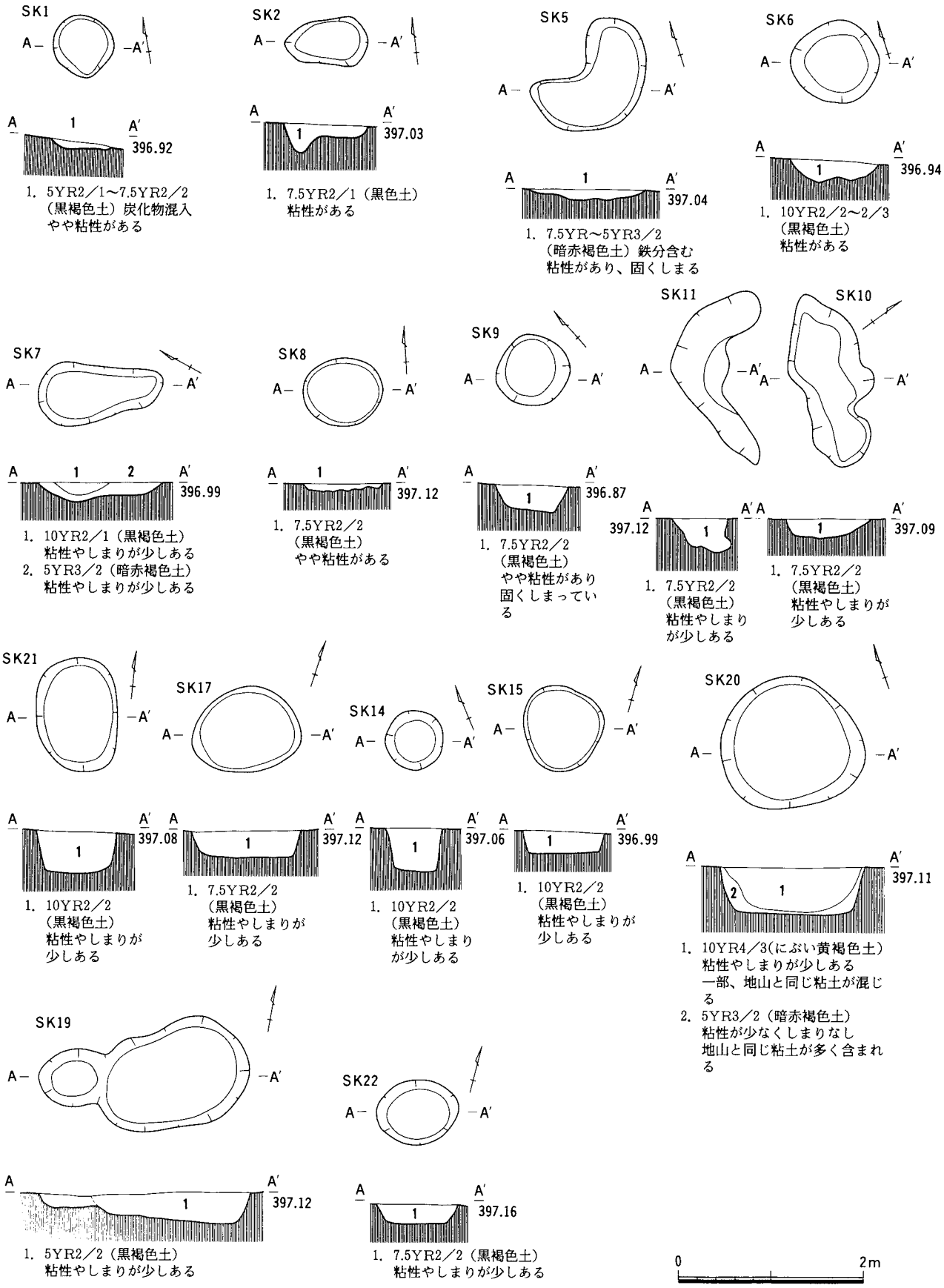
第21図　土坑出土遺物③

3　その他の遺構

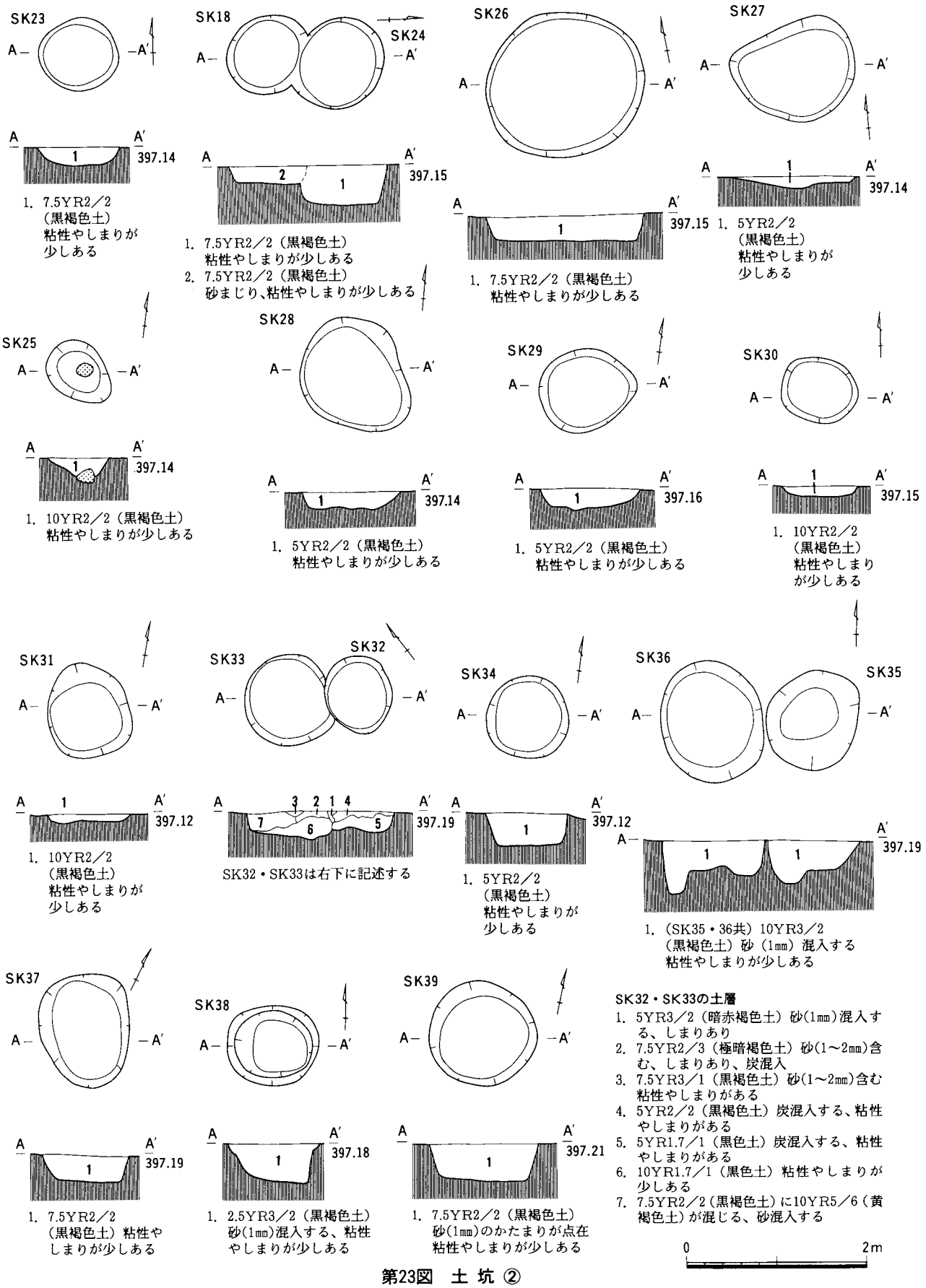
風倒木痕はＤ３区に位置する。はじめ不定形な土坑（ＳＫ10・11）として調査したが、この２つの土坑は、その形状から１つの風倒木痕と思われる。遺物は土器が５点混入していた。

調査範囲の中で185基のピットを検出した。多くが径30cm以内の円形のプランを呈し、底部も平底や丸底など統一性が見られなく、黄褐色の砂層を15～30cm程掘り込んでいた。それらの性格などについては不明であり、遺構に関係すると思われる確証が得られていない。ピット内からの遺物は、ＳＢ１近くのピットから出土した下呂石による削器１点のみである。

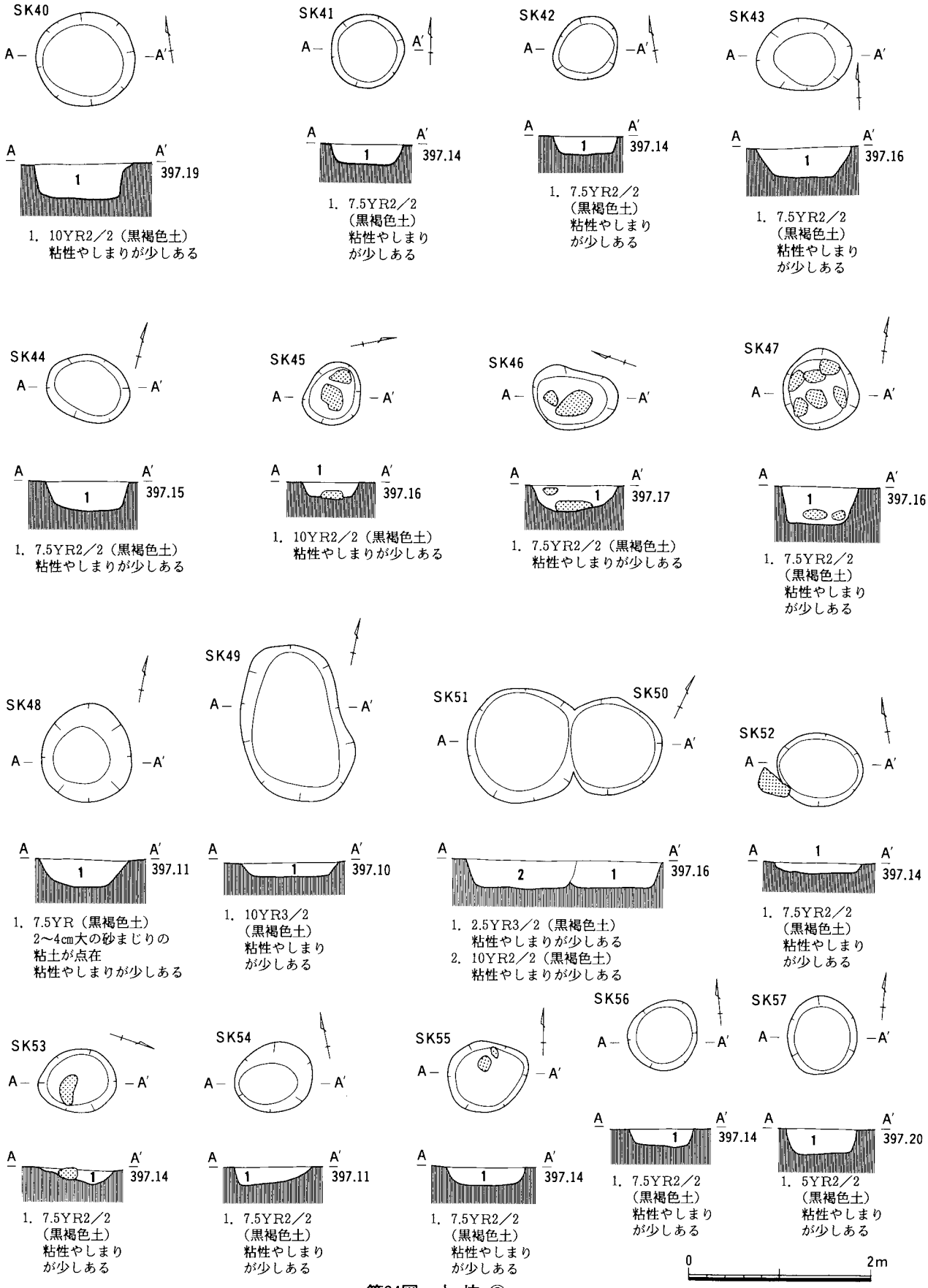
Ｂ８・Ｂ９・Ｃ９区にかかり不明遺構を確認した。石垣を除去した時点で第Ⅵ層にまで掘り込まれていたが、Ⅱ層を掘削した後も住居跡としてのプランが見えなかった。その後、灰釉などの小破片が数点出土したが遺構としての性格は確認できなかった。


SK1
A
A′
1
396.92
1. 5YR2／1～7.5YR2／2
(黒褐色土) 炭化物混入
やや粘性がある
SK2
397.03
1. 7.5YR2／1 (黒色土)
粘性がある
SK5
397.04
1. 7.5YR～5YR3／2
(暗赤褐色土) 鉄分含む
粘性があり、固くしまる
SK6
396.94
1. 10YR2／2～2／3
(黒褐色土)
粘性がある
SK7
2
396.99
1. 10YR2／1 (黒褐色土)
粘性やしまりが少しある
2. 5YR3／2 (暗赤褐色土)
粘性やしまりが少しある
SK8
397.12
1. 7.5YR2／2
(黒褐色土)
やや粘性がある
SK9
396.87
1. 7.5YR2／2
(黒褐色土)
やや粘性があり
固くしまっている
SK11
397.12
1. 7.5YR2／2
(黒褐色土)
粘性やしまり
が少しある
SK10
397.09
1. 7.5YR2／2
(黒褐色土)
粘性やしまりが
少しある
SK21
397.08
1. 10YR2／2
(黒褐色土)
粘性やしまりが
少しある
SK17
397.12
1. 7.5YR2／2
(黒褐色土)
粘性やしまりが
少しある
SK14
397.06
1. 10YR2／2
(黒褐色土)
粘性やしまり
が少しある
SK15
396.99
1. 10YR2／2
(黒褐色土)
粘性やしまりが
少しある
SK20
397.11
1. 10YR4／3(にぶい黄褐色土)
粘性やしまりが少しある
一部、地山と同じ粘土が混じる
2. 5YR3／2 (暗赤褐色土)
粘性が少なくしまりなし
地山と同じ粘土が多く含まれる
SK19
397.12
1. 5YR2／2 (黒褐色土)
粘性やしまりが少しある
SK22
397.16
1. 7.5YR2／2 (黒褐色土)
粘性やしまりが少しある
0
2m

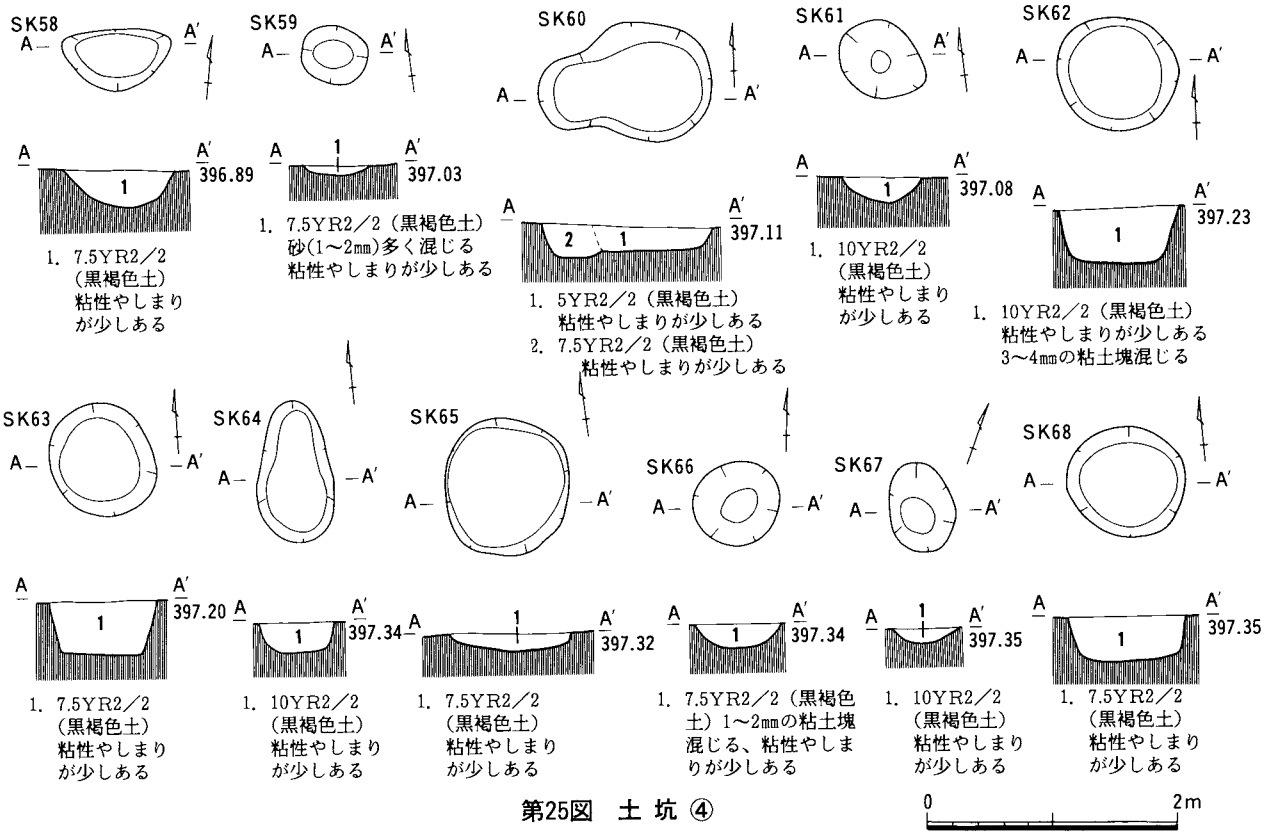
第22図　土 坑 ①


SK23
A
A′
397.14
1. 7.5YR2／2（黒褐色土）粘性やしまりが少しある
SK18
SK24
397.15
1. 7.5YR2／2（黒褐色土）粘性やしまりが少しある
2. 7.5YR2／2（黒褐色土）砂まじり、粘性やしまりが少しある
SK26
397.15
1. 7.5YR2／2（黒褐色土）粘性やしまりが少しある
SK27
397.14
1. 5YR2／2（黒褐色土）粘性やしまりが少しある
SK25
397.14
1. 10YR2／2（黒褐色土）粘性やしまりが少しある
SK28
397.14
1. 5YR2／2（黒褐色土）粘性やしまりが少しある
SK29
397.16
1. 5YR2／2（黒褐色土）粘性やしまりが少しある
SK30
397.15
1. 10YR2／2（黒褐色土）粘性やしまりが少しある
SK31
397.12
1. 10YR2／2（黒褐色土）粘性やしまりが少しある
SK33
SK32
397.19
SK32・SK33は右下に記述する
SK34
397.12
1. 5YR2／2（黒褐色土）粘性やしまりが少しある
SK36
SK35
397.19
1. （SK35・36共）10YR3／2（黒褐色土）砂（1mm）混入する粘性やしまりが少しある
SK37
397.19
1. 7.5YR2／2（黒褐色土）粘性やしまりが少しある
SK38
397.18
1. 2.5YR3／2（黒褐色土）砂(1mm)混入する、粘性やしまりが少しある
SK39
397.21
1. 7.5YR2／2（黒褐色土）砂(1mm)のかたまりが点在粘性やしまりが少しある
SK32・SK33の土層
1. 5YR3／2（暗赤褐色土）砂(1mm)混入する、しまりあり
2. 7.5YR2／3（極暗褐色土）砂(1～2mm)含む、しまりあり、炭混入
3. 7.5YR3／1（黒褐色土）砂(1～2mm)含む粘性やしまりがある
4. 5YR2／2（黒褐色土）炭混入する、粘性やしまりがある
5. 5YR1.7／1（黒色土）炭混入する、粘性やしまりがある
6. 10YR1.7／1（黒色土）粘性やしまりが少しある
7. 7.5YR2／2（黒褐色土）に10YR5／6（黄褐色土）が混じる、砂混入する
0
2m

第23図　土 坑 ②


SK40
A
A′
397.19
1. 10YR2／2（黒褐色土）
粘性やしまりが少しある
SK41
397.14
1. 7.5YR2／2
（黒褐色土）
粘性やしまり
が少しある
SK42
397.14
1. 7.5YR2／2
（黒褐色土）
粘性やしまり
が少しある
SK43
397.16
1. 7.5YR2／2
（黒褐色土）
粘性やしまり
が少しある
SK44
397.15
1. 7.5YR2／2（黒褐色土）
粘性やしまりが少しある
SK45
397.16
1. 10YR2／2（黒褐色土）
粘性やしまりが少しある
SK46
397.17
1. 7.5YR2／2（黒褐色土）
粘性やしまりが少しある
SK47
397.16
1. 7.5YR2／2
（黒褐色土）
粘性やしまり
が少しある
SK48
397.11
1. 7.5YR（黒褐色土）
2～4cm大の砂まじりの
粘土が点在
粘性やしまりが少しある
SK49
397.10
1. 10YR3／2
（黒褐色土）
粘性やしまり
が少しある
SK51
SK50
397.16
1. 2.5YR3／2（黒褐色土）
粘性やしまりが少しある
2. 10YR2／2（黒褐色土）
粘性やしまりが少しある
SK52
397.14
1. 7.5YR2／2
（黒褐色土）
粘性やしまり
が少しある
SK53
397.14
1. 7.5YR2／2
（黒褐色土）
粘性やしまり
が少しある
SK54
397.11
1. 7.5YR2／2
（黒褐色土）
粘性やしまり
が少しある
SK55
397.14
1. 7.5YR2／2
（黒褐色土）
粘性やしまり
が少しある
SK56
397.14
1. 7.5YR2／2
（黒褐色土）
粘性やしまり
が少しある
SK57
397.20
1. 5YR2／2
（黒褐色土）
粘性やしまり
が少しある
0
2m

第24図　土 坑 ③



第25図　土 坑 ④

第2表　土坑観察表

単位cm

番号	地 区	形 態	大きさ	深さ	そ の 他
1	B－1	円	68× 64	12	
2	B－1	楕 円	80× 54	30	土器片3
3	C－1	円			石鏃
5	C－1	不定形	118×118	12	
6	B－2	円	95× 88	26	
7	C－2	楕 円	132× 70	21	土器片
8	D－2	円	86× 74	10	土器片
9	B－3	円	66× 76	34	
10	D－3		90×190	20	土器片4
11	D－3		60×186	36	土器片
12	A－4	円	90×126	76	土器片多数
13	B－4	楕 円	164×112	50	土器片多数
14	C－5	円	62× 66	8	
15	B－6	円	86× 94	26	
16	A－7	楕 円	210×114		打製石斧
17	C－7	円	118× 91	30	磨石
18	C－7	円	86× 93	20	
19	D－7	楕 円	236×116		
20	D－7	円	154×141	50	土器片2
21	B－8	楕 円	86×120	44	ピエス・UF
22	C－8	円	88× 70	25	
23	C－8	円	88× 80	20	
24	C－8	円	97×100	44	
25	C－8	円	62× 80	20	
26	D－8	円	177×157	30	土器片
27	D－8	不定形	140×110	14	石鏃
28	D－8	不定形	110×120	18	石鏃
29	D－8	円	107× 92	25	磨石・土器片
30	C－9	楕 円	86× 74	15	
31	D－9	円	90×105	14	
32	C－10	円	75× 85	24	
33	C－10	円	95×102	32	
34	C－10	円	93× 91	38	
35	C－10	円	105×110	47	土器片

番号	地 区	形 態	大きさ	深さ	そ の 他
36	D－10	楕 円	112×134	59	磨石
37	D－10	円	98×124	30	土器片
38	D－10	円	100× 87	45	
39	D－10	円	120×116	44	
40	C－11	円	110×104	40	
41	C－11	円	80× 80	23	
42	C－11	円	66× 68	19	
43	D－11	楕 円	102× 78	34	
44	D－11	円	90× 72	33	土器片
45	D－11	円	62× 69	17	
46	D－11	楕 円	91× 65	29	
47	D－11	円	82× 88	40	磨石
48	B－12	楕 円	98×108	30	
49	B－12	円	170×107	17	
50	B－12	円	120×125	33	土器片
51	B－12	円	100×106	30	
52	C－12	円	92× 80	14	
53	C－12	円	74× 70	17	
54	D－12	円	84× 75	20	
55	D－12	円	86× 75	21	
56	D－12	円	77× 74	23	
57	D－12	円	75× 84	30	
58	B－13	楕 円	88× 50	35	
59	C－13	円	54× 46	10	
60	D－13	楕 円	136× 96	28	
61	C－10	円	66× 61	21	
62	C－10	円	93× 96	44	
63	C－9	円	84× 93	44	
64	C－10	楕 円	113× 52	25	
65	D－10	円	94×100	15	
66	B－11	円	68× 68	20	
67	B－11	楕 円	52× 72	13	
68	E－10	円	94× 86	35	

第４節　包含層出土遺物

１　土　器

出土遺物は、縄文土器・石器類の他、陶器類などを含め約4200点である。Ⅲ層である包含層は開田工事によってＣ～Ｄ区の多くが削られていたが、Ⅲ層より出土した縄文土器は主に中期前半の遺物であった。今回の調査により出土した縄文土器を下記のように１～10類まで分類し、文様の不鮮明なものや極小破片、識別が困難な遺物に関しては、11類としてその他の類に包括した。

１類　　細い粘土紐を貼り付け、連続刺突を施す土器。
２ａ類　粗い縄文が縦に入り、刺突を施す土器。
２ｂ類　粗い縄文が縦に入り、隆帯上に爪形文を施す土器。
３類　　隆帯に爪形文を持ち、楔状の陰刻を施す土器。
４類　　口縁部に蓮華文を施す土器。
５類　　印刻文を施す土器。
６類　　竹管工具を使用し、浅い平行沈線が施された土器。
７類　　刺突や短い沈線を施す土器。
８類　　胎土に金雲母を含み隆帯に沿って角押文が入る土器
９類　　隆帯による楕円横帯文を施す土器。
10ａ類　粗製土器　縄文を施す土器
10ｂ類　粗製土器　無文土器
11類　　その他の土器（口縁部・底部・胴部）

１類（第26図１～５、図版10）

細い粘土紐を張り付け結節状浮線文となる縄文前期末葉の土器である。１は波状になった口縁部分で器壁が５～６㎜と比較的薄く明褐色（5ＹＲ5／6）である。無文に隆帯を持ち結節を呈する。２と３は同一個体とみられ器壁は５～６㎜、褐灰色（10ＹＲ5／1）で無文に結節状浮線文を呈する。４は口縁部に隆帯を持ち僅かに刺突が確認される。５は無文に隆帯を作り、その後に押しつけられた痕跡をもつ土器である。

２ａ類（第26図６～７、図版10）

粗い縄文が縦に入り刺突を施す土器である。６は器壁が５㎜、隆帯に沿って円形刺突文が施される。７は器壁が4.2㎜、比較的薄い土器で目の粗い縄文が施され円形刺突文が施される。船元Ⅰ式に類似する。

２ｂ類（第26図８～９、図版10）

粗い縄文が縦に入り、隆帯上に爪形文を施す土器である。８は器壁８㎜、灰黄褐色した波状口縁部分である。口縁に沿って目の粗い縄文が施され、隆帯によって区画される。また、波状直下に隆帯を持ち結節が見られ内面にも縄文が施される。船元Ⅱ式に類似する。９は口縁部の表裏に縄文が施され、

断面が三角状の隆帯に沿って丸みのある刺突が施される。

３類（第26図10～15、図版10）

隆帯に爪形文を持ち、楔状の陰刻を施す土器である。10は器壁が６～７㎜であり半截竹管の区画内に縄文が施され楔状の陰刻を持つ北裏Ｃ１に比定する土器である。11は隆帯と沈線を施す。12は器壁が6.5～8.2㎜、口縁にＣ状の爪形文を施し区画された隆帯に沿って平行沈線が複数条に施文される。区画内で楔状陰刻が施され北裏Ｃ２に類似する。13は口縁部分にあたり器壁が５㎜程で比較的薄い土器である。隆帯になった横位にＣ状の爪形を施し、縦位に幅広く平行沈線が施され山田平式土器に類似する。14は器形が外反し、肥厚した口唇部直下に数本の沈線が斜めに施され、子種式土器に類似する。15は連続爪形文を施した口唇部分と平行沈線との間に縦位の短沈線が施される。

４類（第26図16、図版10）

16は器壁が7.3㎜明黄褐色（10ＹＲ6／6）で口縁部文様帯に蓮華文を施し新崎式土器に比定する。

５類（第26図17～19、図版10）

17は器壁が８～９㎜、胎土に大粒（２㎜程）の石英を多量に含んだ橙色（7.5ＹＲ6／8）の土器である。口縁に山形状の突起がつき、口縁部文様帯にはＤ字状の刺突や陰刻が施される。胴部には櫛歯状工具にて平行沈線が縦位に施される。18は明褐色（5ＹＲ5／8）の肥厚した口縁を持ち連続した沈線が施される。19の色調は明褐色（5ＹＲ5／8）であり、隆帯に沿って連続した刺突が施される。

６類（第26図20～23、図版10）

20は口縁部文様帯に掘りの浅い平行沈線によって区画し、その内部を横走波状沈線が施される。胴部に於いては、上端に波状平行沈線が下部に平行沈線が横走し、縦位に数本の平行沈線が施される。器形は頸部にて内折し器壁は約８㎜、色調は黄褐色（10ＹＲ5／6）であり、平出ⅢＡ式土器に比定する。21は器壁が６～７㎜あり浅い平行沈線が施される。22は器壁が10㎜、平行沈線を施す。23の器壁は約10㎜、張り付け隆帯と平行沈線が施される。

７類（第26図24～26、図版10）

24は器壁が約８㎜であり色調は黄橙色（7.5ＹＲ8／8）である。沈線文の工具で刺突が施された土器で船元Ⅲ式に類似する。25は縦位の沈線が施される。26は隆帯を持ち縦位の沈線が施される。

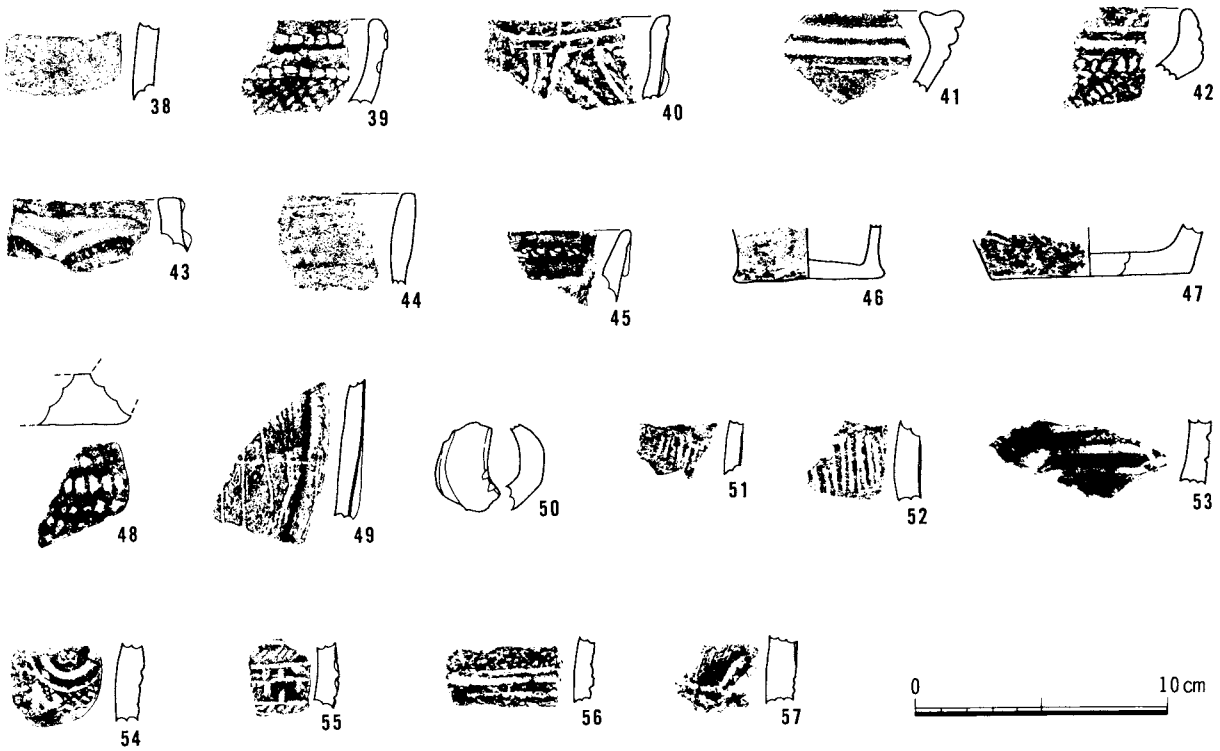
８類（第26図27、図版10）

27は胎土に金雲母を含み色調は明褐色（10ＹＲ6／8）器壁が８～９㎜、無地にコンパス文が縦位に施文される。コンパス文が施された器壁は10～11㎜と肉厚となる。

９類（第26図28　図版10）

28は明褐色（5ＹＲ5／8）の土器である。肉厚の隆線で楕円横帯文の一部とみられＳＫ12より出土

第26図　包含層出土土器①



第27図　包含層出土土器②

した６～10の土器と同一個体と思われる。

10ａ類（第26図29～36、図版10）

29は器壁が約５㎜のＬＲの縄文を施している。30は縄文のようだが原体は不明である。31は縄文を施した痕に浅い平行沈線が引かれる。32は縄を凹圧して引きずったような痕はあるが、詳細は不明である。33はＲＬの縄文を施す。34はＲＬの縄文を施す。35は縦位の沈線と結節のあるＲＬの縄文が施される。36はＲＬの縄文が施され口縁内面に細かい爪形文が入る。

10ｂ類（第26・27図37～38、図版10・11）

37は器壁が10～12㎜、色調が明褐色（10ＹＲ7／6）きめの細かい胎土である。38はにぶい褐色（5ＹＲ5／4）の色調を持ち器壁が約８㎜である。

11類（第27図39～57、図版11）

前述した土器に含まれない土器を、口縁部・底部・胴部ごとに分類した。

口縁部

39は器壁が約７㎜、縄文地に貼り付けられた隆帯に沿って結節状平行沈線文が施される。40は器壁が約７㎜、半截竹管にて平行沈線の施文をし隆帯を持つ土器。41は器壁が約６㎜、表面に３条と内面に１条の半截竹管による平行沈線が施文される。42は内彎する口縁を持ち横位に走る平行沈線の最下列を刺突し、その下に縄文が施される。43は内折する口縁部を持ち弧状の隆帯を施す。色調は明褐色である。44は無文の口縁で器壁は約８㎜である。45は肥厚した口縁を持ち横位に縄文が施される。

底　部

46は底径約5.8cm、約2／3が残存する。器壁は４mm程で小型の土器である。47は底径約９cm、残存率は約13％である。48は底径約6.8cm、残存率14％で底部に１本越え１本もぐり１本おくりの網代圧痕が残る。

胴　部

49は器壁が約７mmで隆帯を持ち浅い平行沈線が施される。50は色調が明黄褐色の橋状把手の部分である。51は器壁が約５mmと比較的薄く縦位の平行沈線が施される。52は器壁が約10mm色調は橙色で平行沈線が施される。53は器壁が約10mm、色調は黒褐色で半截竹管による約８mmの平行沈線が施される。54は器壁が約10mm、色調は橙色である。半截竹管で円形に半隆帯文を引いた後、縄文が施され爪形文を円形に刺突する。55は器壁が約８mm、縦位に沈線が入り左右交互に刺突が施される。56は器壁が約７mm、横位に２本の半隆帯文が引かれ、その間の隆帯に刺突が施される。57は器壁が約12mm、色調が明黄褐色であり半隆帯で区画された中に細い平行沈線が施される。

2　石　器

本遺跡の包含層から出土した石器は2193点である。器種別内訳は石鏃39点、石錐11点、つまみ形石器１点、両極石器13点、ヘラ形石器１点、削器４点、掻器２点、石垂１点、ＲＦ８点、ＵＦ11点、コア７点、磨石・叩石６点、打製石斧18点、フレーク236点、チップ1835点である。出土した剥片石器の石材をみると黒曜石が６点、チャート３点、頁岩１点、その他が下呂石となり、その割合は99.5％をしめている。（石器の分類に関して、小の原遺跡分類や西田遺跡分類を参考にした。）

石　鏃（第29図1～16、図版11）

石鏃は欠損品などを含めて39点あり、尖頭部に欠けのない石鏃は27点である。そのうち先端が尖らず丸いカーブを描くものが６点あり、その他は鋭角な尖頭部を持つ。

尖頭部の分類

１類　先端が鋭角なもの。

２類　先端が尖らず丸いカーブを描くもの。

基部の分類

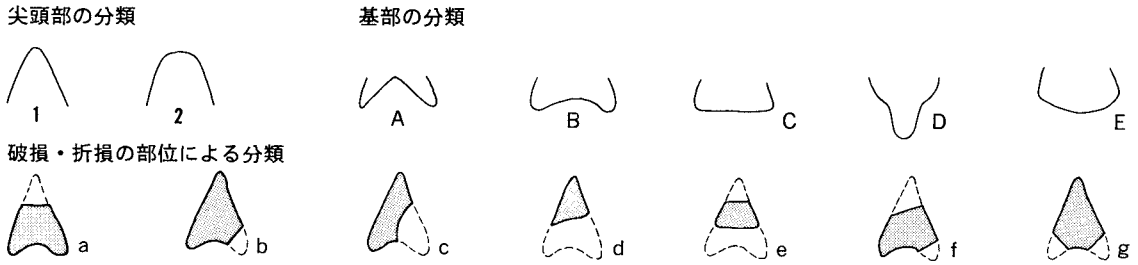
Ａ類　基部の抉りが90度以内のもの。

Ｂ類　基部の抉りが90度以上のもの。

Ｃ類　平基族で基部が直線状になるもの。

Ｄ類　有茎族で基部に茎を持つもの。

Ｅ類　円基鏃で基部が丸みを帯びているもの。



第28図　石鏃の分類

Ａ類、Ｂ類の多くの石鏃は先端が鋭角な１類の石鏃となり、先端が丸いカーブを描く２類の石鏃は基部がＣ類、Ｄ類となる石鏃のみである。基部による分類のＡ類は14点。Ｂ類は10点、平基族のＣ類は６点、有茎族のＤ類が１点、欠損による不明な石鏃が８点であった。法量的には長さ18～25㎜前後、重量は0.4～1.1gに集中している。Ａ類においても基部の抉り部分が「円形」のものや１・５のように「く」の字状のものがあり丁寧な二次加工がされている。抉り部分の深さについては２～５㎜のものが多い。４は黒曜石であり側縁部や基部の抉りに調整が見られる。尖頭部は衝撃による痕が見られ脚部も折損している。Ｃ類は先端部が丸くカーブを描き基部は平基族となる。片面が凸形に膨らみ他面は一次加工のフラットな面に側縁のみ剥離調整を加えた二次加工を施している。（13・14・15）石材はすべて下呂石である。Ｄ類は16の１点のみである。木の葉状を呈する16の石鏃は先端と基部を結ぶ稜線が中心部をはずれ左右非対称となっている。

石錐の分類（第29図17～23、図版11）

石錐は欠損品を含め11点出土した。形状と錐部により次のように分類する。

１類　長い棒状であり、基部と錐部の区別がはっきりしないもの。

２類　つまみ状の基部を持ち、はっきりした錐部を持つもの。

３類　素材の形を大きく変えることなく錐部として利用し、錐部と基部がはっきりしないもの。

１類は２点（17・18）、２類が６点（20～22）、３類は２点（19・23）の合計10点が出土し、全てが下呂石である。１類の17は刃部が折損するが、二辺の側縁部は剥離調整され使用によるつぶれが観察される。18は節理面をもつ粗悪な剥片を素材とし、側縁の一部には使用によるつぶれが観察される。刃部の剥離調整された稜線部分には僅かな磨耗が見られる。２類の19は素材の形状を利用し側縁部分に剥離調整を加えて使用によるつぶれが観察される。また刃部には磨耗痕が観察される。20は一次加工による形状を利用し一辺にのみ調整加工が施される。刃部は折損している。21は素材の形状を利用し側縁に調整加工が施され、刃部が折損する。22は刃部は折損するが、調整部分を三辺持ち断面が三角形を呈する。また、剥離調整された部分に使用によるつぶれが観察される。23は素材の形状を利用し一辺に調整加工を施し、先端部を錐部として使用している。

両極剥離痕のある石器（第29・31図24～29、図版11・12）

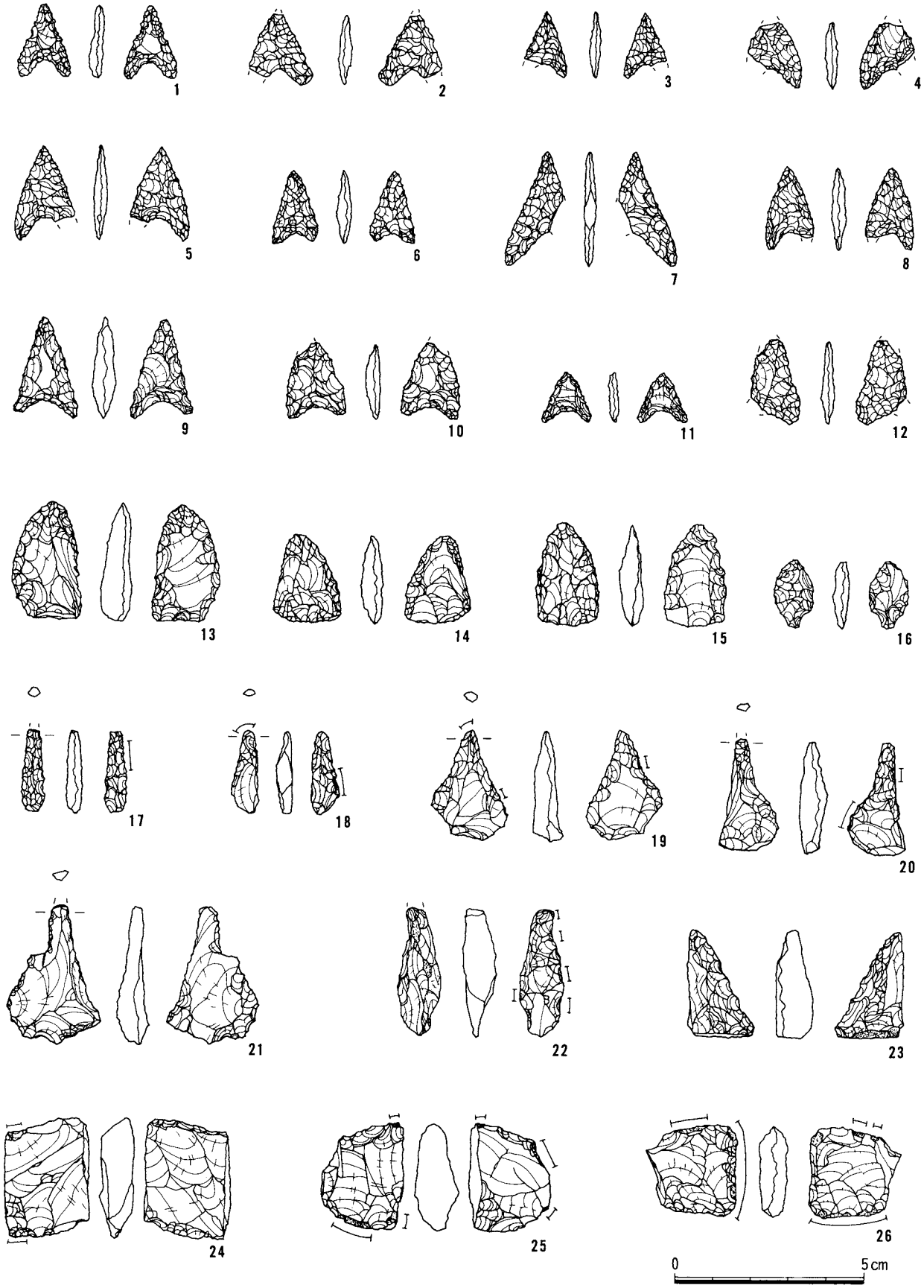
向かい合った二辺ないし四辺の側縁部に剥離痕やつぶれが認められる石器。

１類　縦長で縦に一対の剥離がみられるもの。

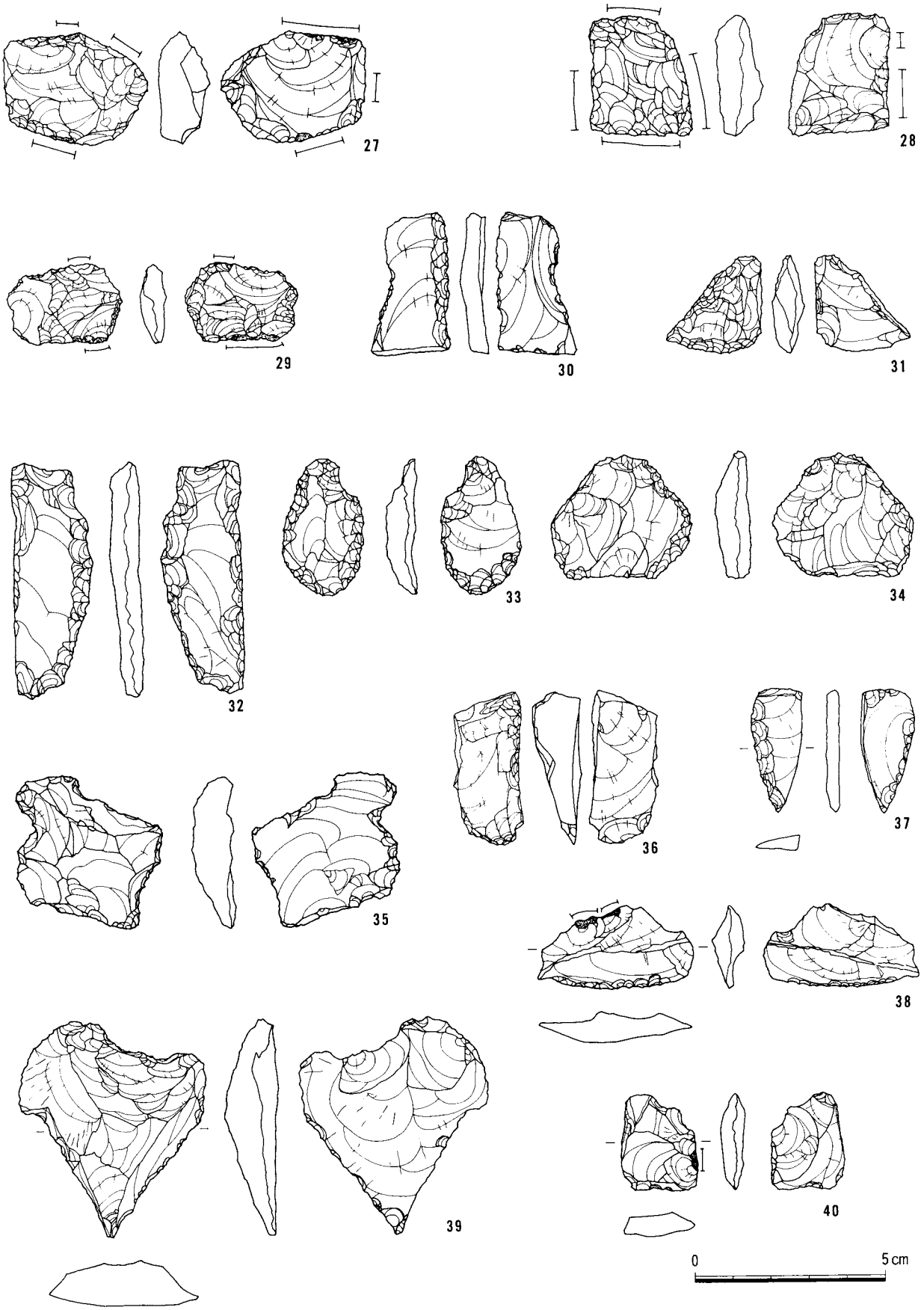
２類　１類以外で一対の剥離痕がみられるもの。

３類　二対以上の複合的な剥離痕がみられるもの。

１類は４点、２類が７点、３類が２点の合計13点で、全てが下呂石である。１類の24は縦に向かい合って剥離を施し、その後、側縁を斜めに折り取り再度刃部に簡単な調整が施されている。25は側縁の一辺は折取り、上下端につぶれが観察される。26は上下端に一対のつぶれが入るほか側縁の一辺に著しいつぶれが観察され、横方向にも楔として機能していた可能性がある。27の山形になった上端部の二辺は、一辺の下端部を共用して著しいつぶれが見られる。28は上下端、左右側縁部につぶれや衝撃による剥離痕が観察される。29は上下端につぶれと側縁部に剥離痕が観察される。



第29図　包含層出土石器①



第30図　包含層出土石器②

掻器・削器（第30図30～34、図版12）

掻器　剥片の側縁に連続的で急角度に調整された刃部を持つ石器。(30・31)

削器　素材となった剥片は不定形なものが多く、剥片の側縁に連続的な調整によって刃部を作り出した石器。(32～34)

掻器として２点、削器として４点が出土している。30は縦長の剥片を素材とし、側縁部の一端を刃部として調整している。刃角は80度であり、石材は頁岩である。31は三角状となる一辺の片面のみ急角度の調整を施す。刃角は78度である。32は縦長の剥片を素材とし側縁部の一端を刃部としている。両面に剥離調整が施され上端付近に抉りを作出している。33は一部が折損しているが、木の葉状の剥片の周囲全体に剥離調整が施され、末端部には両面加工による刃部を形成している。34は剥片の一部に調整加工が施される。

つまみ形石器（第30図35、図版12）

35は素材の形状をいかし、縁部の一部にノッチを入れ刃部として使用しているつまみ形石器である。

ヘラ形石器（第30図36、図版12）

36は縦長剥片の側縁の一辺を折り取り他方の一辺は自然面を利用し、その部分に挟まれた一端に刃部を呈している。

ＲＦ・ＵＦ（第30図37～40、図版12）

ＲＦ　剥片の側縁に連続した剥離痕を施したものを二次加工のある剥片（ＲＦ）とした。

ＵＦ　剥片の側縁に不規則な剥離痕や微細な剥離痕があるものを使用痕のある石器（ＵＦ）とした。

37は連続した剥離痕の中に使用による刃部のつぶれが僅かに見られる。38は一辺に連続した剥離面を持ち、他方には衝撃によるつぶれと剥離が節理面にまでおよんでいる。39は素材となった剥片を利用し簡単な二次加工を施し一部を錐部として使用している。40は側縁部につぶれを持つ。

コア（第31図41～42、図版12）

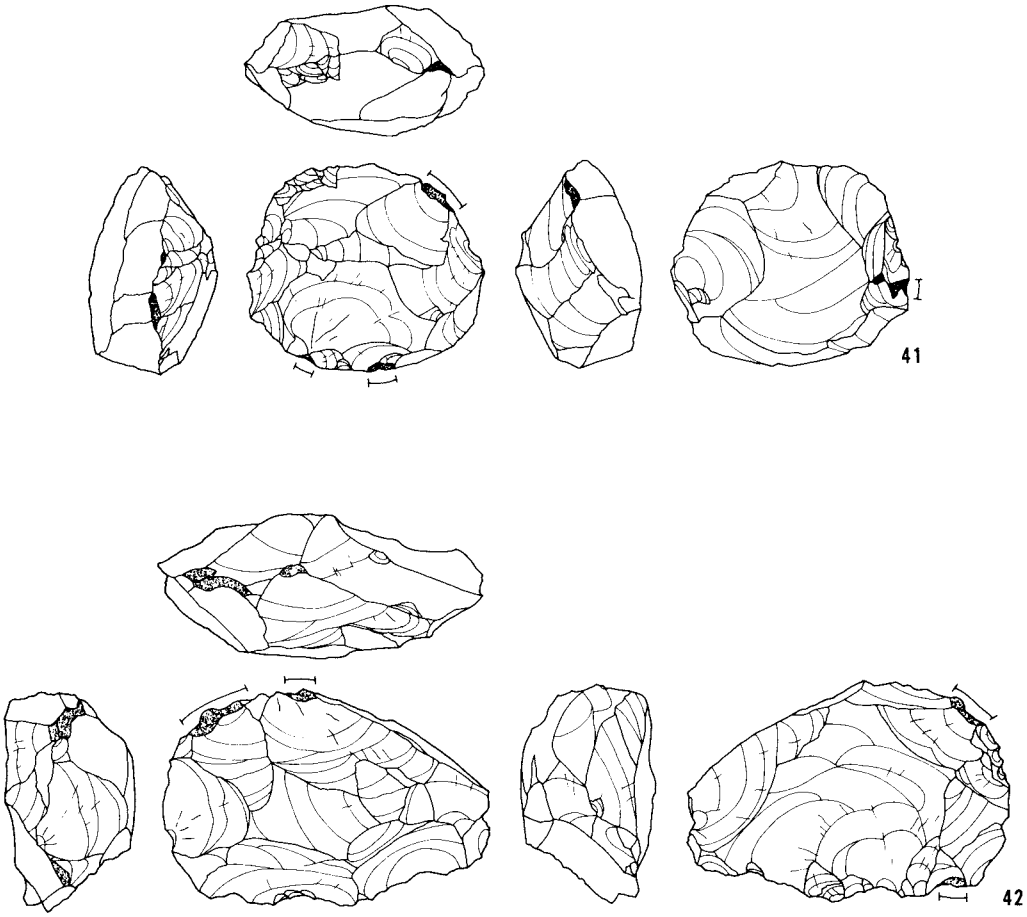
コアは７点出土し、全てが下呂石である。41は円形状の側縁部より剥離作業され断面がレンズ状を呈している。42は全面に剥離作業が行われている。

磨石・敲石類（第33図43～45、図版12）

磨石は６点出土している。43は自然石を用いており、打敲による剥離痕が側縁部の上下に見られる。44は不定形の自然石であり擦り面が一面のみ確認される。45は擦り面を二面もつ。全て凝灰岩である。

石錘（第33図46、図版12）

石錘は１点出土した。48年の発掘時に住居跡から出土した打製石錘と同じように、自然石を用いており、側縁部の上下に打敲によると思われる剥離痕が見られる。大きさは60×31㎜、重さは43.1ｇ、石材は砂岩である。



第31図　包含層出土石器③

0　5cm

打製石斧（第33図47～52、図版12）

打製石斧の形状から、下記のように分類した。

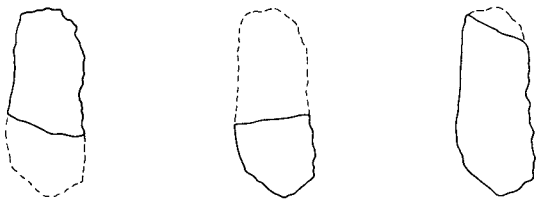
基部形態　１類　胴部がほぼ平行な短冊形とよばれるもの

２類　形状が基部に向かってやや収束するバチ形とよばれるもの

欠損部位　a　刃部を欠く

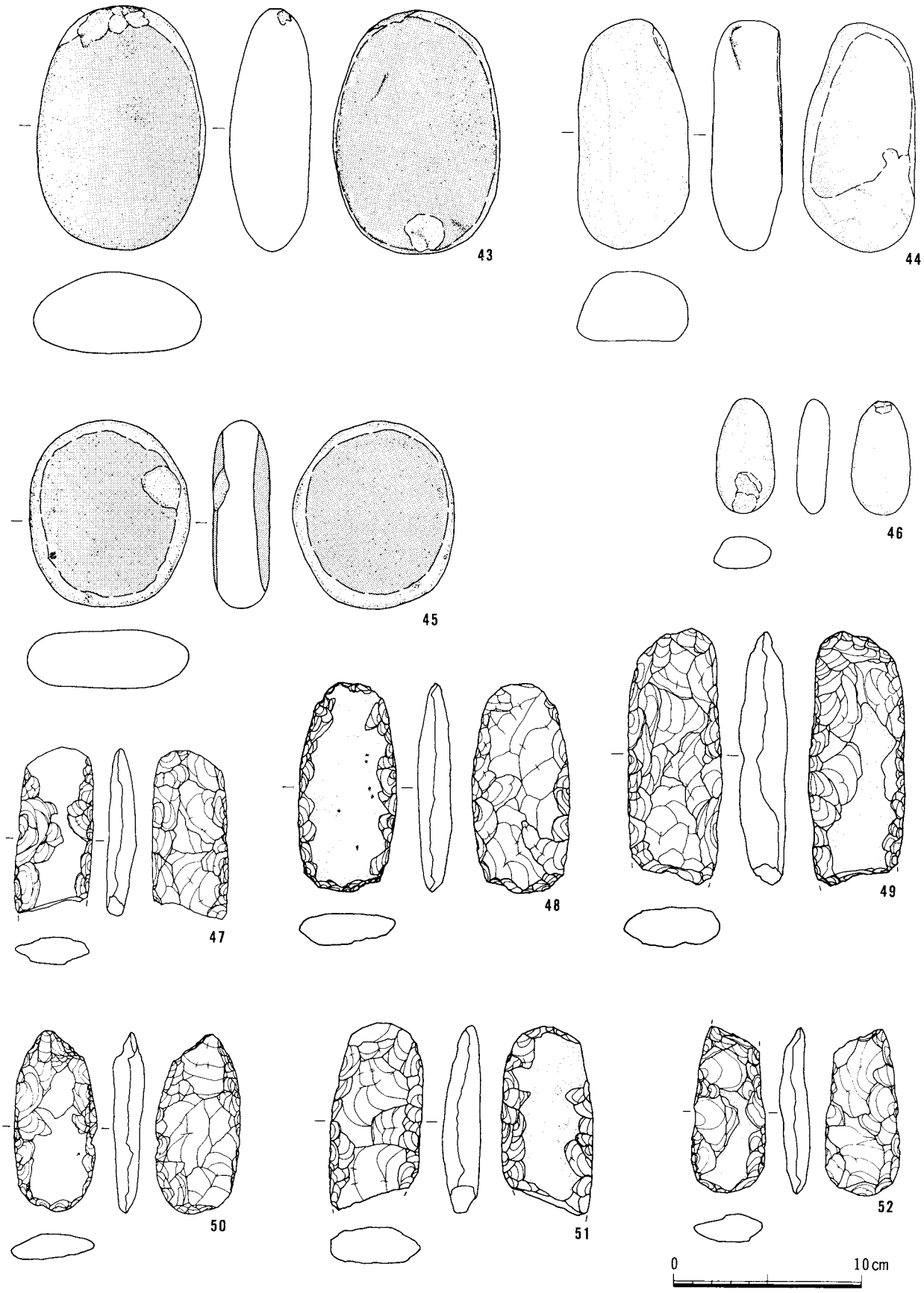
b　基部を欠く

c　基部の一部を欠く



第32図　打製石斧の折損部位

石材は砂岩、凝灰岩、緑色片岩であり18点出土している。そのうち自然面が確認できたのは11点である。刃部が折損などのため確認ができないのもが多く、確認できた６点の刃部は平面形態すべて円刃であり断面形態も片刃が６点であった。47は自然面を持ち短冊形を呈している。基部の一部に大きめの剥離が入る。48は自然面を持ち基部中心にやや膨らみをもつ短冊形である。刃部に損傷があり片刃を呈している。49は自然面を持ち短冊形を呈し刃部に損傷がある。50は自然面を持ち基部にやや膨らみをもち刃部は円刃の片刃を呈している。51は石材が砂岩、自然面を持ち短冊形を呈し刃部が折損している。52は磨耗がはげしく自然面を僅かに残す。バチ形を呈し、基部の基端部を欠損している。



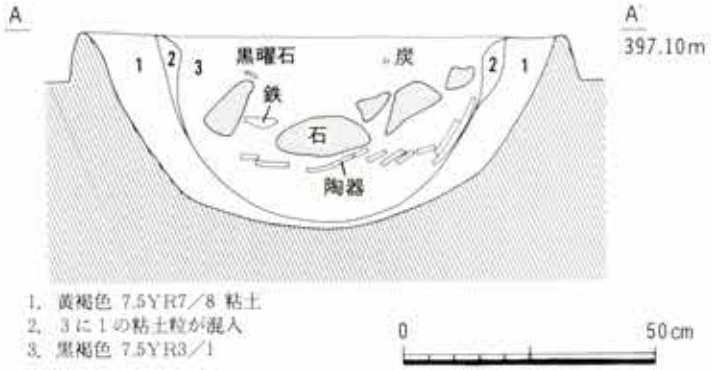
第33図　包含層出土石器④

第５節　古代以降の遺構と遺物

本遺跡からは、縄文時代以外に古代、中近世、現代の遺物が562点が出土した。遺構としては堀立柱建物跡を１棟と土坑を１基検出した。

１　堀立柱建物跡と土坑（第35図堀立柱建物跡）

堀立柱建物跡はD10～D12区に位置する。この地区は水田造成時の地均工事によって掘削されていたが、堀立柱建物跡のピット内部に平たい自然石が８個残存していた。その他、礎石と思われる偏平な石（Ｓ５ア、Ｓ５イ、Ｓ６）がピットの直線上に位置していた。堀立柱建物跡は２列の柱穴が確認され、一列は南北に直線で６カ所（Ｐ１～Ｐ６）あり、柱間距離が、Ｐ１からＰ６まで順に2.0m、2.0m、1.94m、3.05m、1.35mと離れている。石Ｓ５イの柱穴は確認できなかったが、Ｐ４から2.0m離れ、Ｐ５内の石Ｓ５アとは同一個体である。なお、アとイは偏平な焼石で1.0m離れていた。礎石となる石は、約２m、もしくは３mの間隔で並んでいる。もう１列はＰ１～Ｐ５と平行に西方に３m離れ、P10～P14の柱穴が確認された。また、その中間に偏平な石を含む柱穴Ｐ９やピット内に石を含むＰ７・Ｐ９、石を含むＳK44～ＳK47、ＳK55、ＳK56などの土坑もあった。調査区域内で確認された柱穴は11となるが、調査区外の西方に伸びている可能性がある。深度は０～16cmと比較的浅い。

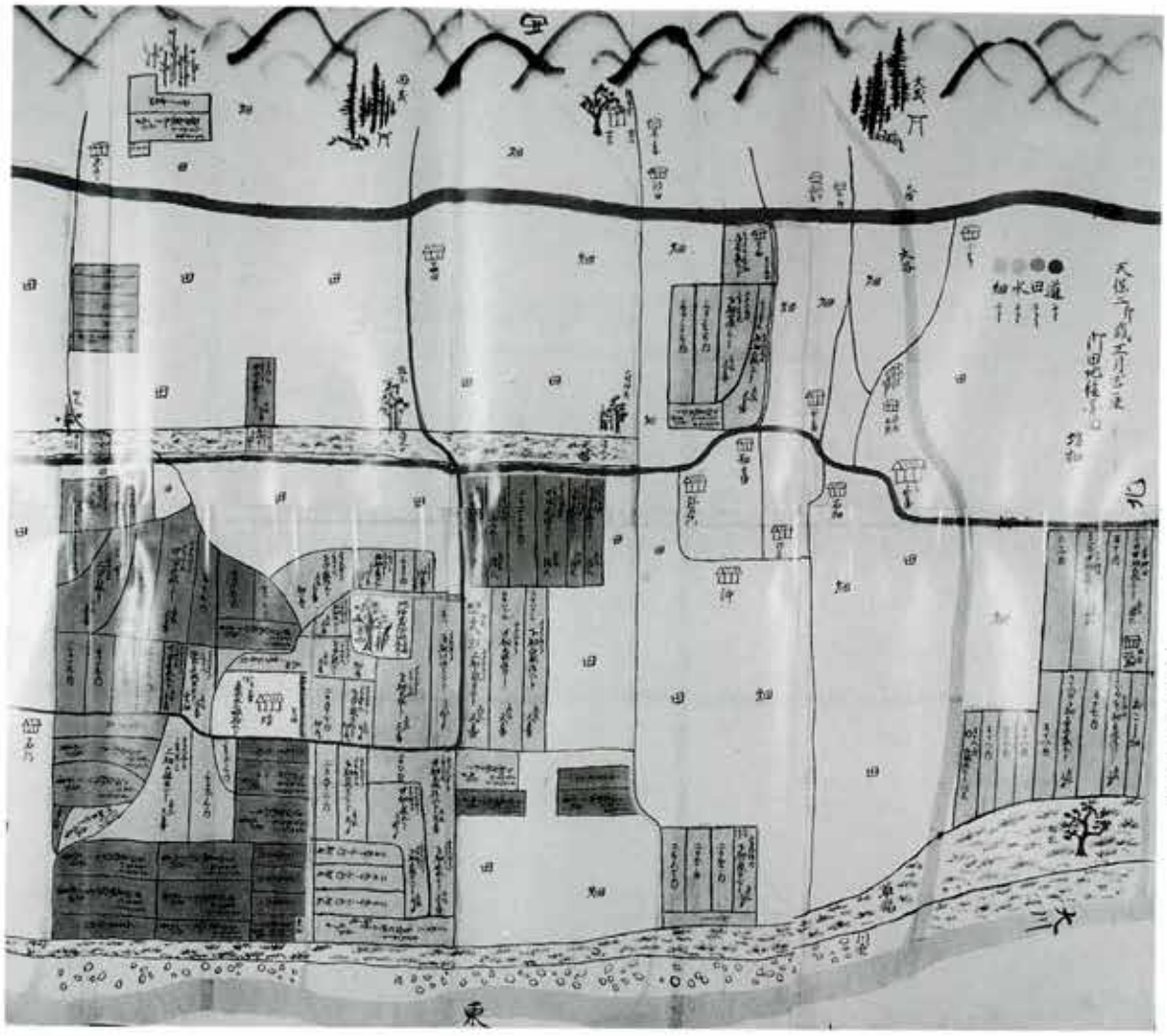


第34図　SK３

1831年（天保２年）の絵地図「天保二卯歳正月吉辰 御田地絵図面 坊□」によると、大川（現飛騨川）と大谷（現石浦谷）と小谷に挟まれたこの地域には、「字沖田 百十ノ内中畑五畝三ト 名請 家の絵 田屋政助」とあり、人家が建っていたことが記録されている。この家の周囲は中畑、下畑、おこし畑とある。当時は水田ではなく畑作として利用され、その畑をとりまく水田が広がっていた。写真１は地元に残された絵地図より複写した。

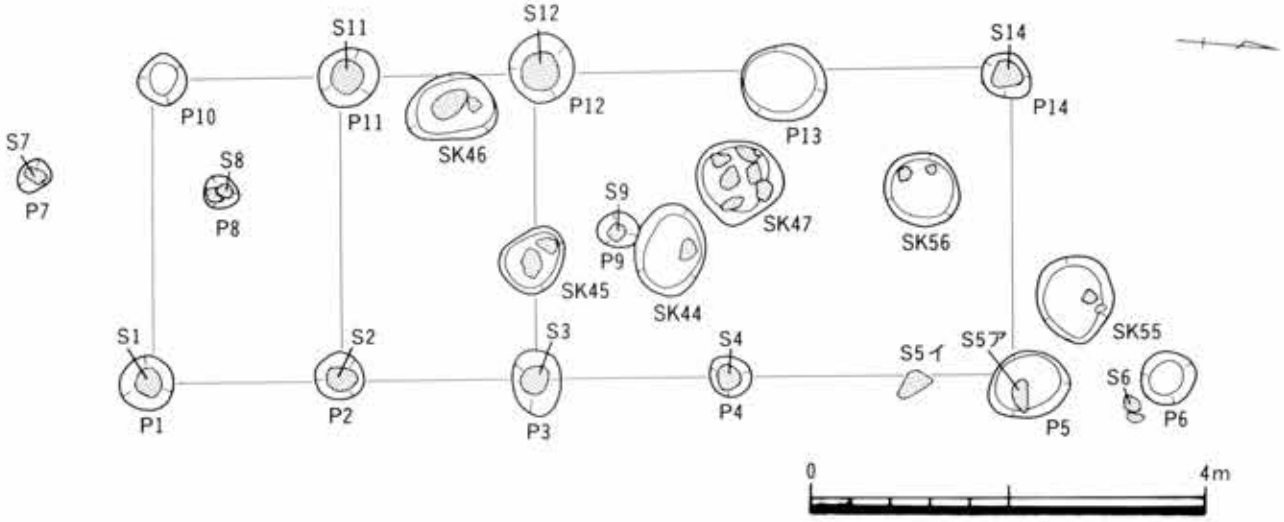
土坑（第35図、ＳＫ３）

この土坑はＣ１区に位置する。Ⅱ層を掘削中に直径１m、幅10cmのドーナツ状の粘土を確認した。粘土の色調は黄褐色7.5ＹＲ7／8であり、断面の厚みは上部で10cm、底部で２cmの擂鉢状に形作られていた。放り込まれたような８個の石（20～40cm）の下には、底部を欠いた常



←字沖田「政助」

写真1　江戸時代絵地図



第35図　堀立柱建物跡

滑焼の甕が出土した。また、腐敗がひどい金属片と鉄釉の陶器１片は、石と同じ高さで混入していた。土坑内の覆土は茶褐色であり、土坑底部の土壌分析の結果、寄生虫などは確認はされなかった。

2　古代以降の遺物

古代以降の遺物として古代の土師器７点、須恵器８点、灰釉陶器38点、山茶碗70点（均質手22点、荒肌手48点）、小碗・小皿８点（均質手５点、荒肌手３点）、古瀬戸25点、大窯23点、瓷器系陶器５点、中国磁器９点、瀬戸美濃201点、肥前２点、常滑118点、中近世の土師器14点、石製品１点、不明33点、合計562点を数える（点数はいずれも接合前の破片数を計測している）。

古代の土師器７点はいずれも同一個体と考えられ、そのうち１点（１）を図示した。１は撫で肩を呈し、口縁部がほぼ直立し端部を丸く収める。胎土はやや粗雑で長石と石英を幾つか含み、にぶい黄橙色を呈する。

須恵器で確認できる器種は、坏、蓋、甕であり、そのうち１点（２）を図示した。２は高台接地面が外側に位置し底部が僅かに内傾する。そして、その胎土から美濃須衛産と想定される。なお、甕は細片が３点出土しており、いずれも外側に平行叩き痕が残り、焼成不良でにぶい橙色を呈する。

灰釉陶器は細片が多く、また、口縁部と体部破片が大半を占めるため、時期的な言及が困難である。器種は碗、皿類のみで、そのうち段皿の体部破片が１点認められた。

山茶碗、小碗、小皿も細片が多い。そのうち破片数では荒肌手が均質手の約２倍出土しており、碗と皿の比率は碗が圧倒的に多い。時期的には荒肌手が藤澤編年（藤澤1994）４形式～６形式、均質手が５形式～７形式まで確認でき、いずれも５形式に比定されるものが目立つ。図示した４点（４～７）のうち底部内面が磨滅しているものはなかった。なお、山茶碗質の鉢の口縁部と壺（瓶？）の体部破片（６）もそれぞれ１点づつみられる。６の内面には黒色有機物が付着しており断面にはみられないことから、黒色有機物は使用時における内容物の痕跡と想定される。

古瀬戸は平碗、天目茶碗、緑釉小皿、折縁中皿、擂鉢、有耳壺などの器種が確認できる。時期的にはいずれも古瀬戸後期後半に比定される。図示した５点（12～16）のうち、15は加工円盤として使用された可能性も考えられる。

大窯は天目茶碗、灰釉丸皿、志野丸皿、端反皿、折縁皿、擂鉢などの器種が確認できる。一時期の遺物がまとまって出土しているわけではなく、少量ながら全時期のものがみられる。

瓷器系陶器としたものは常滑産の可能性が高いと想定されるが、いずれも体部破片であるため断定はできなかった。

中国磁器は青磁４点、白磁５点が出土している。そのうち青磁は体部外面に施されている文様が鎬蓮弁文のもの２点（10など）、線描蓮弁文のもの１点を数え、白磁は太宰府分類（横田・森田1978）Ⅳ類の口縁部１点、森田分類（森田1982）ⅢＥ－２類１点（11）などがある。

瀬戸美濃は破片数が最も多く、輪禿皿、菊皿、染付鍔縁型皿、小坏、染付湯呑、箱形湯呑、腰錆湯呑、天目茶碗、染付丸碗、灰釉丸碗、飴釉丸碗、柿釉丸碗、蓋、香炉、擂鉢、捏鉢、土瓶、甕などの器種が確認できる。擂鉢の口縁形態は、いずれも18世紀後半以後のもので、全体的にみても18世紀後半以後に比定される遺物が多い。図示した６点（23～28）のうち、27は断面逆三角形の削り出し高台を有する輪禿皿で、底部内面に印花文が施されている。26は瓶類の頸部破片であり、頸部と体部の境

に直径1.1cmの粘土粒が貼り付けられている。23・24は同一個体と考えられる。柿釉に灰釉流しが施されている天目茶碗で、体部外面下方は露胎である。

肥前は染付碗の破片１点と内面に染付、外面に青磁釉が施される破片１点が出土している。

中近世の土師器はいずれも細片で、体部外面上方に横ナデが施されている土師器皿、近世の土製品、焙烙、不明器種の体部破片などがある。

その他として石硯（９）がある。長さ3.5cm以上、幅2.1cm、高さ0.6cmを測るいわゆる小型の長方硯である。海と堤の境は明瞭で堤の幅は平均２mmを測る。裏面に抉りはみられず、海に朱墨等の痕跡は確認できない。なお材質は砂岩である。

（参考文献）

藤澤良祐　1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター
横田賢次郎・森田勉　1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』４
森田　勉　1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.２

第３表　古代以降の遺物観察表　単位はcm、（ ）は推定値を示す。

No.	出土区	遺物番号	層	器　種	口径	底径	器高	残　存	釉薬	備　考（整形・調整・文様等）
1	2－C	667	Ⅱ	土師器甕	(13.0)	・	・	口縁 1／12		口縁部内面と口縁部～体部外面横ナデ、体部内面指圧
2	12－B	422	Ⅱ	須恵器坏	・	(9.8)	1.9	底部 2／12		底部内外面回転ナデ、器面に鉄分の吹き出しあり
3	13－C	822	Ⅱ	灰釉陶器碗	(13.6)	・	3.9	口縁 1／12	灰　釉	
4	4－B	940	Ⅱ	山茶碗（荒肌手）	・	(6.6)	2.1	底部 9／12		高台端部籾殻痕、底部外面回転糸切り、底部内面静止指ナデ調整
5	2－C	91	Ⅱ	小皿（均質手）	・	3.3	0.9	底部12／12		底部外面回転糸切り
6	9－B	1012	Ⅱ	陶器壷（瓶）類	・	・	2.8			内面に黒色有機物付着
7	8－B	70	Ⅱ	小碗（荒肌手）	・	4.6	1.8	底部12／12		底部外面回転糸切り
8	9－B	1215	Ⅲ	山茶碗（荒肌手）	・	(6.4)	2.2	底部 3／12		高台端部籾殻痕、底部外面回転ナデ、瀬戸産
9	13－D	823	Ⅱ	石硯	・	・	0.7	一部欠損		材質は砂岩
10	9－B	・	Ⅱ	青磁碗	14.8	・	1.9	口縁 1／12	青　釉	体部外面に鎬蓮弁文
11	11－D	825	Ⅱ	白磁端反皿	8.8	・	1.9	口縁 1／12	透明釉	
12	9－D	411	Ⅱ	古瀬戸擂鉢	・	・	2.1	口縁 1／12	錆　釉	
13	11－D	536	Ⅱ	古瀬戸折縁中皿	12.1	・	2.3	口縁 1／12	灰　釉	
14	8－B	636	Ⅰ	古瀬戸碗類	・	(5.0)	1.6	底部 5／12	灰　釉	底部内面に重ね焼き痕
15	7－D	277	Ⅱ	古瀬戸天目茶碗	・	4.2	1.7	底部12／12	鉄　釉	加工円盤の可能性もある
16	4－B	1044	Ⅱ	古瀬戸天目茶碗	14.1	・	4.4	口縁 1／12	鉄　釉	体部下方回転ヘラ削り
17	1－C	・	Ⅱ	大窯折縁皿	9.6	・	2.4	口縁 1／12	灰　釉	
18	12－C	105	Ⅱ	大窯擂鉢	・	・	2.2	口縁 1／12	錆　釉	
19	5－B	・	Ⅱ	大窯擂鉢	・	・	3.1	口縁 1／12	錆　釉	
20	11－D	824	Ⅲ	大窯擂鉢	33.0	・	2.1	口縁 1／12	錆　釉	
21	SK14	963	Ⅱ	大窯天目茶碗	11.6	・	5.2	口縁 1／12	鉄　釉	体部外面下方回転ヘラ削り
22	7－C	183	Ⅱ	大窯天目茶碗	11.8	・	3.2	口縁 2／12	鉄　釉	
23	SK47	1218	Ⅲ	瀬戸美濃天目茶碗	・	・	6.1	体部 4／12	柿　釉	体部内外灰釉流し
24	SK47	1239	Ⅲ	瀬戸美濃天目茶碗	(12.0)	・	4.1	口縁 3／12	柿　釉	体部内外灰釉流し
25	SK48	1189	Ⅱ	瀬戸美濃天目茶碗	(8.0)	(3.0)	4.2	口縁 4／12	透明釉	体部外面に霊芝文と二重圏線、底部内面に花文
26	1－B	304	Ⅱ	瀬戸美濃瓶類	・	・	3.2	頸部 6／12	灰　釉	
27	SK69	1279	Ⅲ	瀬戸美濃輪禿皿	・	5.8	1.6	底部12／12	灰　釉	底部内面に印花文
28	12－C	183	Ⅱ	瀬戸美濃箱型湯呑	・	3.4	4.7	体部 5／12	透明釉	体部外面に半菊文、斜格子、井桁
29	SK3	1295	Ⅲ	常滑甕	65.8	・	46.2	口縁12／12		体部内面指頭列痕、板状による工具にて斜めナデ

第36図　古代以降の遺物

第４章　アカホヤ火山灰の分析

古橋　美智子・藤根　久（パレオ・ラボ）

１　試料と分析方法

分析試料は、東壁Ｂ13区（層状濃集部）より採取したスポット試料である（図版14参照）。試料は、以下のような分析を行った。

(1) 試料は、超音波洗浄機により分散・洗浄後、2φ(0.25㎜)と3φ(0.125㎜)のふるいを２枚重ね、流水下で湿式ふるい分けを行った。粘土分により水が濁らなくなった後、ふるい残渣を定温乾燥器により乾燥した。

(2) ３φ残渣についてスライドグラス上に適宜散布し、それぞれ偏光顕微鏡下で火山ガラスの形態を観察した。火山ガラスの形態分類は町田・新井（1992）の分類基準により、平板状・Ｙ字状・繊維状・スポンジ状の４タイプに分類し計数した。

なお、火山ガラスの屈折率は、横山・檀原・山下（1986）の方法に従い、温度変化型屈折率測定装置（RIMS-86）により測定し範囲（range）・平均値（mean）で表した。

２　分析結果

第１表　火山ガラス（東壁Ｂ－13区の試料）の形態分類と屈折率測定結果

火山ガラスの形態	
	平板状39.0%, Ｙ字状36.2%, 繊維状20.2%, スポンジ状4.6%
火山ガラスの屈折率測定	
	範囲(range)；1.5029-1.5137, 平均値(mean)；1.5097

火山ガラスの形態はバブル型の平板状やＹ字状が大部分を占め、その他に軽石型の繊維状やスポンジ状が含まれる。火山ガラスの屈折率は、範囲が1.5029-1.5137・平均値が1.5097であった。なお、東壁Ｂ２区試料の火山ガラスも同様の形態的特徴をもつ。

３　テフラの同定

これら火山ガラスは、その形態的特徴や屈折率特性から、町田・新井（1978）の鬼界アカホヤ火山灰（Ｋ－Ａｈ）と考えられる。

Ｋ－Ａｈの火山ガラスの特徴は透明～淡褐色のバブル型のガラスを主体とし、これに軽石型火山ガラスが伴う（町田・新井 1978)。火山ガラスの屈折率の範囲は、n:1.508-1.516を示す（町田・新井 1992)。

検討した火山ガラスは、バブル型のガラスが大部分を占め、その他に軽石型を含む。また、淡褐色のガラスも含まれる。さらに、屈折率の範囲がn:1.5029-1.5137であることから、これらの火山ガラ

スはＫ－Ａｈのものと同定される。

このＫ－Ａｈは九州地方から東北地方南部にかけて広く分布しており、その給源は南九州の薩摩・大隅半島と大隅諸島（屋久島、種子島など）の間に位置し、現在は竹島と硫黄島を残してその大半が浅海底に沈んでいる鬼界カルデラである。また、噴出年代は、このテフラの上下あるいはテフラ中の有機物について求められた14Ｃ年代測定値から、約6300年前とされている（町田・新井 1978、町田・新井 1992）。

４　中部地方の遺跡におけるＫ－Ａｈと考古遺物との関係

中部地方では遺物との関係でＫ－Ａｈが検出された例はまだごく少ない。北部では福井県西下向で先土器（国府型ナイフ形石器類似）包含層の上にＫ－Ａｈが検出されている。また、知多半島では、縄文早期末に浅海底の環境に突然の変化があったことがいくつかの貝塚遺跡で報告され、それがＫ－Ａｈの降灰の影響ではないかと論ぜられている。また、近畿地方に近い福井県鳥浜遺跡ではＫ－Ａｈは北白川下層Ⅱ式土器出土層より下位で、縄文前期羽島下層Ⅱ式併行土器包含層か、あるいはその直下の層準を占める。また、この鳥浜遺跡ではＫ－Ａｈの下位から縄文早期の押型文土器などが出土する（町田・新井 1992）。

（参考文献）

町田　洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰
第四紀研究　17.P.143-163

町田　洋・新井房夫（1992）「火山灰アトラス」 277p 東京大学出版会

横山卓雄・檀原　徹・山下　透（1986）温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定
第四紀研究　25.P.21-30

第5章　結　　語

沖田遺跡は1997（平成９）年の県営土地改良総合整備事業に伴い、発掘調査を実施した。1974（昭和48）年にも南側に隣接する場所が、用水工事のため発掘調査が行われ、縄文早期の櫛描文土器や中期中葉の土器（船元Ⅱ～Ⅳ式に対応）、住居跡が検出されている。

1935（昭和10）年頃の開田工事によって、遺物包含層となるⅡ層が削平されたため、Ｃ１～13、Ｄ１～13区においては耕作土（Ⅰ層）の下に遺構が検出されたⅢ層があらわれた。Ｄ10～13区にある堀立柱建物跡の柱穴の深さも礎石上部まで０～16㎝と浅く、削平されていた。

今回調査した土器の特徴を見ると、ほとんどが小破片であるが、縄文中期初頭～前半と思われる土器が出土している。西日本系の土器として船元Ⅰ～Ⅱ式に類似するものや、関東系の土器として中期前半の勝坂式と見られるもの、北陸の中期初頭と思われる土器、東海の中期初頭の土器、信州の平出Ⅲ類Ａ式に比定される土器など、文化の交流を感じさせる土器の出土は興味深いものがある。

第１号住居跡の床面から出土した土器は、当地方における類例が見あたらず今後の資料の増加を期待する。また、第２号住居跡中央の床面より３㎝のところで出土した新崎式に類似する土器（第16図１）と２片に割られた土器（第16図２）の３片が重なって出土したことは意図的であったと考えることができる。今回の調査により中期初頭から中葉の土器が出土し、前回出土した中期中葉から後半の土器編年に時代の広がりが見られた。

石器の特徴を見ると、石鏃や石錐などの剥片石器が130点出土したうち127点が下呂石であった。フレークやチップなどを含めた2748点の99.9％が下呂石であった。また、出土遺物総数4144点のうち石器が2775点と多数を占めたことや、コアや剥離された大きなフレーク等を見ても下呂町の原産地より原材料が多く運ばれ、当地方にて加工されたものと考えられる。

古代以降の遺物は小破片ながら562点が出土した。1931（昭和６年）の絵図においては当地区に住居はなく水田と化しているが、1831（天保２）年の絵地図や出土遺物などからも江戸後期にこの地区で住居を構えていたと考えられる。また、それ以前においても少数ながら古代・中近世・近代の遺物が出土しており、この地区周辺に長く人々が生活していた様子が感じられる。

Ⅴ層の中に明褐色のアカホヤ火山灰を検出し、発掘調査内の３カ所にトレンチを入れた。近くで縄文早期の土器が出土しているため、その層位の前後を調査したが遺構・遺物を検出することはできなかった。

今回の発掘の調査面積は小範囲であったが、縄文時代の各地域の土器に類似した土器が共に出土したことや、現代までの遺物の出土など多種多様な資料が得られた。この成果が、今後のこの地方の歴史を解きあかす資料になることを期待したい。

引用・参考文献

間壁忠彦・真壁葭子　1971 「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報』第７号
萩原町教育委員会　1974 『飛騨桜洞・沖田』
萩原町教育委員会　1986 『桜洞神田遺跡』
小坂町教育委員会　1984 『南垣内遺跡Ⅰ』
稲武町教育委員会　1995 『クダリヤマ遺跡』
柿崎町教育委員会　1984 『鍋屋町遺跡』
塩尻教育委員会　1987 『史跡　平出遺跡』
岐阜県教育委員会　1991 『小の原遺跡・戸入障子暮遺跡』
小林達夫・小川忠博　1988 『縄文土器大観２・中期Ⅰ』
小林達夫・小川忠博　1988 『縄文土器大観３・中期Ⅱ』
間壁忠彦　1988 「船元・里木式土器様式」『縄文土器大観３　中期Ⅱ』
萩原町誌編集委員会　1962 『萩原町誌　全』
萩原文庫編集委員会　1980 「はぎわら文庫・第３集」『萩原の史跡と史話』
財団法人岐阜県文化財保護センター　1995 『飛瀬・底津遺跡』
所　三男　1989 『岐阜県の地名』

第4表　石器一覧表

第1号住居跡

石　鏃

No.	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ 長さ	大きさ 幅	大きさ 厚み	重量(g)	抉深(mm)	最大幅の位置	分類	欠損部位	挿図
1	SB－1	Ⅱ	738	下呂石	(23)	(16)	6	(1.5)	・	基部	1－C	b	14図1
2	SB－1	Ⅲ	・	下呂石	(13)	16	4	(0.9)	3	基部	・－・	f	

ピエス

No.	出土区	層	遺物番号	石材	長さ	幅	厚み	重量	分類	つぶれ	挿図
1	SB－1	Ⅱ	・	下呂石	23	26	8	5.1	3	有	14図2

石　匙

No.	出土区	層	遺物番号	石材	長さ	幅	厚み	重量	分類	欠損	挿図
1	SB－1	・	611	下呂石	34	42	6	5.8	2－B	○	14図3

抉入石器

No.	出土区	層	遺物番号	石材	長さ	幅	厚み	重量	挿図
1	SB－1	Ⅲ	・	下呂石	42	21	9	9.4	14図4

コア

No.	出土区	層	遺物番号	石材	長さ	幅	厚み	重量	挿図
1	SB－1	・	・	下呂石	55	58	48	106	14図5

RF

No.	出土区	層	遺物番号	石材	長さ	幅	厚み	重量	挿図
1	SB－1	Ⅲ	・	下呂石	23	28	10	5.0	

第2号住居跡

石　鏃

No.	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ 長さ	大きさ 幅	大きさ 厚み	重量(g)	抉深(mm)	最大幅の位置	分類 尖・基	欠損部位	挿図
1	SB－2	Ⅱ	813	下呂石	30	18	7	3.1	・	基部	1－E	・	
2	SB－2	Ⅱ	918	下呂石	(14)	11	3	(0.4)	・	基部	1－・	b	
3	SB－2	Ⅱ	921	下呂石	21	18	5	2.1	・	基部	3－E	・	16図3
4	SB－2	Ⅱ	923	下呂石	(18)	(10)	3	(0.4)	4	尖頭器	・－・	f	
5	SB－2	Ⅱ	929	下呂石	18	10	5	0.7	3	基部	1－C	・	
6	SB－2	Ⅱ	930	下呂石	23	15	5	0.8	4	基部	1－A	・	16図1
7	SB－2	Ⅱ	983	下呂石	23	16	6	1.9	1	基部	1－A	・	16図2
8	SB－2	Ⅱ	1028	下呂石	(17)	10	3	(0.4)	3	基部	1－A	f	16図4
9	SB－2	Ⅱ	1138	下呂石	(18)	9	2	(0.2)	3	基部	1－C	b	

遺物名	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ 長さ	大きさ 幅	大きさ 厚み	重量(g)	挿図
削器	SB－2	Ⅱ	914－1	下呂石	20	29	4	2.5	16図6
ヘラ形石器	SB－2	Ⅱ	915	下呂石	31	9	6	2.1	16図5
RF	SB－2	Ⅱ	986	下呂石	33	34	10	8.5	16図7
RF	SB－2	Ⅱ	・	チャート	10	17	5	1.0	
UF	SB－2	Ⅱ	・	下呂石	21	20	5	2.2	
コア	SB－2	Ⅱ	1026	下呂石	49	33	28	30.0	16図9

遺物名	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ 長さ	大きさ 幅	大きさ 厚み	重量(g)	分類	使用	挿図
石錐	SB－2	Ⅱ	924	下呂石	42	18	7	2.5	2－A	・	16図8

土　坑

石　鏃

No.	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ 長さ	大きさ 幅	大きさ 厚み	重量(g)	抉深(mm)	最大幅の位置	分類	欠損部位	挿図
1	SK－5	Ⅱ	1210	下呂石	(22)	15	5	(1.2)	2	基部	・－C	a	21図1
2	SK－12	Ⅱ	863	下呂石	19	13	3	(0.6)	4	基部	1－A	b	18図2
3	SK－12	Ⅱ	1085	下呂石	13	14	2	(0.4)	5	尖頭	1－A	b	18図1
4	SK－12	Ⅱ	1086	下呂石	(32)	(15)	5	(1.8)	5	基部	1－A	b	18図3
5	SK－13	Ⅱ	805	下呂石	30	(14)	3	(1.1)	3	基部	1－B	b	18図4
6	SK－27	Ⅱ	1126	下呂石	(16)	(10)	2	(0.3)	1	基部	1－・	e	21図2
7	SK－28	Ⅱ	1128	下呂石	(15)	(7)	2	(0.1)	・	尖頭	・－・	g	

磨　石

No.	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ 長さ	大きさ 幅	大きさ 厚み	重量(g)	磨石 表	磨石 側面	磨石 裏	分類	挿図
1	SK－17	Ⅱ	973	凝灰岩	94	79	53	517	1	1	1	2－B	21図5
2	SK－29	Ⅲ	1245	凝灰岩	150	88	60	1179	1	1	1	2－B	21図7
3	SK－36	Ⅲ	1236	凝灰岩	79	102	47	525	1	・	1	2－B	
4	SK－47	Ⅲ	1281	凝灰岩	96	62	33	320	1	1	1	3－D	21図6

打製石斧

No.	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ 長さ	大きさ 幅	大きさ 厚み	重量(g)	基部形態	分類 平・断	折損部位	自然面	挿図
1	SK－12	Ⅱ	466	凝灰岩	60	38	11	34	1	・－・	a	○	18図5
2	SK－16	Ⅱ	942	凝灰岩	65	45	11	57	1	3－B	a	○	21図4

ピエス

No.	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ 長さ	大きさ 幅	大きさ 厚み	重量(g)	分類	つぶれ	挿図
1	SK－12	Ⅱ	1082	下呂石	26	23	8	5.0	2	有	
2	SK－21	Ⅱ	1130	下呂石	47	32	12	12.3	2	有	21図3

遺物名	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ 長さ	大きさ 幅	大きさ 厚み	重量(g)	挿図
削器	SK－12	Ⅱ	939	下呂石	48	64	15	46.0	18図6
UF	SK－21	Ⅱ	1130	下呂石	47	32	11	12.0	
石	SK－70	Ⅲ	1280	瑪瑙	44	39	23	56.0	

第5表　包含層出土石器一覧表①

石　鏃

No.	出土区	層	遺物番号	石　材	大きさ 長さ	大きさ 幅	大きさ 厚み	重量 (g)	抉深 (mm)	最大幅の位置	分類 尖頭－基部	欠損部位	挿　図
1	1－B	Ⅱ	315	下呂石	(18)	(14)	2	(0.6)	・	基部	・－・	f	
2	1－B	Ⅱ	546	下呂石	19	14	3	0.6	4	基部	1－A	・	29図1
3	1－B	Ⅱ	・	下呂石	24	17	6	1.9	・	基部	1－C	・	29図14
4	2－B	Ⅱ	203	下呂石	(19)	(17)	3	(0.6)	4	基部	1－A	f	29図2
5	2－C	Ⅱ	93	下呂石	27	17	7	1.5	5	基部	1－B	・	29図9
6	2－C	Ⅱ	334	下呂石	(19)	(12)	3	(0.6)	3	基部	・－A	f	
7	2－C	Ⅱ	・	下呂石	(20)	24	11	(6.5)	・	基部	・－・	e	
8	2－C	Ⅱ	・	下呂石	(18)	(10)	2	0.4	2	基部	1－A	b	
9	2－D	Ⅱ	337	下呂石	32	(23)	10	6.9	・	基部	2－・	b	
10	3－B	Ⅱ	47	下呂石	(16)	12	5	(0.7)	4	基部	・－A	a	
11	3－B	Ⅱ	290	下呂石	(18)	(11)	3	(0.3)	4	基部	1－A	b	29図3
12	3－D	Ⅲ	507	黒曜石	(18)	(14)	3	(0.5)	5	基部	2－A	f	29図4
13	4－B	Ⅰ	37	下呂石	(25)	(16)	4	(0.9)	6	基部	1－A	b	29図5
14	4－C	Ⅰ	31	下呂石	19	12	4	0.6	3	基部	1－A	・	29図6
15	4－D	Ⅱ	131	下呂石	(19)	14	3	(0.8)	5	基部	・－C	a	
16	5－B	Ⅱ	454	下呂石	19	13	4	0.7	2	基部	1－B	・	
17	5－B	Ⅱ	1236	下呂石	(18)	(11)	3	(0.7)	2	基部	1－B	b	
18	6－B	Ⅱ	・	下呂石	(12)	(8)	2	(0.2)	・	尖頭	1－・	d	
19	6－C	Ⅱ	126	下呂石	(16)	(8)	3	(0.2)	4	基部	1－A	b	
20	8－B	Ⅰ	29	下呂石	20	15	4	1.0	3	基部	・－B	a	29図10
21	8－B	Ⅱ	883	下呂石	(23)	(13)	3	(0.7)	3	基部	・－B	f	29図12
22	9－B	Ⅱ	888	下呂石	(12)	(14)	2	(0.4)	5	基部	1－B	b	
23	9－B	Ⅱ	893	下呂石	13	13	2	0.3	3	基部	1－B	・	29図11
24	9－C	Ⅱ	171	下呂石	31	17	8	4.2	・	基部	2－C	・	29図13
25	9－C	Ⅱ	835	下呂石	(30)	(10)	3	(0.8)	4	基部	1－A	c	29図7
26	10－C	Ⅱ	327	下呂石	28	16	6	2.5	・	基部	2－C	・	29図15
27	11－B	Ⅱ	・	下呂石	(19)	18	3	(1.1)	3	基部	・－C	a	
28	11－B	Ⅱ	・	下呂石	(14)	13	3	(0.5)	・	基部	・－B	a	
29	11－C	Ⅱ	215	下呂石	(22)	(7)	2	(0.4)	3	基部	1－A	c	
30	11－C	Ⅱ	・	下呂石	(19)	18	5	(1.5)	3	基部	・－C	a	
31	12－D	Ⅱ	265	下呂石	(15)	9	3	(0.3)	2	基部	・－・	e	
32	表採	・	1	黒曜石	(15)	(14)	4	(0.8)	3	基部	・－・	f	
33	表採	・	2	下呂石	(20)	(10)	3	(0.4)	4	基部	1－A	b	
34	表採	・	3	下呂石	20	16	5	1.1	1	基部	1－B	・	
35	表採	・	4	下呂石	18	11	4	0.7	・	尖頭	2－D	・	29図16
36	表採	・	5	下呂石	(15)	(18)	4	(0.9)	・	基部	1－・	d	29図8
37	表採	・	6	下呂石	(22)	12	4	(0.7)	4	基部	1－A	b	
38	表採	・	7	下呂石	(24)	(14)	3	(1.1)	5	基部	1－B	b	
39	表採	・	8	下呂石	(24)	(19)	6	(3.1)	・	基部	2－・	d	

石　錐

No.	出土区	層位	遺物番号	石　材	大きさ(mm) 長さ	大きさ(mm) 幅	大きさ(mm) 厚み	重量 (g)	分類	錐部欠損	使用痕	挿　図
1	1－C	Ⅱ	134	下呂石	22	7	4	0.7	1	・	○	29図18
2	1－C	Ⅱ	・	下呂石	(30)	14	7	(2.2)	2	○	・	29図20
3	1－C	Ⅱ	・	下呂石	(34)	11	8	(2.9)	2	○	・	29図22
4	3－B	Ⅱ	・	下呂石	(38)	23	8	(4.1)	2	○	・	29図21
5	3－C	Ⅱ	・	下呂石	(23)	(20)	6	1.9	2	○	・	
6	9－B	Ⅱ	840	下呂石	(19)	17	5	(1.4)	2	○	・	
7	9－B	Ⅱ	847	下呂石	29	19	6	2.9	3	・	○	29図19
8	9－C	Ⅱ	1104	下呂石	(22)	6	4	(0.5)	1	○	・	29図17
9	表採	・	1	下呂石	29	18	10	4.3	3	・	○	29図23
11	表採	・	2	下呂石	29	17	5	1.9	2	○	・	

両極石器

No.	出土区	層位	遺物番号	石　材	大きさ(mm) 長さ	大きさ(mm) 幅	大きさ(mm) 厚み	重量 (g)	分類	つぶれ	剥離	挿　図
1	1－C	Ⅱ	・	下呂石	26	21	6	3.4	1	○	○	
2	2－B	Ⅱ	231	下呂石	21	30	6	3.7	3	○	○	31図29
3	2－C	Ⅱ	・	下呂石	21	18	5	2.2	2	○	・	
4	4－D	Ⅱ	・	下呂石	27	23	11	6.4	2	○	・	29図25
5	7－C	Ⅱ	・	下呂石	38	27	10	9.0	2	○	○	
6	9－B	Ⅱ	・	下呂石	26	18	8	3.7	2	○	・	
7	11－B	Ⅱ	・	下呂石	26	24	7	4.9	2	○	・	29図26
8	表採	・	1	下呂石	30	38	10	11.0	2	○	・	31図27
9	表採	・	2	下呂石	32	26	11	8.8	3	○	・	31図28
10	表採	・	3	下呂石	24	19	8	3.2	2	○	・	
11	表採	・	4	下呂石	30	22	8	7.7	1	○	○	29図24
12	表採	・	5	下呂石	20	17	7	2.4	1	・	○	
13	表採	・	6	下呂石	21	23	6	3.3	1	○	・	

ヘラ形石器

No.	出土区	層位	遺物番号	石　材	大きさ(mm) 長さ	大きさ(mm) 幅	大きさ(mm) 厚み	重量 (g)	分類	挿　図
1	3－B	Ⅱ	・	下呂石	39	17	13	10.1	2	31図36

第6表　包含層出土石器一覧表②

R　F

No.	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ 長さ	幅	厚み	重量(g)	挿図
1	1－C	Ⅱ	342	下呂石	59	44	12	32.7	
2	3－B	Ⅱ	605	下呂石	24	32	7	5.1	
3	5－B	Ⅱ	・	下呂石	21	27	6	2.4	
4	9－B	Ⅱ	574	下呂石	32	12	4	2.1	31図37
5	9－B	Ⅱ	・	下呂石	28	26	6	5.1	
6	9－C	Ⅱ	1063	下呂石	35	14	6	2.7	
7	10－C	Ⅱ	446	下呂石	22	40	8	5.2	31図38
8	11－C	Ⅱ	・	下呂石	27	17	4	1.3	

U　F

No.	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ 長さ	幅	厚み	重量(g)	挿図
1	1－B	Ⅱ	・	下呂石	20	22	7	3.3	
2	1－C	Ⅱ	・	下呂石	24	18	7	2.8	
3	1－D	Ⅱ	・	下呂石	38	31	9	8.8	
4	3－C	Ⅱ	234	下呂石	32	19	6	3.5	
5	4－B	Ⅲ	・	下呂石	32	29	6	5.9	
6	5－B	Ⅰ	356	下呂石	33	28	7	6.1	
7	10－B	Ⅱ	686	下呂石	58	40	12	26.1	31図39
8	10－D	Ⅱ	252	下呂石	40	23	5	3.8	
9	10－D	Ⅱ	264	下呂石	36	21	13	7.5	
10	11－B	Ⅱ	・	下呂石	32	18	6	2.9	
11	表採	・	・	下呂石	26	18	6	3.2	31図40

掻器

No.	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ 長さ	幅	厚み	重量(g)	挿図
1	5－B	Ⅰ	352	下呂石	26	23	8	4.4	31図31
2	8－B	Ⅱ	887	頁岩	37	21	6	5.5	31図30

削器

No.	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ 長さ	幅	厚み	重量(g)	挿図
1	4P4	Ⅱ	1044－2	下呂石	19	18	7	3.2	
2	5－B	Ⅱ	・	下呂石	62	22	8	11.8	31図32
3	8－C	Ⅱ	117	下呂石	37	20	8	4.9	31図33
4	0－D	Ⅱ	1200	下呂石	33	37	8	10.4	31図34

つまみ形石器

No.	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ 長さ	幅	厚み	重量(g)	挿図
1	8－B	Ⅱ	122	下呂石	41	32	10	12.8	31図35

コア

No.	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ 長さ	幅	厚み	重量(g)	挿図
1	2－B	Ⅰ	18	下呂石	43	65	26	65.4	
2	2－B	Ⅱ	590	下呂石	40	43	18	28.3	32図42
3	2－C	Ⅱ	1238	下呂石	48	47	30	52.9	
4	8－B	Ⅰ	634	下呂石	41	47	24	47.1	32図41
5	10－D	Ⅱ	674	下呂石	33	30	25	29.6	
6	表採	・	1	下呂石	32	41	21	29.3	
7	表採	・	2	下呂石	59	44	14	46.1	

磨石・敲石

No.	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ 長さ	幅	厚み	重量(g)	磨面 表	側面	裏	挿図
1	2－B	Ⅱ	879	凝灰岩	121	58	37	417	・	・	1	33図44
2	3－B	Ⅱ	882	凝灰岩	132	68	44	623	1	1	1	
3	7－C	Ⅱ	1276	凝灰岩	129	89	43	656	1	・	1	33図43
4	9－C	Ⅱ	895	凝灰岩	83	65	33	281	1	・	1	
5	11－D	Ⅱ	324	凝灰岩	112	78	45	594	1	1	1	
6	12－D	Ⅱ	323	凝灰岩	99	86	31	398	1	・	1	33図45

石錘

No.	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ 長さ	幅	厚み	重量(g)	挿図
1	2－C	Ⅱ	335	砂岩	60	31	17	43.1	33図46

打製石斧

No.	出土区	層位	遺物番号	石材	大きさ(mm) 長さ	幅	厚み	重量(g)	分類 基部	刃部	欠損部位	自然面	挿図
1	1－B	Ⅱ	136	凝灰岩	(44)	66	10	(34)	・	・	b	・	
2	1－C	Ⅱ	147	凝灰岩	111	52	17	130	1	A	・	○	23図48
3	1－C	Ⅱ	149	緑色片岩	(62)	36	12	(35)	1	・	a	・	
4	1－C	Ⅱ	1057	砂岩	89	39	14	(68)	1	・	a	○	23図47
5	2－B	Ⅱ	880	凝灰岩	(135)	50	23	(207)	1	・	a	○	23図49
6	4－D	Ⅲ	286	凝灰岩	(35)	40	11	(19)	・	・	a	・	
7	6－D	Ⅱ	245	凝灰岩	(61)	57	18	(76)	1	A	b	○	
8	6－D	Ⅱ	330	砂岩	(100)	48	19	(127)	1	・	a	○	23図51
9	9－B	Ⅱ	845	砂岩	(58)	(42)	6	(50)	2	・	a	○	
10	9－C	Ⅱ	170	凝灰岩	(89)	37	15	(66)	2	A	c	○	23図52
11	9－C	Ⅱ	995	凝灰岩	(69)	43	14	(48)	1	・	a	○	
12	10－B	Ⅱ	109	凝灰岩	(71)	50	16	(61)	1	・	a	・	
13	10－C	Ⅱ	560	凝灰岩	(52)	47	15	(43)	1	・	a	・	
14	10－D	Ⅱ	253	凝灰岩	(47)	49	8	(13)	1	・	a	・	
15	10－E	Ⅲ	1195	凝灰岩	(71)	41	14	(44)	1	・	a	○	
16	11－C	Ⅱ	・	凝灰岩	97	45	14	77	1	A	c	○	23図50
17	11－E	Ⅱ	1188	砂岩	(55)	58	15	54	1	A	b	○	
18	表採	・	・	凝灰岩	(81)	46	16	65	1	・	a	・	

1．沖田遺跡遠景

2．沖田遺跡近景

3．調査前全景

4．調査後全景

5．調査前（北方向を望む）

6．調査後（北方向を望む）

7．表土剥ぎ（重機にて）

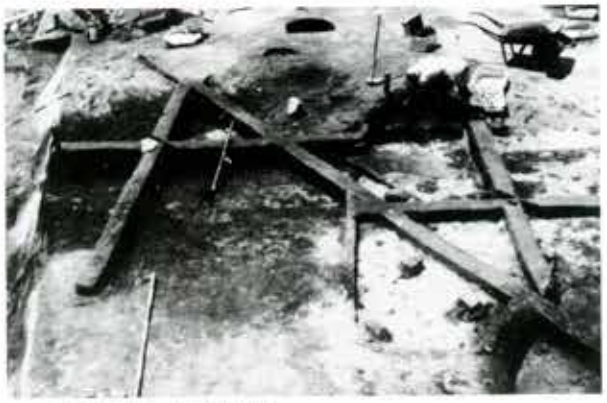
8．表土剥ぎ後

図版2

1．作業風景（包含層掘削）

2．作業風景（土坑検出）

3．作業風景（ＳＢ２検出）

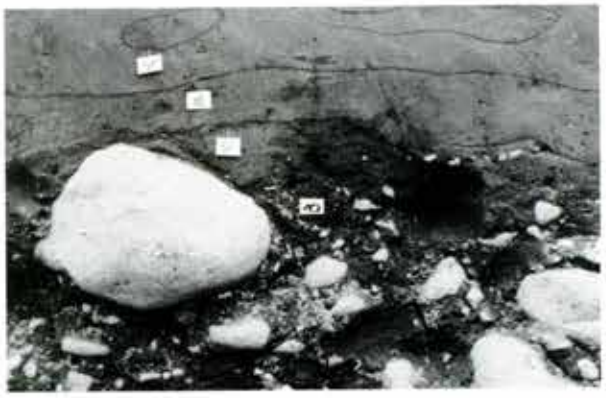


4．作業風景（不明遺構）

5．不明遺構

6．集石遺構

7．土層断面①　B13～C13



8．土層断面②　B13～C13

1．第1号住居跡

2．第1号住居跡遺物出土状況①

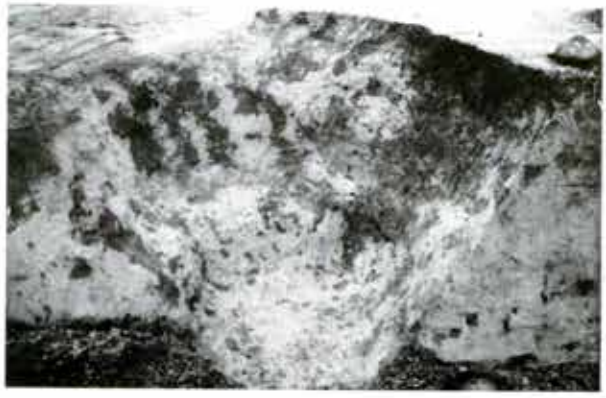
3．第1号住居跡（断面）

4．第1号住居跡遺物出土状況②

5．第2号住居跡

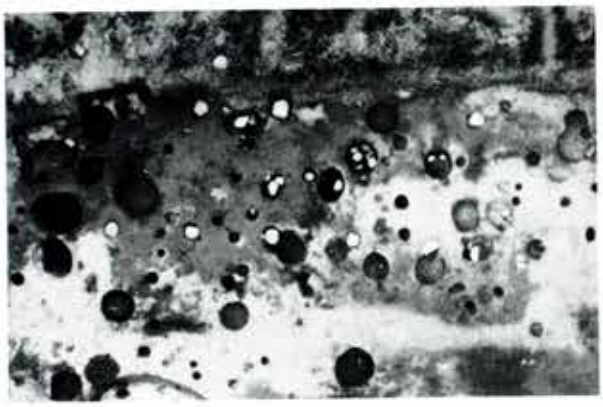
6．第2号住居跡遺物出土状況

7．SK－16（断面）



8．SK－16

図版4

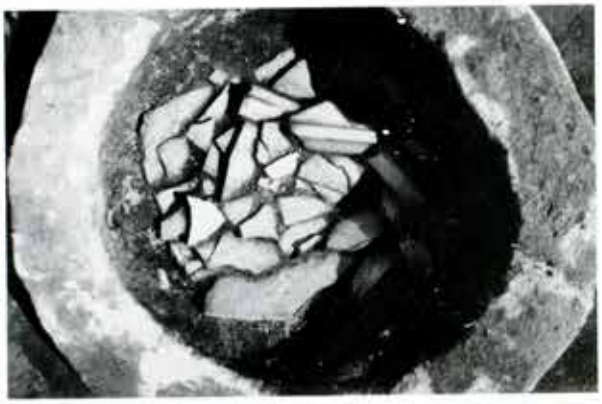


1．掘立柱建物跡

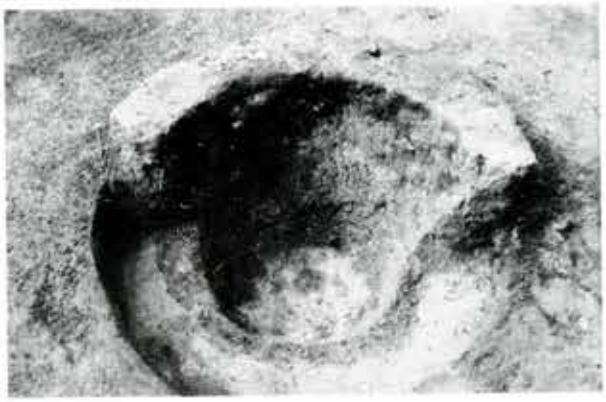
2．掘立柱建物跡（北方向を望む）

3．掘立柱建物跡の礎石

4．風倒木痕（ＳＫ10・11）



5．ＳＫ３

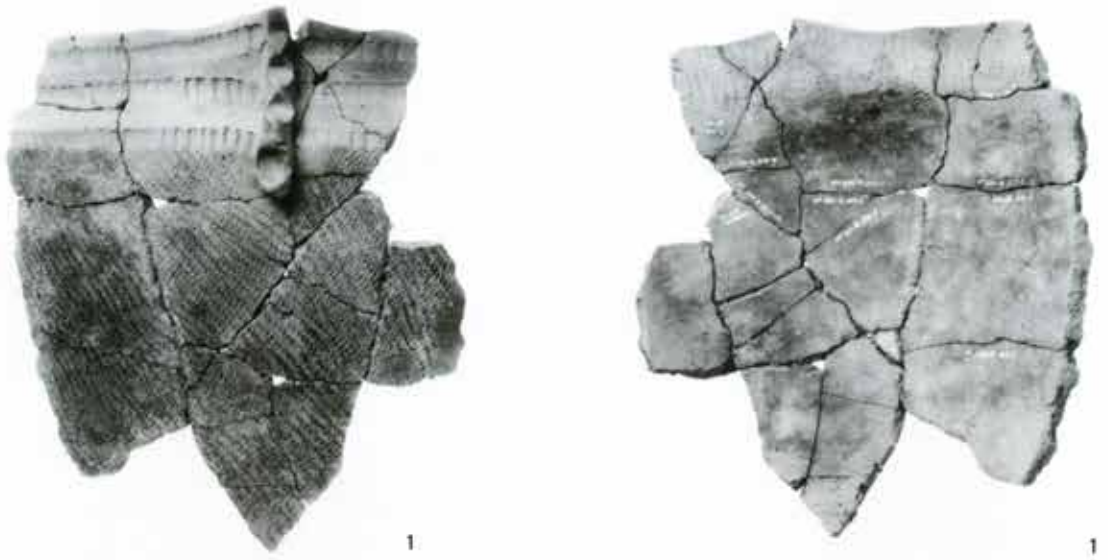


6．ＳＫ３

7．トレンチ①（Ｄ－１）

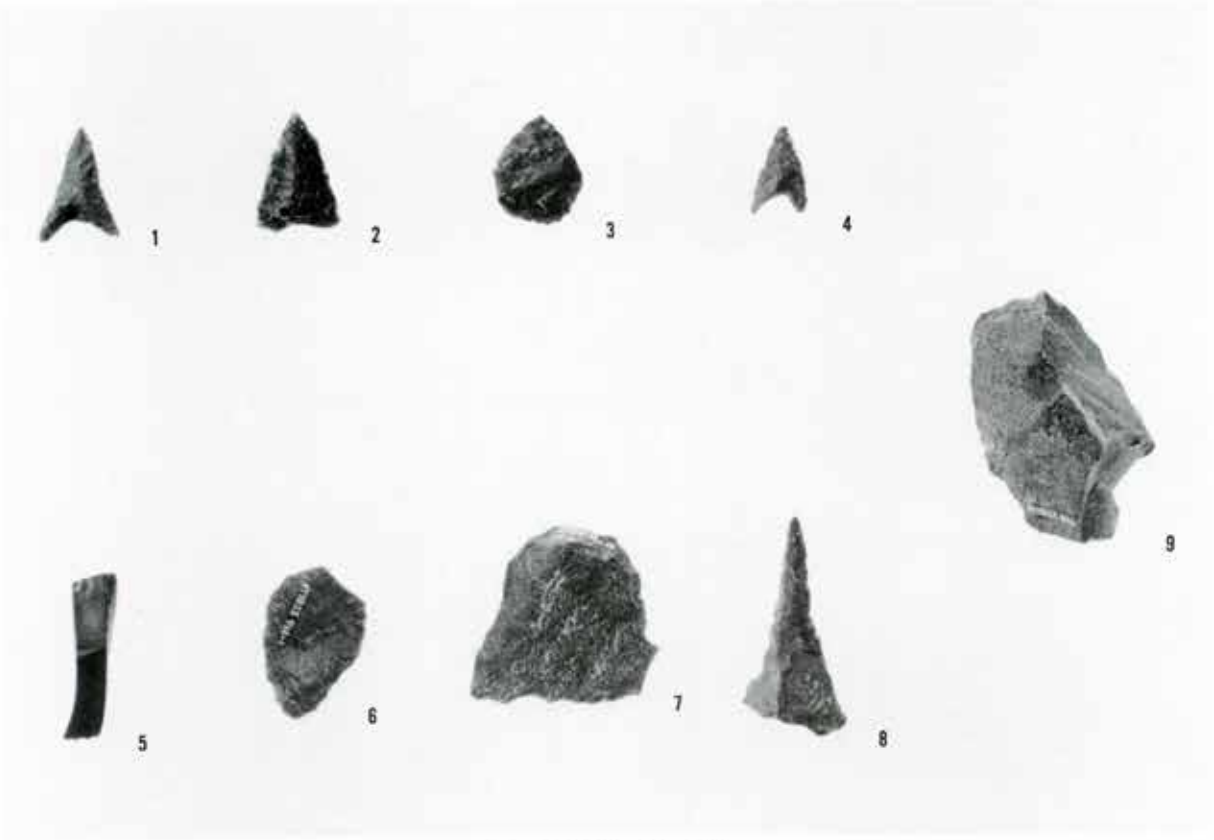
8．トレンチ②（Ｂ６～Ｄ６）

第1号住居跡出土石器

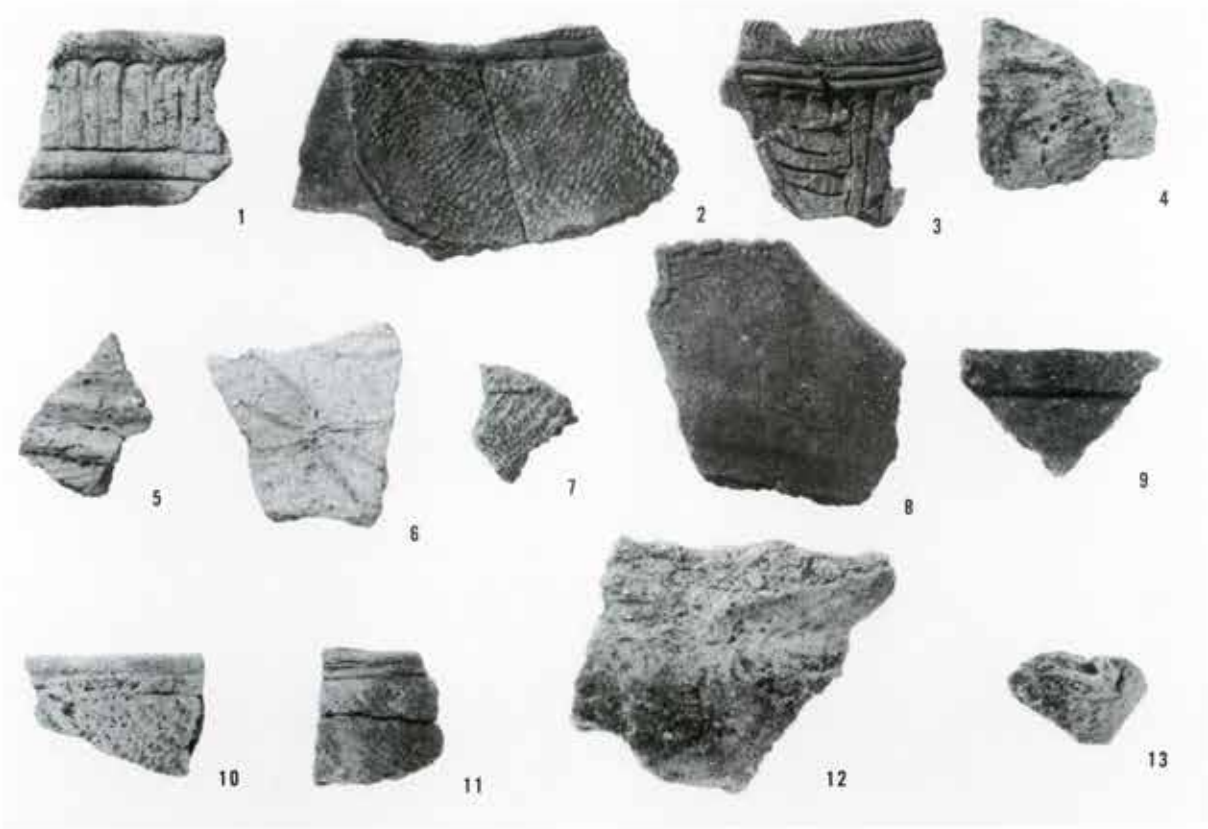


第1号住居跡出土土器

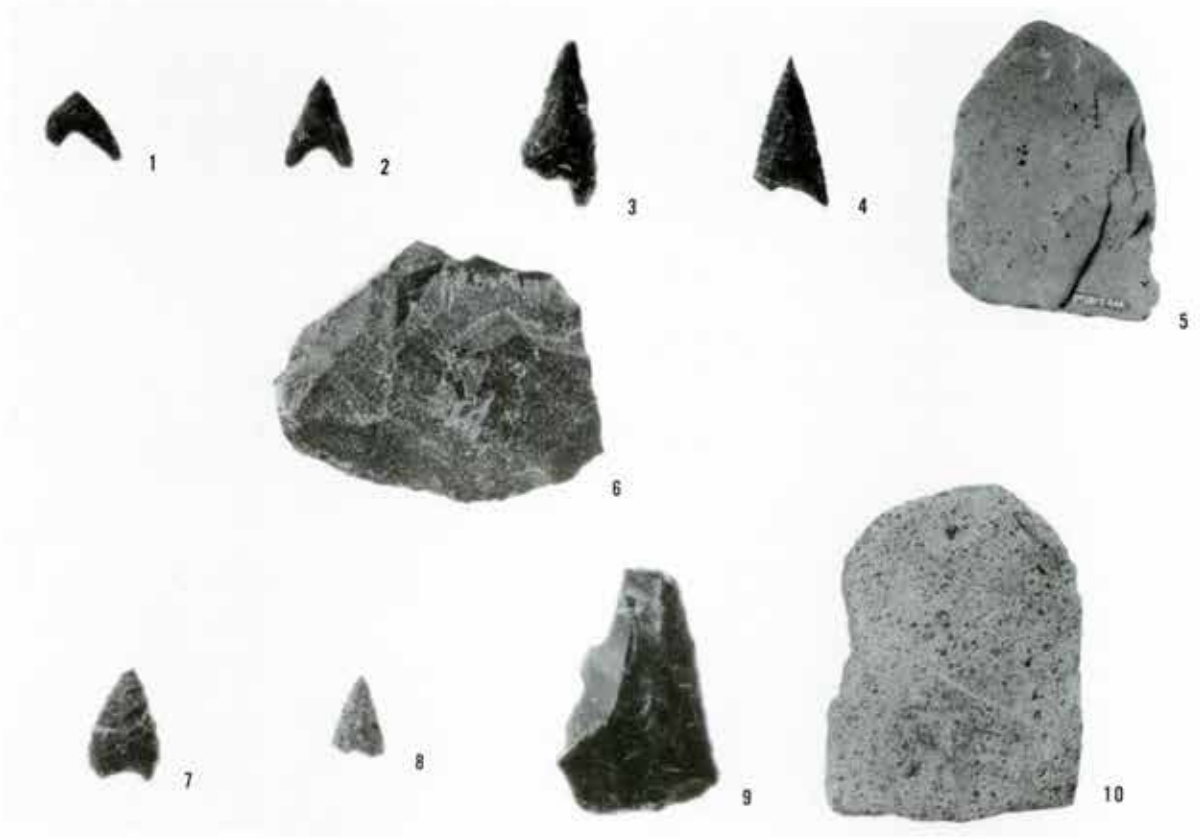
図版6



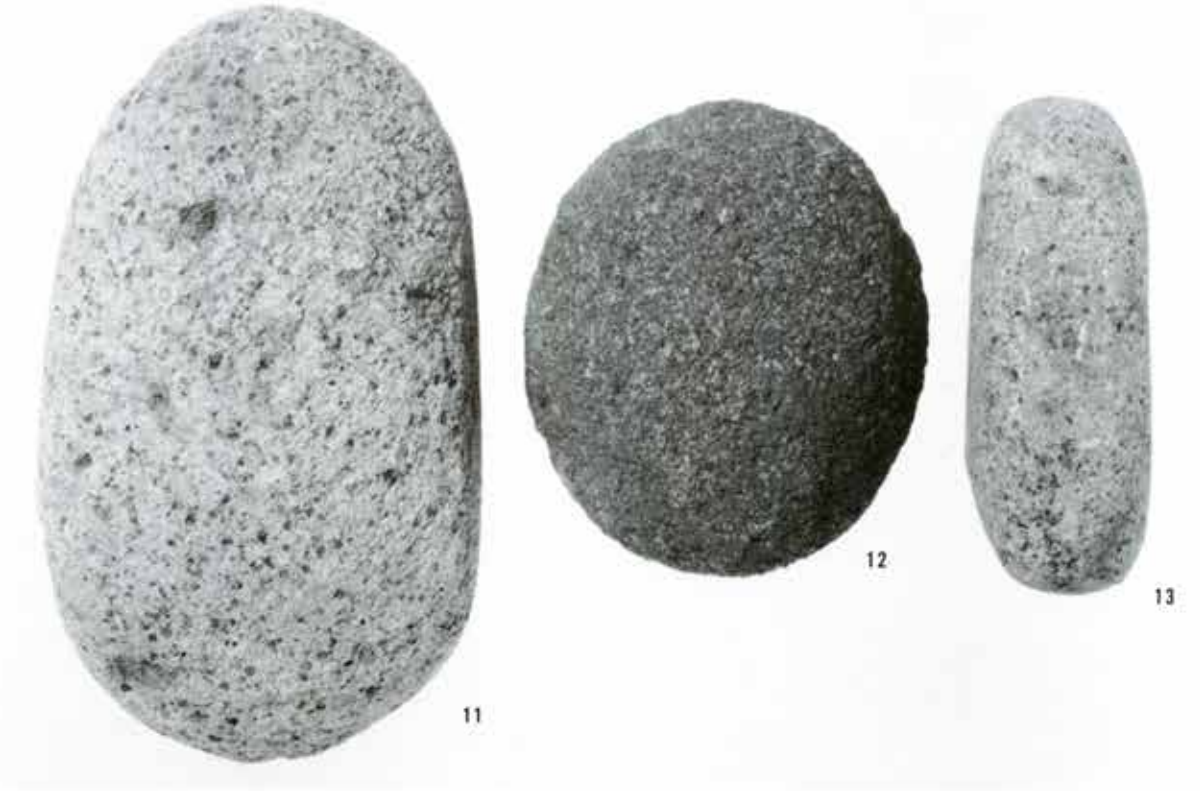
第2号住居跡出土石器



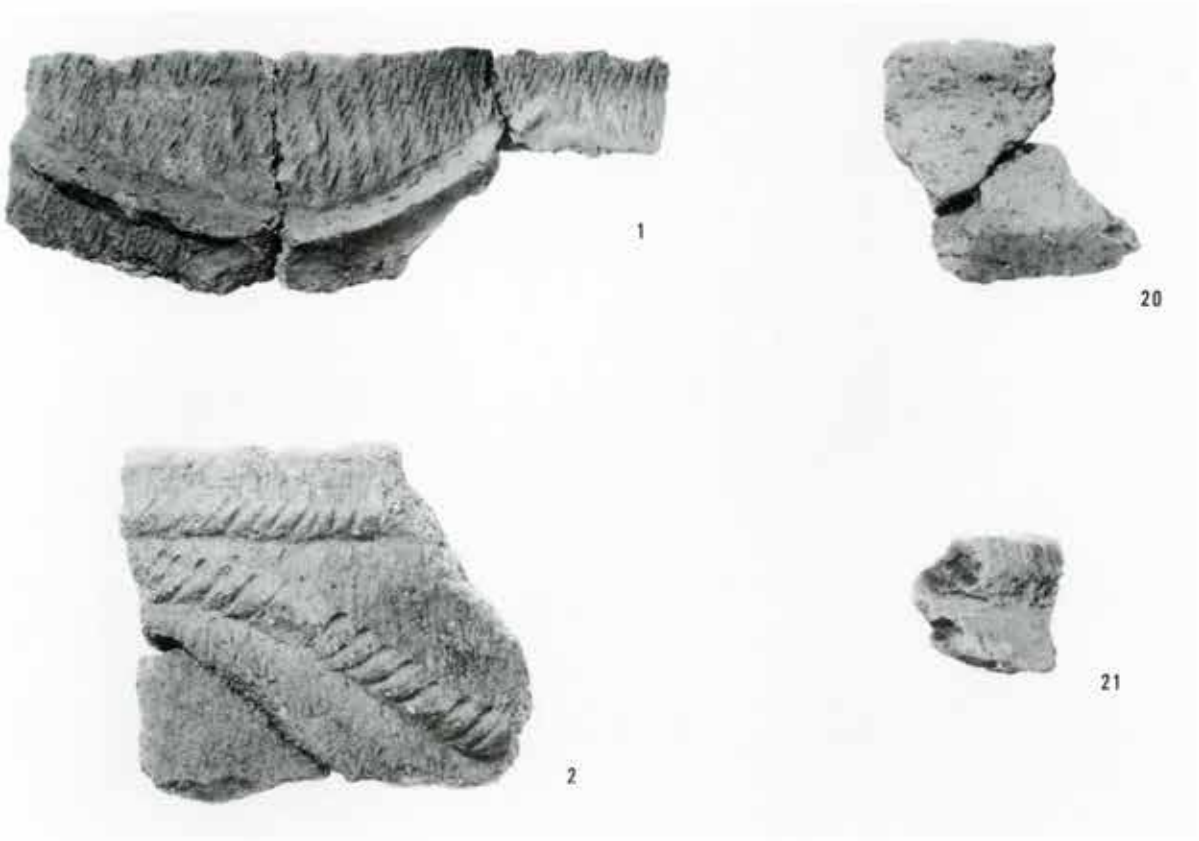
第2号住居跡出土土器



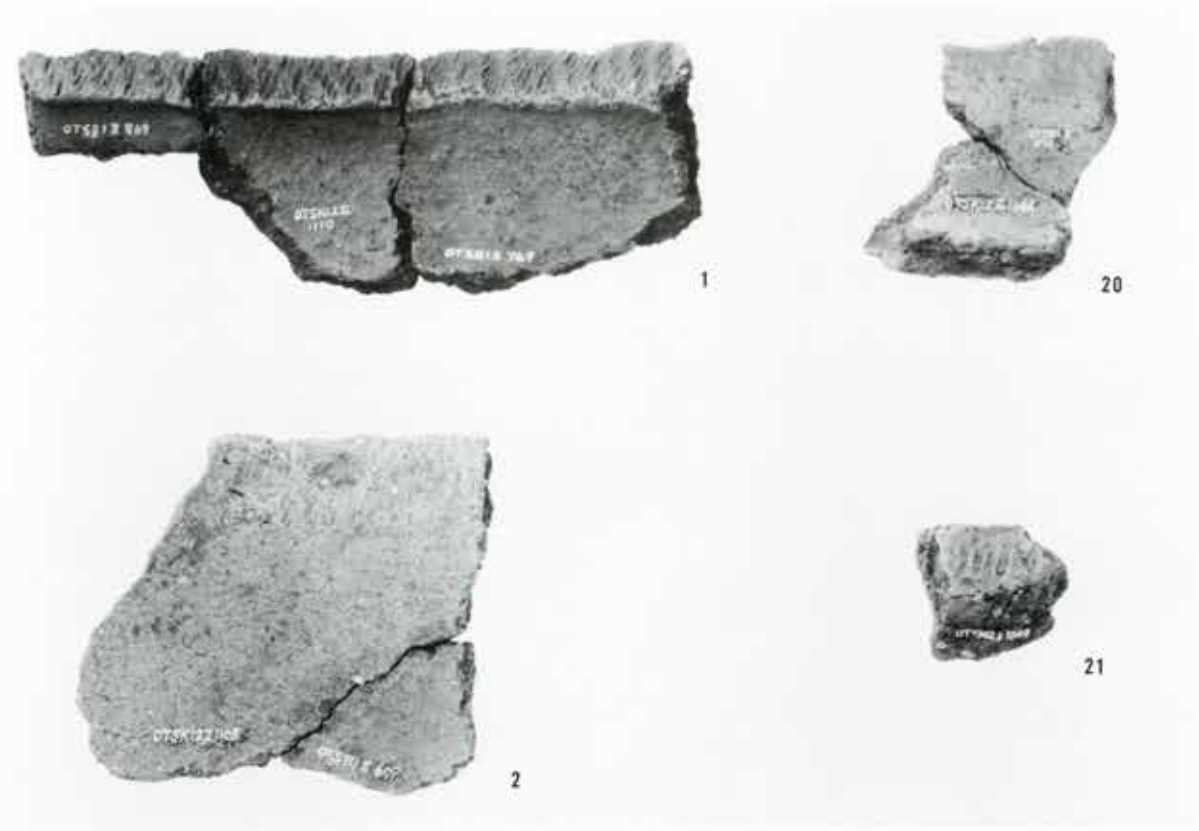
土坑出土石器①



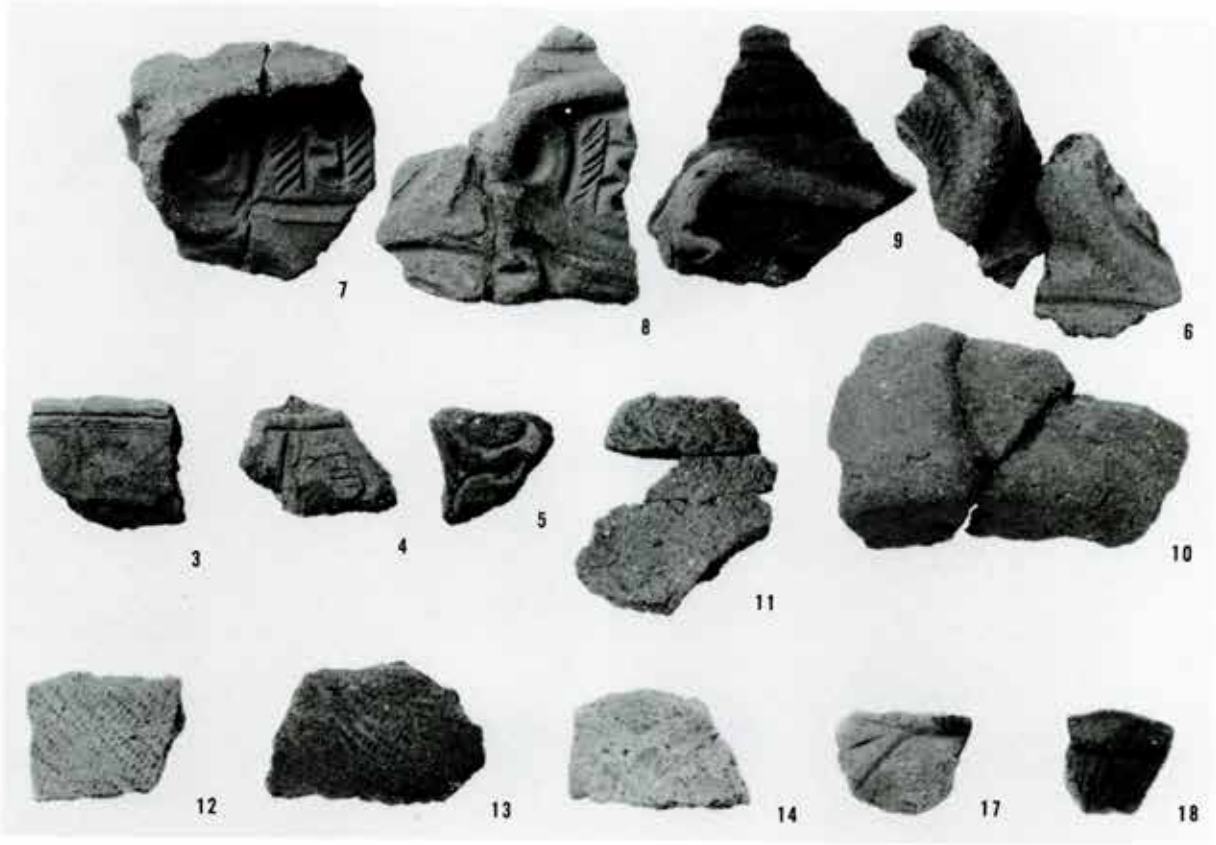
土坑出土石器②



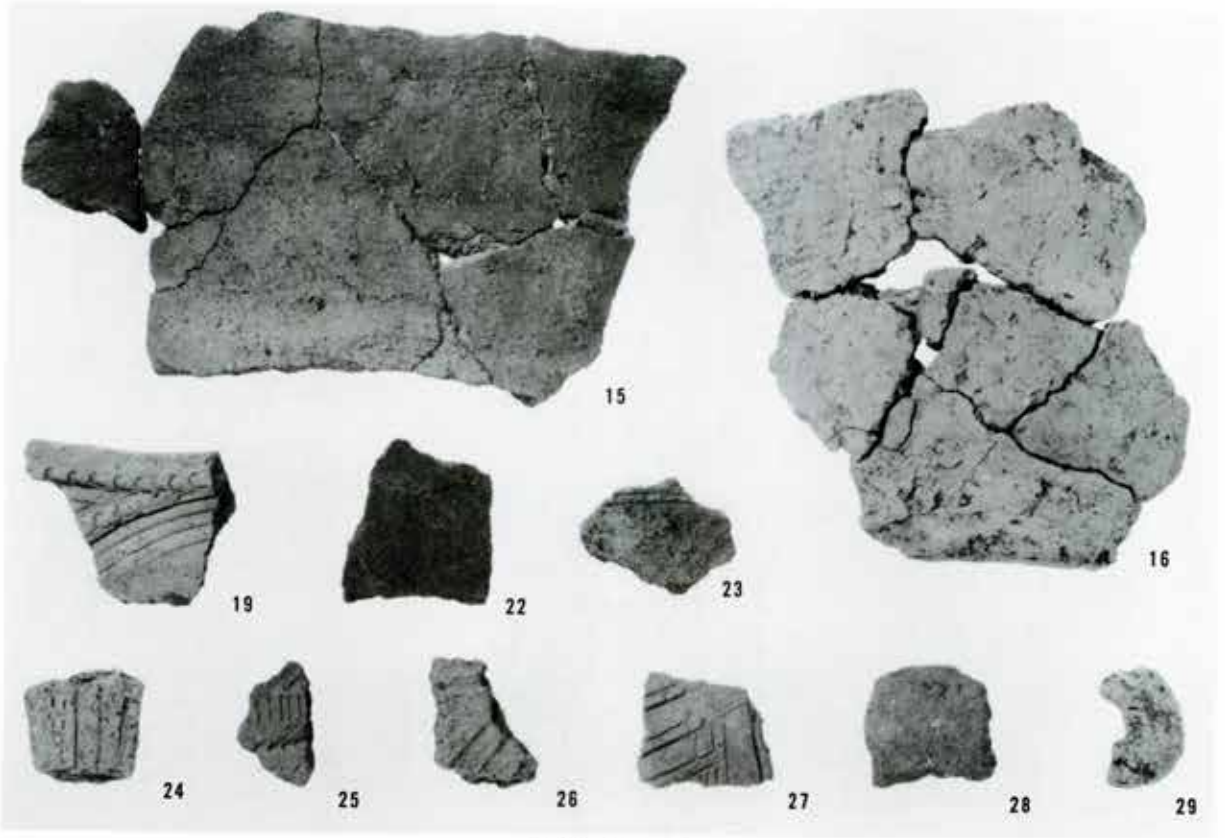
土坑出土土器①表面



土坑出土土器①裏面

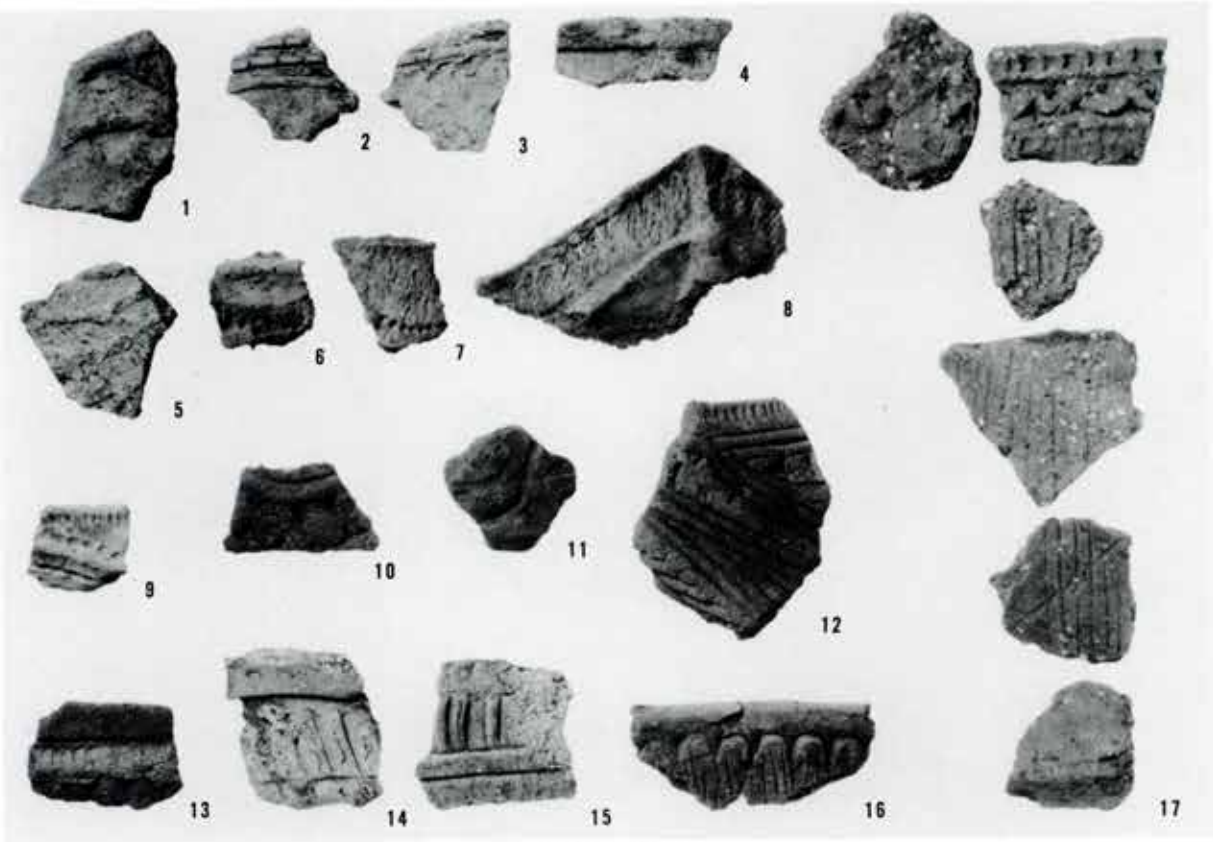


土坑出土土器②

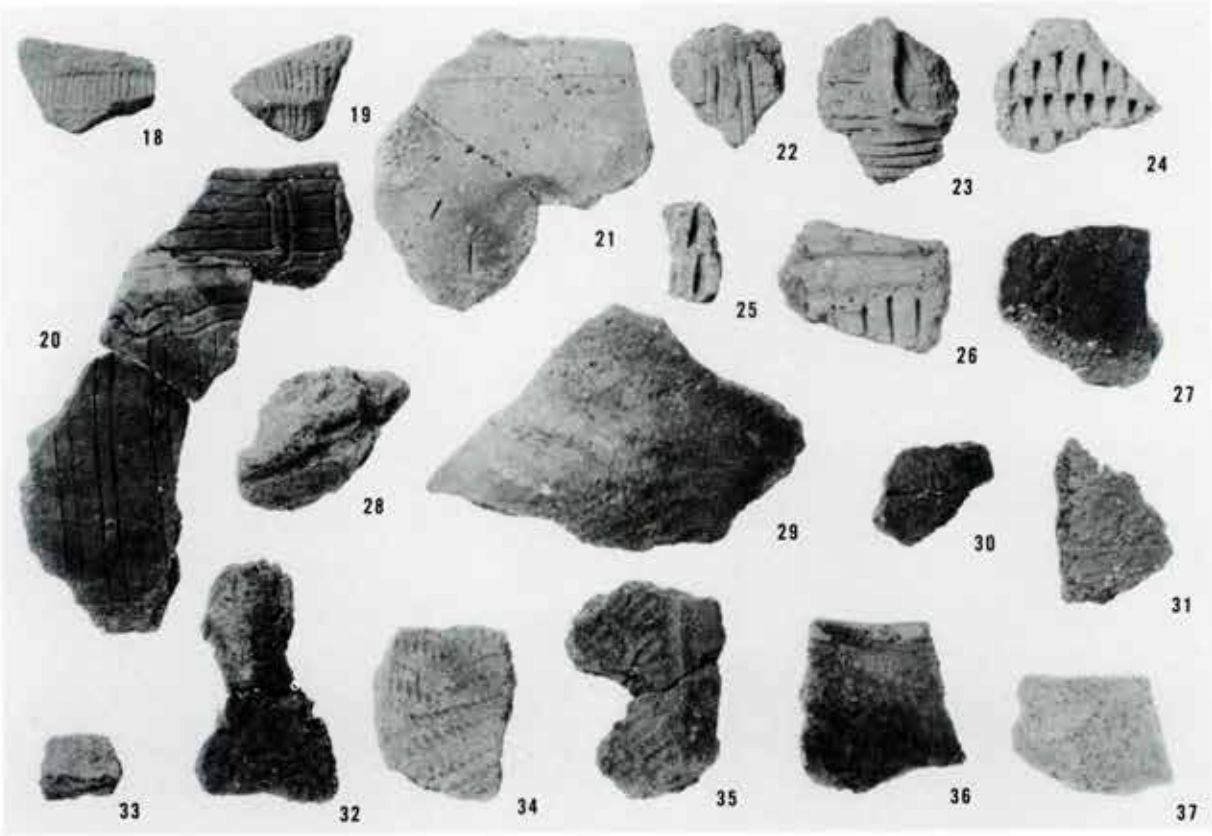


土坑出土土器③

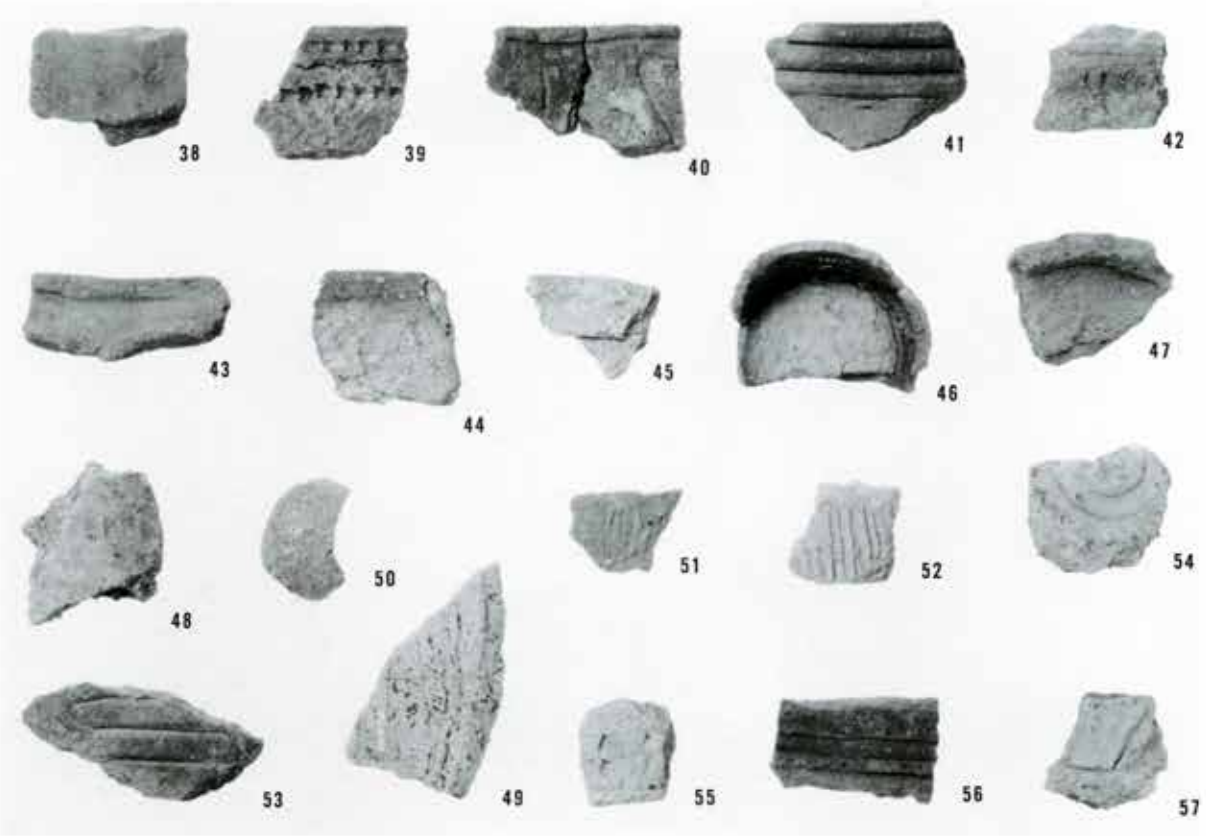
図版10



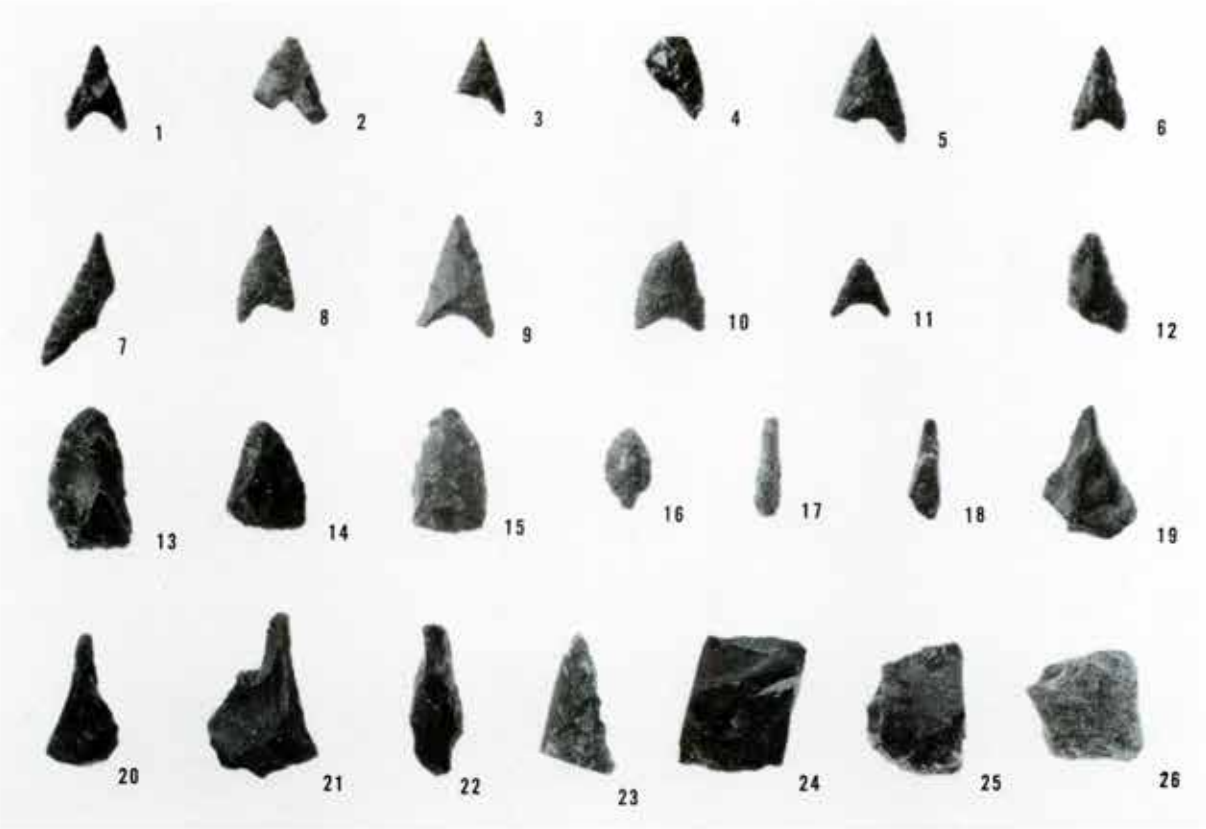
包含層出土土器①



包含層出土土器②

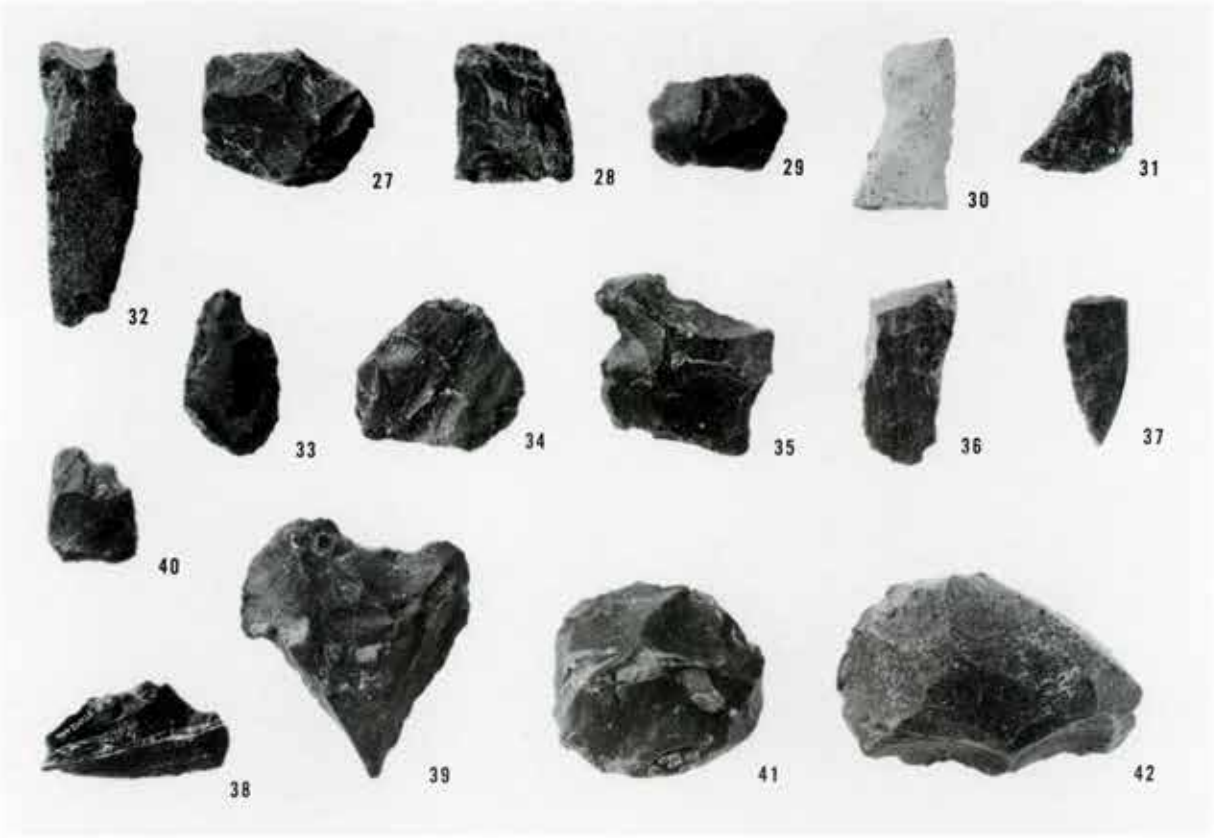


包含層出土土器③

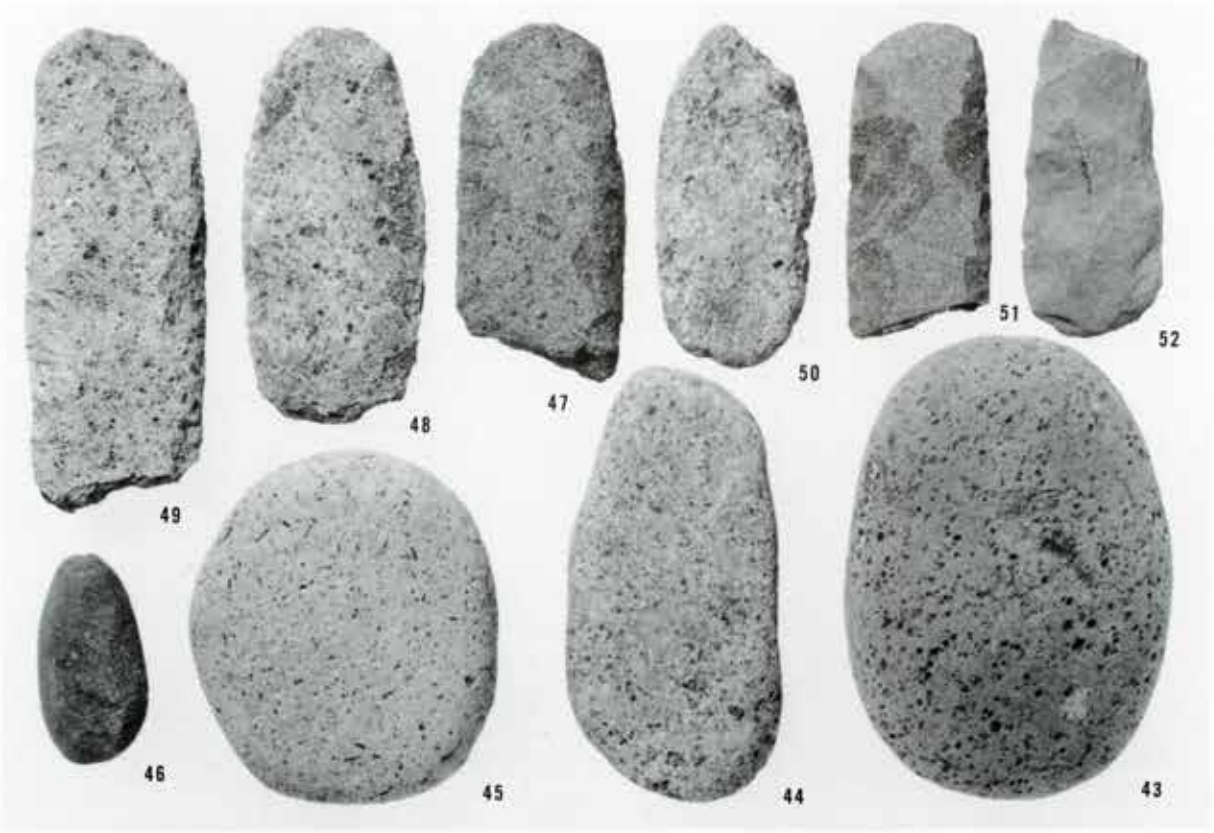


包含層出土石器①

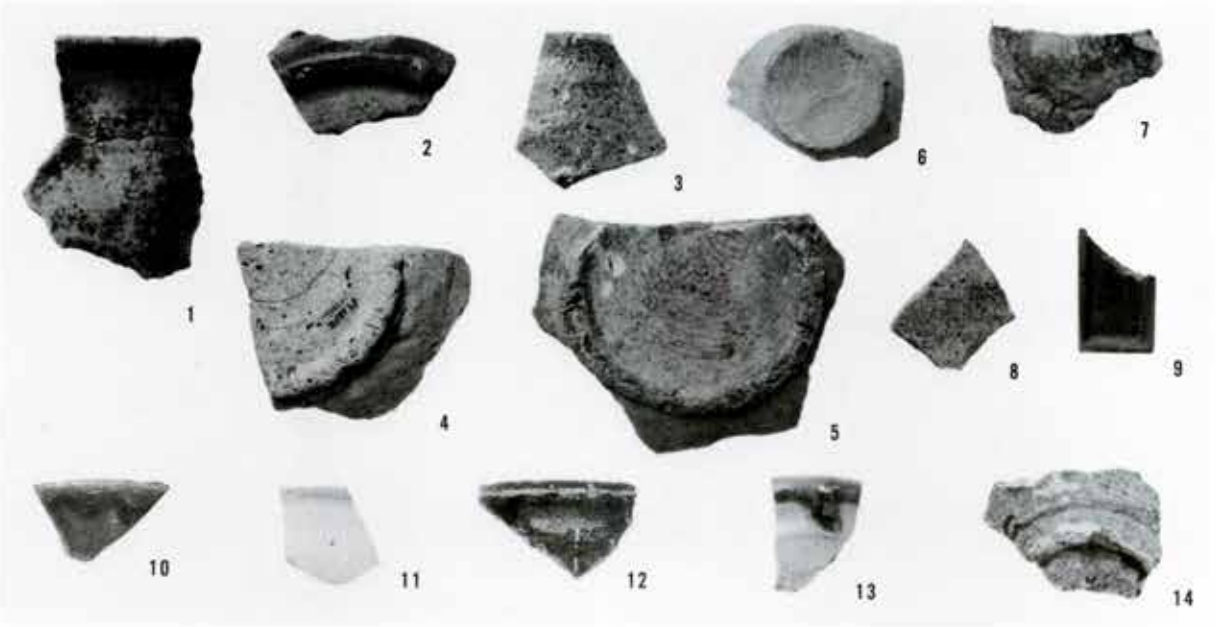
図版12

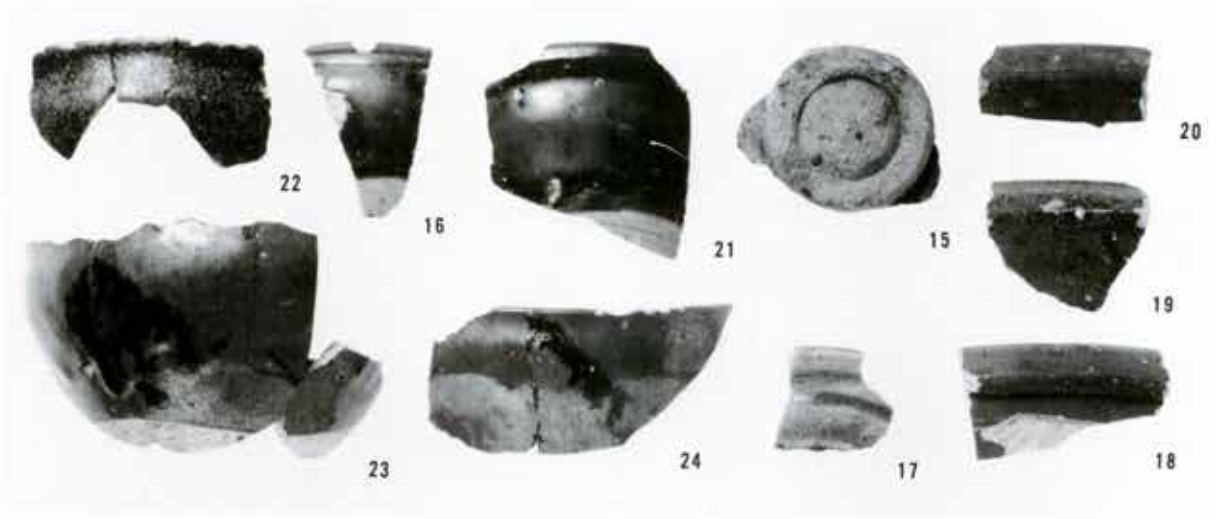


包含層出土石器②



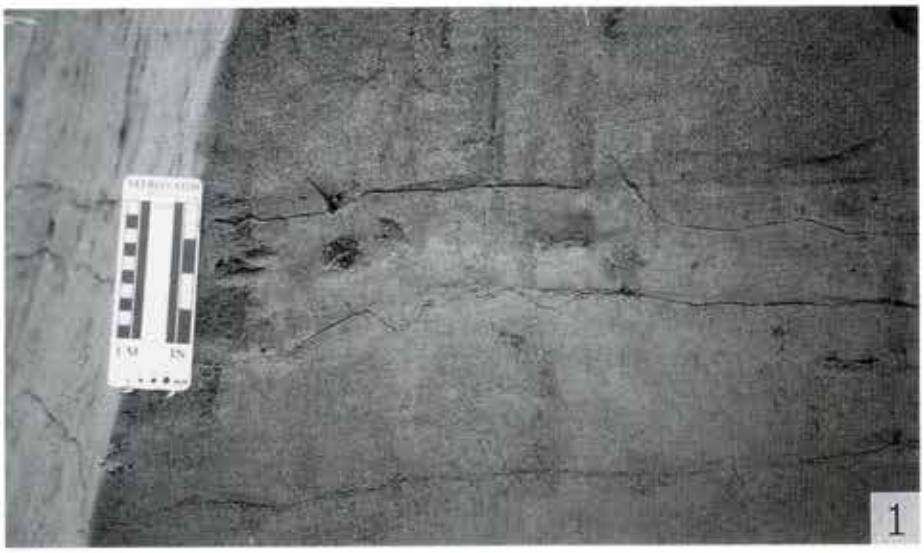
包含層出土石器③



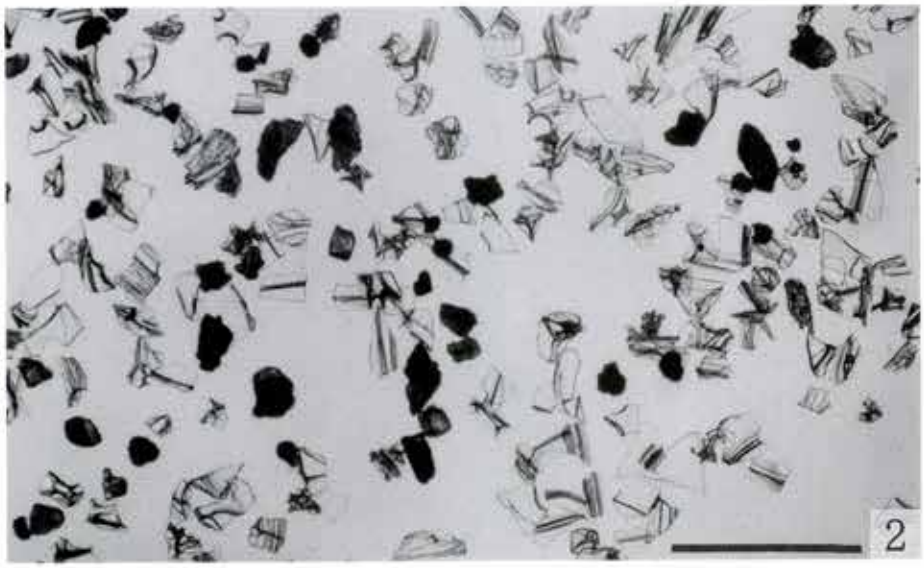


古代以降の遺物

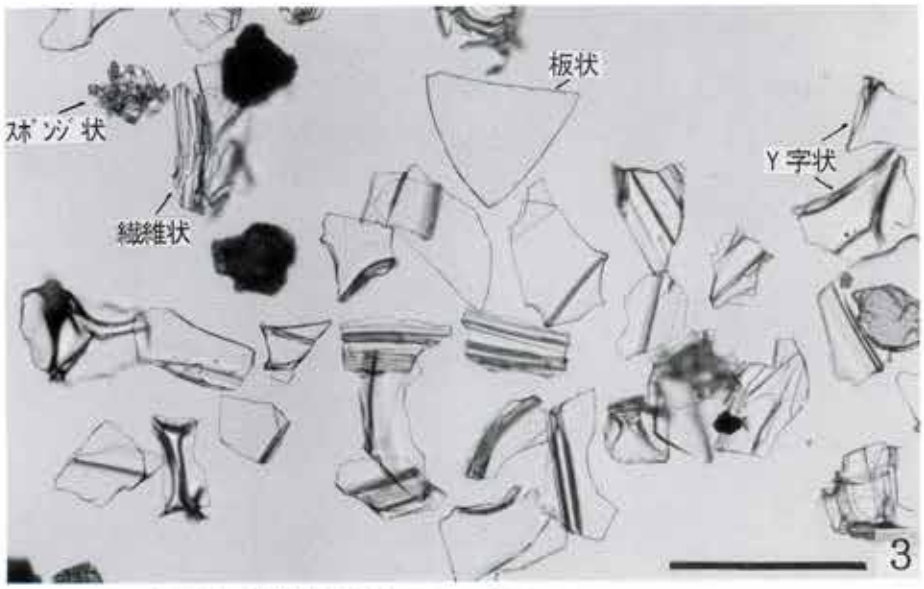
図版14



1．B－13グリッド壁面のアカホヤ火山灰



2．アカホヤ火山灰の顕微鏡写真（スケール500μm）



3．アカホヤ火山灰の顕微鏡写真（スケール200μm）

報 告 書 抄 録

ふりがな	おきたいせき
書　　名	沖 田 遺 跡
副 書 名	県営土地改良総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書
シリーズ番号	第43集
編 著 者 名	上出巳吉　小野木学　藤岡比呂志　藤根　久　古橋美智子　八賀哲夫
編 集 機 関	財団法人　岐阜県文化財保護センター
所　在　地	岐阜県岐阜市司町1（岐阜総合庁舎内）　TEL 058－264－1111(814)
発行年月日	1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号				
おきたいせき 沖 田 遺 跡	ぎふけんましたぐん 岐阜県益田郡 はぎわらちょうにしうえだ 萩原町西上田 あざおきた 字沖田	21581	00867	35° 50′ 19″	137° 13′ 54″	1997.5.12 ～ 1997.7.25	450㎡

調 査 原 因	県営土地改良事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主 な 遺 構	主　な　遺　物	特　記　事　項
沖 田 遺 跡	住居跡	縄文中期 近世	竪穴式住居 2軒 掘立柱建物跡 1棟	縄文土器 石器類 （石鏃、石錐、石垂 打製石斧など）	縄文時代中期の近世の住居跡が2軒と掘立柱建物跡が1棟検出された。

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第43集

沖　田　遺　跡

県営土地改良総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998年３月24日 印刷
1998年３月31日 刊行

編集・発行　財団法人岐阜県文化財保護センター
岐阜県岐阜市司町１（岐阜総合庁舎内）

印　刷　大　進　社　高山市有楽町40番地